

喻ふれば、天下は器の至りて神、至りて靈なる者なり、莊子王には以て大器と爲し、史記伯夷には以て重器と爲す、皆此章の神器の語に本づきたる也。

【直解】第一節、天下を治むるに、自然の道に従はずして、作爲する所あるの不可なることを説く。老子の學は何事も自然に任すことを貴ぶ、故に聖人が天下を治むるにも、天下の民が己の徳を慕ひて推し戴き、是非にと懇願するに由りて、己むを得ず出でて治むる也。然るに之に反して自ら進み出でて天下の民の心を得んとして、種種の法令などを布き、人力を用ひ作爲して民を治めんとするは吾(老子自ら謂ふ)決して其の能く爲すことを得ざるを知るのみ、其の故如何となれば、天下は至神至靈の器なれば、人間の力にて作爲して治めんとするも、到底如何とも爲すことを得べからざるもの也。すべて萬物には各、自然の天性あり、其の自然の天性に従ひて無爲の化を施すべきもの也。然るに我より手を出し作爲して治めんとするは、却つて失敗を招くに至るもの也。例へば苗の成長の運きを憂へて、手もて之を引き振れば、苗は則ち穢るるが如し、又民の

○第五十七章、取天下、常以無事。

○第六十四章、輔萬物之自然、而不敢爲。

方から歸服し來る者は、何時までも離れ去ることなけれども、我より手を出し、堅く執り守りて變通することなければ、却つて之を亡失するに至るもの也。例へば移し種ゑたる樹の生枯を氣遣ひて、朝夕其の樹を撫で搖がさば、樹の天性を害して枯死するに至るが如し、六十四章に爲者、敗之、執者失之、聖人無爲、故無敗、無執、故無失とあり、并せて考ふべき也。

凡物或行或隨、或嘘或吹、或強或羸、或載或墮、是以聖人去甚、去奢、去泰。

【譯讀】凡そ物或は行き或は隨ひ、或は嘘き或は吹き、或は強く或は羸く、或は載り或は墮る、是を以て聖人は甚を去り奢を去り泰を去る。

○或嘘、奕本、嘘作噓、河上作响、彌作噓、或羸、奕本羸作到、或載、奕本、作或培或墮、奕

【字義】○行 先に立ちて行く也。○隨 後より隨ふ也。○嘘 緩く氣を吹きて温むる也。○吹 急に吹きて寒くする也。○羸 弱き也。○載 成す也。○墮 壞るるなり、墜は俗字。○甚 劇だ過ぎたる也。孟子離婁に仲尼不爲己甚、者とあるは、ここの去甚と同じ。○奢 儉の反對なり。○泰 驕泰なり、去泰は矜らず驕らざる也、甚は事を以

て言ひ、奢は財を以て言ひ、泰は徳を以て言ふ、皆易簡の反對なり。

【直解】第二節、前節を承けて聖人は物の自然に従ひて其の甚だしきものを去ることを説く。上述の如く天下の事物は、各其の天性がありて、或は先だちて行く者もあれば、又先に行くことを好まずして物の後に随ひて行く者もあり。或は緩く息を吹きかけて温むるもの、例へば火の如き者もあれば、又急に氣を吹きて寒すもの、例へば水の如き者もあり。或は極めて剛強なる者、例へば虎狼の如き者もあれば、又柔弱なる者、例へば羊兔の如き者もあり。或は春の萬物を發生するが如く功を成す者もあれば、又秋の草木を枯らすが如く毀ち墮る者もある也。是を以て聖人は萬物の自然の性に従つて、その天性を十分に遂ぐることを得しめ、自然の勢に因りて善く之を導き、無理に人力を以て作爲することを爲さざる也。只聖人は何事も無爲を貴ぶが故に、其の天下を治むるには、すべて自然に随ひて、特に甚だしく常度に過ぎたる者を去りて、成るべく事を控目に爲さしめ、又身分不相應の奢侈を去りて、儉素に就かしめ、驕り亢ぶる弊を去りて、恭謙を取るやうにする也。此の如くすれば、民の私欲も

第五十三章、服文采、帶利劍、厭飲食、財貨有餘、是謂盜夸。

寡くなり、風俗も淳朴となりて、天下は自ら治る也。漢書黃霸傳に凡、治道去其甚、泰者耳とあるは、蓋し老子の此章に本づく。林希逸の注に、甚奢泰ノ三者ハ、皆過當ノ名ナリ、亦前章第二十章ノ餘食贅行ノ意ナリ、聖人之ヲ去ル者ハ、心ナク累ナク、爲スコトナク、求ムルコト無ケレバ也、此章結ビ得テ其ノ文又奇ナリ、甚奢泰ノ三字ハ、只是レ一意、但此ノ如ク語ヲ下スハ、唯是レ其ノ鼓舞ノ筆ノミニアラズ、亦申ネテ其ノ甚ダ不可ナルノ意ヲ言フナリ、其ノ玄妙ヲ言フトキハ、則チ玄之又玄第一章トイヒ、マタ曰、大曰逝、曰遠第二十章ハ皆是レ一樣ノ文法ナリ、讀ム者其ノ意ヲ悟ラズシテ他老子ノ文字ノ奇處ヲ見ズ、又牽強ノ說多シト、この說最も好し、老子を讀む者知らざるべからず。

○河上公、以此爲儉武章。  
○沈曰、此章言兵不貴強。

### 以道佐人主章第三十 七十八言

【章旨】此章前章の自然を貴びて、去甚の意を承け、強兵の害を言ひて、人の強壯に過ぐることを戒む。

○以道佐人主者、不以兵強天下。其事好還。師之所處、荆棘生焉。大軍之後、必有凶年。

○佐、唐景龍碑爲作。

【譯讀】道を以て人主を佐くる者は、兵を以て天下に強くせず。其の事還ることを好む。師の處る所は、荆棘生ず。大軍の後には、必ず凶年あり。

【字義】○道 虛無自然の道。○好還 還音セン旋と通ず、猶ほ喜旋といふが如し、めぐりて本の處へかへる也。○師 衆なり、衆くの軍隊をいふ、必ずしも古の兵制二千五百人の稱たるに拘泥せず。○荆棘 「ウバラ」也。トゲの多き木なり、古戰場に多く生ずるは、人の怒氣の化して「ウバラ」となりたるなり、故に人の足をさして血を出し、人の衣にひつかかりてやぶると言ひ傳ふ。○凶年 水旱等にて五穀の實らざる年即ち飢饉なり、詩經周頌篇に綏萬邦、慶豊年とあるは、民を治むるの事、漸く修まりて殺氣漸く除き、比年豊穰の福を獲るをいふ、之に反して殺氣結ばれて凶年の厄ある也。

【直解】第一節強兵の害を説く。俗人は兎角剛強なる事を好めども、虛無自然の道を體する者は、之に反して柔弱を貴びて剛強を嫌ひ、剛強なるは却つて禍を招くの本なりと爲して之を戒むる也。故に道を以て人主を輔佐する者は、兵威を以て強を天下に稱することを爲さざる也。次章にも兵者不祥之器とあるが如く、古の聖人が兵を用ふるは、殷の湯王、周の武王の如き、皆萬萬已むことを得ざるに出づ、若し徒に兵の強きを以て天下に誇る者は、必ず四面に敵を受けて、自ら滅亡の禍を招くに至る。彼の獨逸が無暗に軍國主義を振り舞はして、一時霸を世界に稱せしと雖も、空しく一場の夢と化して、今日の慘狀を見るに至りしを觀ても知るべき也。それ故に道を以て天下を服する時は、天下敢て服せざる者なけれども、兵威を以て天下に強からんことを欲せば、人も亦將に我に對抗せんとして、獨逸の如き慘禍を招くに至る。故に其の事還ることを好む

○蘇轍曰、德所不能綏、政所不能服、不得已而後、以兵決之耳。

以道佐人主章第三十

とはいふ也。楚の靈王、齊の湣王、秦の始皇、漢の武帝の如き、或は以て其の身を殺し、或は以て子孫に禍す、人の毒とする所、鬼の疾む所未だ免るるを得る者あらざる也。これ天道自然の理なり、天道は何事も必ず循環りて本に還る者なり、故に強き者も、何時までも其の強き勢を保つこと能はずして、復弱くなる時あり、我狂暴の事を行ひて人に加ふれば、人も亦狂暴を以て我に報い、爲めに意外の慘禍を招くに至る、易文に積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、また孟子梁惠に曾子曰、戒之、戒之、出乎爾者、反乎爾者也、あるは是れ也、佛家にていふ因果應報も、亦この理に外ならず、況や師即ち衆くの軍隊が久しく駐屯して戦争の止まざる處は、壯丁は皆徴發せられて兵となり、家に残されたる老幼婦女は餓口に窮し、其の力微にして耕作すること能はず、土地は荒れ果てて、ウバラなどの生ひ茂るに任すのみ、加之長き戦争の爲めに、幾百萬の生靈を亡ひたる怨毒の殺氣は、結ばれて天地の和氣を感傷し、それが爲めに陰陽調はず、風雨時ならず、洪水旱魃交し、至り、五穀も實らざるに至る也、故に古來大戦争の後には必ず凶年即ち飢饉の悪しき歳が來るなり、師の天下を

毒するの慘害たる、此の如くそれ甚だし、故に道を以て人主を輔佐する者は、決して兵を以て強を天下に稱することを爲さざる也、蓋し老子富國強兵論の旺盛なりし戦國の世に生れて、屢兵禍の慘狀を目撃す、故に強兵の害を説きて深く之を戒めたる也。

○故善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂不道。不道早已。

○故善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂不道。不道早已。

【譯讀】故に善なる者は果にして而して已む。敢て以て強を取らず。果にして而して矜ること勿かれ。果にして而して伐ること勿かれ。果にして而して驕ること勿かれ。果にして而して已むことを得ず。果にして而して強なること勿かれ。物壯なるときは則ち老ゆ。是を不道と謂ふ。不道は早く已む。

【字義】○善者 善く兵を用ふる者をいふ。○果 果毅なり、決斷して事

を成し遂ぐる義。○矜 自ら才能を待みてほこる也。○伐 自ら功にほこる也。○驕 勢の恣肆マホシイなるなり。○不道 一本不を非に作る、天道に背くをいふ。○已 止なり、早已は早く止みて久しきこと能はざる也。

【直解】第二節、善く兵を用ふる者は果毅を取りて強壯を取らざる所以を説く。上述の如くなるが故に、善く兵を用ふる者は、果斷にして天下萬民の塗炭の苦難を濟ふ爲めにし、其の目的を成し遂げて止むのみ。其の上に出で自ら強き者となりて兵威を奮ふことを爲さざる也。さればすでに民の難を濟ふことを成し遂げたる上は、其の才能に矜ヒること勿かれ、難を濟ひて其の功に伐ヒること勿かれ、難を濟ひて其の勢に驕ハシりて恣ハシにするに勿かれ、其の難を濟ふ爲めに兵を用ふるは、事を好みて之を爲すにあらず、民の苦を救はんとする惻隱の至情已むことを得ざるに出でたるなれば、勝負が決すれば、戦は直ちに弭ヒめるやうにし、難を濟ひたる上、更に強く兵威を耀カかすやうの事を爲すこと勿かれ、豊臣秀吉が國亂を平定せし後、自ら足ることを知らず、更に兵威を海外に耀かさんと

して、征韓の師を興し、中道にして身死し、やがて家亡ぶるに至りしは、この老子の教に背きたれば也。凡そ物は強壯なれば、無爲なること能はず、疲勞して忽ち老衰するに至るは、天地自然の道なり、それと同じく兵威を強く奮ふが如きは、やがて敗亡の禍を招くに至る、これを天道にあらずといふ、天道に背く事は早く亡びて止み、久しきこと能はざる也。されば常に柔弱にして争はざる徳を守ること、是れ實に長久の道なり、彼の剛強なる齒の忽ちに墮おちて、柔弱なる舌の一生存在するにても、其の理を悟るべき也。

○河上公、以此爲「僞武章」。  
○沈曰、此章言兵之不祥。

○佳、奕本作「美」。陳象古、兵下無「者」字。  
○是以、河上、弱無此二字。

夫佳兵章第三十一 一百一十六言

【章旨】此章前章を承けて兵は凶器なれば、已むことを得ざるにあらざれば、用ふべからざることを説く。

夫佳兵者不祥之器物或惡之故有道者不處是以君子居則貴左用兵則貴右

【譯讀】夫れ兵を佳する者は不祥なり、物或は之を惡む。故に有道者は處らず。是を以て君子居るときは、則ち左を貴ぶ。兵を用ふるときは、則ち右を貴ぶ。

【字義】○佳兵 兵は刃物即ち矛槍劍の類。佳は嘉なり、好なり、よみし好む義。○不祥 祥は吉なり、凶の反對なり。不祥は不吉なり。凡百の器械は皆生を養ふの具なれども、只兵器のみは人を殺すを以て用と爲す、故に不吉とする也。○物 造物即ち主宰を謂ふ。○或 有の義にて輕し、易卦の或承之、羞之の或に同じ。○居 平居を謂ふ。

【直解】第一節、兵の不祥なることを言ふ。兵を用ふることをよみし喜むは不祥即ち目出たからざる事なり、何となれば兵を喜むこと愈甚だしければ、人を殺すこと愈甚だし、無罪の民をして肝腦地に塗れ、積屍山を爲し、流血河を成し、孤兒寡婦、哭泣の聲絶えず、其の慘狀目も當てられざれば也。故に造物者も、或は之を惡むことある也。故に道を心得たる人は、兵を用ふる場合には居らざる也。是を以て君子即ち有道者は平居無事の時即ち吉禮には、左の方を貴び、車に乗るにも貴人は左の方に乗る也。其の故は、人南面して北を背にして立つ時は、左は東にて陽に屬し、陽氣は萬物を生育するものなれば也。而るに兵を用ふる時には、喪の禮に従ひて右の方を貴ぶ。右は西にて陰に屬し、陰氣は物を戕ひ害するものなれば也。此の如く兵を用ふる時には、喪の禮と同じくわざわざ席をかへ、右の方を貴ぶ所以は、是れ兵は不吉の凶器たることを明かにする也。

兵不祥之器非君子器不得已而用之恬淡爲上勝而不美而美之者是樂殺人樂殺人者則不可得志於天

○恬淡爲上、奕本作「恬憺爲上」。  
○勝而不美、奕本作「故不美也」。

若美必樂之。  
○而美之者、是樂殺人、奕本作樂之者是樂殺人也。

### 下矣。

【譯讀】兵は不祥の器にして、君子の器にあらず。已むことを得ずして而して之を用ふれば、恬淡を上と爲す。勝ちて而かも美とせず。而るに之を美とする者は、是れ人を殺すことを樂むなり。人を殺すことを樂む者は、則ち、志を天下に得べからず。

【字義】○恬淡 恬は靜なり、淡は一に澹に作る、サツバリとしたる也、即ち心が安靜にして無欲なる也。土地を貪り國を富まさんとするなどの欲心なき也。○上 尙なり、たふとぶ義。○得志 大願成就の義。

【直解】第二節、兵を用ふるは已むことを得ざるに出づ、故に兵を用ふるを樂む者は、志を天下に得ざることを説く。書經大禹に好生之德、洽于民心。また左傳十年に孔子曰、子爲政焉、用殺、また荀子哀公に古之王者、其政好生而惡殺焉とありて、古の聖賢が天地の萬物を生育するに法り、慈仁にして生を好む心の篤きことを知るべし。而るに兵即ち刃物に至りては、人を殺すことを目的とす、故に兵は不祥即ち目出たからざる凶器に

○莊子(刻意)虛無恬淡乃合天德。  
○第四十六章、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得。

して、君子の用ふることを樂む器にあらずといふ也。されば殘シムゴトヲを禁じ、暴を止め、民の塗炭の苦を救ふ爲めに、萬萬已むことを得ずして、而る後に之を用ふることあるも、必ずサツバリとして無欲なるを貴び、土地を貪り版圖を擴め、國家を富まさんとするなどの野心なき也。故に戰に勝ちて亂を定め得たれば、直ちに兵を強め、勝ちたりとも、多くの敵味方の人を殺したることを深く遺憾に思ひ、決して之を美事として、盛んに祝筵を開きたり、銅像や凱旋門を建てて、威武を炫耀するが如き馬鹿氣たる事を爲さざる也。而るに若し之を美として褒め稱へ、勝に誇りてお祭騒を爲して兵威を觀すが如き者は、是れ人を殺すことを樂む者なり。人を殺すことを樂む者は、天地の生を好むの德に背き、決して己の志を天下に伸ぶることは出來ざる也。支那の項羽、白起の徒、若くは佛國の拿破崙の如き英雄の末路を見るに、多くは老子の此訓を遵守せざるに坐する也。徳川家康が關ヶ原の役、天下の半分も敵になりたるに、戰勝の後降服せし敵をば、數人を除く外は、すべて其の死罪を赦免し、以て天下一統の志を成就せしが如きは、能く此訓の旨に合したるもの也。孟子

上王に襄王問曰、天下惡乎定、吾對曰、定于<sub>一</sub>、孰能<sub>一</sub>、<sub>一</sub>之對曰、不嗜殺<sub>レ</sub>人者、能<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>と、蓋し亦此意を言ふ也。

故吉事尙左、凶事尙右、是以偏將軍處左、上將軍處右、言居上勢則以喪禮處之、殺人衆多、以悲哀泣之、戰勝以喪禮處之。

○河上、弼無是以二字處左處右、弼本處並作居、衆多、弼作之衆、○以悲哀泣之、突本句上有則字、○戰勝下、突本、有者則二字。

【譯讀】故に吉事は左を尙び、凶事は右を尙ぶ。是を以て偏將軍は左に處り、上將軍は右に處る。喪禮を以て之に處るを言ふ。人を殺すこと衆多なれば、悲哀を以て之に泣く。戰勝せば喪禮を以て之に處る。

【字義】○偏將軍 かたかたの大將、即ち副將なり。○上將軍 總大將なり。○喪禮 人の死を悲みて一定の期間凶服を著けてうれひにこもり居る禮なり。

【直解】第三節、重ねて兵の不祥なることを詳言す。上述の如くなるが故に、吉事はすべて左(陽)を貴び、不吉なる事は右(陰)を貴ぶ。これを以て兵を用

ふる時は、副將は平生の上席たる左に居り、總大將は平生の下席たる右に居る。全く平生の席とは反對に取り換へる也。かくする意味は、兵は人を殺す所の凶器逆徳なるが故に、喪中の禮を以て之を處置する所以なり。且つ敵味方の人を殺すこと多ければ、唐詩に所謂一將功成萬骨枯とあるが如く、殺されたる人は勿論、其の遺族に對しても深く氣の毒に思ひ、悲哀の眞情を以て哭泣したとひ戰に勝ちても、勝ち誇りて盛んに凱旋を祝ふなどの輕擧を爲さず、喪中の禮を以て之を處置する也。古、兵を出すには葬式の時に棺を出すと同じく凶門即ち北方に出づる門よりするは、亦この故なり。禮記下<sub>禮記</sub>に王尹商陽每斃一人、揜其目、(中略)孔子曰、殺人之中、又有禮焉と、聖人人を殺すことを惡むの意、以て見るべき也。正に此章の意と并せて考ふべき也。

【辨正】王純甫云ふ、此章兵者不祥之器ヨリ以下ハ古ノ義疏ノ經ニ渾入セシ者ニ似タリ、其ノ文義ヲ詳カニスレバ見ルベシと、此說從ふべきに似たり。夫佳兵者不祥之器の之器二字は衍文、刪るべし。又言居上勢則以喪禮處之の居上勢則の四字は河上本、王本並に之れ無し、從ふべき也。



○河上公、以此爲聖德章。  
○沈曰、此章貴樸。

○不致臣、奕本作莫能臣、弱本臣下、有也字。  
○王侯、河上、竊竝作侯王、守下有之字。

### 道常無名章第三十二 七十言

【章旨】此章、道の體用を論じ、王侯無爲の道を守らば天下自ら之に歸服するを言ふ。

○道常無名、樸雖小、天下不敢臣、王侯若能守、萬物將自賓。

【譯讀】道の常は名なし、樸は小なりと雖も、天下敢て臣とせず、王侯若し能く守らば、萬物將に自ら賓せんとなす。

【字義】○樸 山より伐り出したるままにて、未だ人工を加へざるあら木なり、二十八章の復歸於樸、又三十七章の無名之樸の樸に同じ、假りて虚無の道又はそれを全うする天性の渾厚なるに喩ふ。○小 文飾なく卑微なるをいふ。○臣 臣として使役する義。○賓 客なり、歸服して來るをいふ。

【直解】第一節、王侯若し無名の道を守りて治むれば、天下自ら歸服し來る

を言ふ、是れ一章の主意、凡そ器物の如く形ある者は、それぞれの名あり、四角なるは方と名づけ、丸きは圓と名づく、只道の眞常なる者は、もと形なく、虚無なる者なり、故に名のつけやう無き也、其の理由はすでに首章の道可道非常、道名可名非常、名の條にて説明せり、并せて考ふべき也、すべて智者は才能を以て使ふべく、勇者は武事を以て役すべく、其の他一技一藝に長じたる人は、各其の長する所に従つて器使すべし、只樸即ち無名なる虚無の大道を保ち守る人は、外貌は一見愚なるが如く、甚だ見榮なく卑微なるが如くなり、雖も、百官衆有司の如き器械的人物とは異りて、立派なる君長の徳を具へて、王侯の賓師ともなるを得べし、かかる全徳を具へたる人は、天下得て之を臣として使役するものなき也、されば王侯たる者、若し能くこの樸の道を守り、天性渾厚にして、剛柔好惡の如き一偏にかたよらざれば、天下の萬民は自ら其の徳を慕ひて、四方より賓服し來るべき也、賓の字を用ひたるは上の臣字と、下の均字と韻を叶へたる也、第三十七章に王侯若能守、萬物將自化とあると意は則ち略相同じ。

○第一章、無名天地之始、第四十一章、道隱無名。

○第五十七章、我無爲而民自化。

○人、彌本作民。突本、均下有焉字。

### 天地相合、以降甘露。人莫之令、而自均。

【譯讀】天地相合ひて、以て甘露を降す。人之を令すること莫くして而して自ら均し。

【字義】○甘露 天下太平の瑞兆として降る甘き味の露。論衡に甘露味如飴蜜、王者太平則降とあり。○均 平なり、恩化廣く被り、物として其の生を遂げざるなきをいふ。

【直解】第二節、天も人も道理は一つにして、皆樸即ち自然の道を貴ぶことを言ふ。上述の如く王侯もし能く純真なる樸即ち自然の道を守り、天下賓服して至治の世となれば、天地陰陽の氣も相和合し、天氣は下降し、地氣は上騰して、而る後に太平の瑞兆たる甘露も降るなり。故に王者自然の道に法りて作爲する所なくば、別に六ヶ敷命令などを出だして干渉すること無けれども、萬物は自然に其の徳に化して、各其の生を遂ぐることを得て、天下は自ら平均に治まることを得るなり、これを無爲の治といふ也。

○第五十七章、我好靜而民自正。

### 始制有名、名亦既有。夫亦將知止、知止所以不殆。

【譯讀】始めて制して名あり、名も亦既に有り、夫れ亦將に止まることを知らんとす。止まることを知れば殆からざる所以なり。

【字義】○始制有名 樸は未だ制せざるの稱、無爲の道をいふ、それを制して柱とか桷とか板とか其の他種種の器物に作れば、それぞれの名が出る也。第二十八章に樸散則爲器、故大制不割とあると其の意同じ。無爲の道たる樸が分れ散ずれば仁義聰明などの器となるをいふ。

【直解】第三節、樸が散じて器となり、而る後に名あり、名もすでに出来たる上は捨つること能はず、只其の止まる所を知れば危からざる所以を説く。さて無名の樸を制し割きて、柱とか板とかに作れば、始めて種種の名が生ずる也。それと同じく、樸に喩ふべき無爲自然の道が分れ散じて器となれば、仁義忠孝聰明などの名が生ずる也。これ亦人智が開け物質的文明が進むに従ひて生ずる自然の趨勢なり。さればかくして名の既に出来たる上は、一概に之を捨つべきにあらずと雖も、第十六章に物芸芸

○第一章、有名萬物之母。第二十八章、樸散則爲器。

○第三十七章、不欲以靜天下將自定。

○第四十四章、知不足、學、知止不殆、可以長久。

○弼本無也字。

各歸其根とあるが如く、程好き處に止まりて常の道を守ることを知るを肝要とす。若し世の中が物質的文明に進むことのみを喜びて、程好き處に止まることを知らず、私欲盛んに動くやうになれば、互に智術を競ひて、奇技淫巧を貴ぶやうになり、質朴渾厚の徳は漸く薄らぎて、奢侈輕薄の陋習を馴致し、甚だしきに至りては、仁義忠孝などの美名を竊みて、世を欺き己が私利邪惡を謀る者さへ出で來て、道徳は全く廢れて、天下は大いに亂るるに至る。されば程好き處に止まることを知りて、何程物質的文明が進みても、この無名の樸の道を忘れざるやうに心掛け、宮室は其の燥濕に備ふるに取りて止み、必ずしも壯麗を求めず、飲食は其の饑渴を禦ぐに取りて止み、必ずしも其の珍羞を求めず、其の他一切質素にして其の分を守れば、身を没するまで危亡の禍に陥ることなく、長久に安泰なるを得る所以を知るべき也。

○譬道之在天下猶川谷之於江海也。

【譯讀】譬へば道の天下に在るは、猶ほ川谷の江海に於けるがごときなり。

欠

# 欠

○河上公、以此爲任成章。  
○沈曰、此章論道大。

○汎兮、奕本作汎兮、以生彌本作而、生功成不居、奕本成下有而字、河上作有而字、河上作功成而不名有。

## 大道汎兮章第三十四 六十八言

【章旨】此章道は大いにして方なし、聖人道を體して能く其の大を成すを説く。

○大道汎兮其可左右、萬物恃之以生而不辭、功成不居、衣被萬物而不爲主。

【譯讀】大道は汎として其れ左右すべし。萬物之を恃みて以て生じて而して辭せず。功成りて居らず。萬物に衣被して而して主とならず。

【字義】○汎 汎と同じ、ばつと廣くして繫著する所なき貌なり。莊子列禦寇に汎若不繫之舟とあるが如し。○可左右 舟の左にも右にも行ることの出来るが如く、道の上下左右、周旋して至らざる所なきをいふ。詩經周南關雎に參差荇菜、左右流之、また孟子離婁下に取之左右逢其原の左右に同じ。○衣被 蒙り頼る義、萬物皆其の利を蒙り頼るをいふ。河上本に愛養に作り、弼本衣養に作る、按ずるに衣と愛とは聲相同じ。兪樾の諸子

○第五十三章  
大道甚夷。

○彌本無故矣  
二字歸焉奕本  
作歸之不爲主  
奕本爲作知  
○可名於大矣

平議に之を辨ずること詳か也、宜しく參看すべし。○主 主宰なり。  
【直解】第一節、大道の機能を説く。さて至大無邊の虛無自然の道は、ばつと  
して廣く、且つ一定の處につながられて固滯することなく、左にても右に  
ても、唯其の用ふる所に隨ひて不可なる所なき也。蓋し道の一邊に偏局  
せず、上下左右前後處として時として在らざる所なきを言ふ也。それ天  
地間の萬物は、皆此道を恃みて、其の御蔭に頼りて生ずる也。即ち草木の  
萌え出づるも、花の開き實の生るも、皆道の力なり。此の如く萬物は皆道  
に頼りて生ずれども、道は其の勞を辭すること爲さず、萬物は道によ  
りて生育の功を成せども、道はそれを己の功として其の場に居ること  
を爲さざる也。又衣服の人の身體を保ち養ふが如く、道は萬物を煦嫗覆  
育イクソダツメシ、萬物は其の惠を受けて生成すれども、道はもと無心にして  
未だ嘗て之が主宰となり、己が物とする事なく、常に寂然として靜か也。

故常無欲可名於小矣。萬物歸焉而不爲主。可名於大矣。是以聖人能成其大也。以其自然。

○彌本作可名爲  
大。  
○是以聖人能  
成其大也。彌本  
無此句。  
○不自大。彌本  
自下有爲字。

【譯讀】故に小と名づくべし。萬物歸すれども而かも主と爲らず。大と名づ  
くべし。是を以て聖人は能く其の大を成すなり。其の終に自ら大なりと  
せざるを以て、故に能く其の大を成す。

○第三十二章  
道常無名。樸雖  
小天下不敢臣。  
○第二章、功成  
而不居。第十七  
章、功成事遂、百  
姓皆曰、我自然。  
○第二十五章、  
道大。  
○第二十五章、  
王亦大。

【直解】第二節、道は眞に廣大無邊にして尋常小大の外に超えて立つこと  
を説く。さて上述の如く、道は萬物を生育すれども、少しも其の功に居ら  
ず、又自ら萬物の主宰たらず、形なく象なく、少しも目立つ所なきが故に、  
小と名づくるも不可なき也。然れども萬物皆道に歸著し、一物として道  
の力に頼りて生ぜざるはなければ、道は自ら其の主宰たらずして寂  
然たるは、實に廣大の極と謂ふべし。故に亦大と名づくべき也。是を以て  
聖人はこの廣大無邊の道に法りて能く其の大いなる徳を成就する也。  
即ち聖人は自ら大いなりとして驕り矜る色を見はさず、常に謙下にし  
て能く容るる所あるを以て、故に能く道即ち主宰者と同じき大いなる  
徳を成就して世に尊ばるるに至る也。

【辨正】功成不居の不居を河上本、碑本並に不名有に作り、焦弱侯も之に従  
へども恐くは非なり。傳奕本、不居に作るを是とす。○常無欲 この三

字は衍文、當に刪去すべし。而るに先儒此三字の衍文たるを知らず、此章を證據として、第一章の故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其微の二句の兩欲字を上にて連ねて常無欲、常有欲と讀みたるは陋なりと謂ふべし。

○河上公、以此爲仁德章。

○象下、奕本有者字。泰、弼作太、通。

執大象章第三十五 四十三言

【章旨】 此章、前章の意を承けて、道は淡泊無味なれども、其の効用限りなきを言ふ。

執リ大象ヲ天下ニ往ク往キテ而不レ害ス安平ナ泰ナ

【譯讀】 大象を執りて天下に往く往きて而して害あらず安平泰なり。

【字義】 ○大象 大道をいふ、無象の象、即ち象なければども象あるが如き心地する故に、象といふ、象とは只氣のみにて、カタチと訓すれども、形の字と異りて手に取ることの出來ざるものをいふ、日月星辰雲煙などは天の象なり。王註に「大象ハ天象ノ母ナリ」とあり、すべての天象を支配する道を大象といふ。第四十一章にも大象、無形とあり、無形とは形迹の求むべきなきをいふ。○天下往 此大道を執りて往きて之を天下に行ふをいふ。王弼以下の諸儒、天下の人民の歸往する義と解するは非なり。○安平泰 安は危からざる也、平は險ならざる也、泰は安くして平かな

るの至、身安くして心も亦泰然たる也。泰は易の地天泰の泰にして、上下遠近到る處能く流通して滯る所なき意ある也。

【直解】第一節、道の效用の大なることを言ふ。さて大象即ち虚無の大道を確とはなさぬやうに執り守りて、普く天下に往きて之を行ふ。かくすれば往く所として何等の窒碍もなく妨害もなく、到る處として安く平かに泰然とおちつき、虚無の大道が沿く流通して少しも滯ることなく、天下は自ら泰平に治まる也。

樂與餌、過客止。道之出口、淡乎其無味。視之不足見、聽之不足聞。用之不可既。

【譯讀】樂と餌とは、過客止まる。道の口より出づる、淡乎として其れ味なし。之を視れども見るに足らず。之を聽けども聞くに足らず。之を用ふれども既すべからず。

【字義】○樂 音楽なり。○餌 飲食物なり。○過客 往來經過の客なり。○道之出口 傳奕本、口を言に作る。○既 盡なり。

○口、奕本作言。淡乎、奕本乎作。兮、不足聞、奕本作不可聞。

欠

# 欠

ひて而る後に禮ありといふ也。之を要するに老子の學は徳の渾厚にして形迹なく、圭角なきを貴ぶ。故に道德を以て上と爲す。仁は形迹少しく著る。故に以て次と爲す。義と禮とに至りては、則ち圭角あるを免れず。故に以て下と爲す也。

夫禮者、忠信之薄、而亂之首。前識者、道華而愚之始。是以大丈夫處其厚、不處其薄。處其實、不處其華。故去彼取此。

【譯讀】 夫れ禮は、忠信の薄にして而して亂の首なり。前識者は、道の華にして而して愚の始なり。是を以て大丈夫は其の厚きに處て、其の薄きに處らず。其の實に處て、其の華に處らず。故に彼を去りて此を取る。

【字義】 ○亂之首 首は始なり。亂の由りて始まる所なり。 ○前識 人より前に早くさとり識るをいふ。即ち智なり。韓非子解に「物ニ先ダチテ行ヒ、理ニ先ダチテ動ク、之ヲ前識トイフ」とあり。 ○大丈夫 確と其の志

○奕本首下始  
下並有也字。韓  
非子始亦作首  
○不處其薄。彌  
本處作居。彌  
○處其實。不處  
其華。兩處河上  
並作居。彌上處  
作處。下處作居。



を持し其の守る所の節を變せざる者の稱。孟子公下文に富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫とあるは是れなり。○彼薄と華と、即ち禮と智と也。○此厚と實と、即ち忠信と道とを斥していふ。

【直解】第三節、道德の得失を言ひて取捨する所を知らしむ。夫れ禮は忠信を以て本と爲す、心の底に忠信ありて、而る後に發して禮儀作法となりて、敬意を動作の上に表はす也。然るに末世に至りては、徒に虚禮虚文を尙び、絶えて忠信の實なく、情を去りて貌を取り、樸を惡みて飾を好み、曲禮三千すべて禮の精神を失ひ甚だしきに至りては、葬式に列しながら、談笑談諱して少しも哀悼の情なき者さへあり、又小笠原流の作法には、至極熟達し居れども、其の心術は極めて陰險陋劣なる者なきにしもあらず。故に禮は忠信の薄きよりして生ずといふ也。若し夫れ父子の閒柄の如きは、親愛の情厚く、忠信の心篤きによりて、餘り四角ばりたる禮を爲すことを嫌ふなり。韓非子老論に實厚者貌薄、父子之禮是也、由是觀之、禮繁者實心衰也とあるは是れ也。又前節に述べたるが如く、我より敬禮を施しても、彼之に應せざれば、直ちに怒りて臂をかがけて之に就き、其の

何故に答禮を爲さざるかを詰責し、互に相關争するに至る。故に禮は亂の由りて始まる階梯なりといふ也。又人より前にさとり識るは智なり、智も仁義禮と同じく、もと虚無の大道が碎けて分れ出でたるものにて、一寸利口に見ゆる所あるは、道の華ともいふべきものなれども、實用にはならざる者なり、世の智者は往往其の聰明を竭して、種種の事業を企つるも、事は志と違ひて、却つて失敗の禍を招くに至る。中庸第七に子曰、人皆曰予知、驅而納諸罟獲陷阱之中、而莫之知辟也とあるは是れなり。勞して益なく却つて害あれば、其の智は眞の智にあらず、故に愚の始とはいふ也。これを以て大丈夫たる者は、己の身を忠信の厚きに處きて、禮の薄きに居らず、身を道の實に處きて、其の智の浮華なるに居らず、故に彼即ち薄き禮と、華やかなる前識(智)とを去りて、此即ち厚き忠信と、實なる道とを取る也。揚子法言道問に老子之言道德、吾有取焉耳、及槌提仁義、絶滅禮學、吾無取焉耳とあれども、老子は必ずしも一概に仁義禮學を槌滅せんと欲するには非ず、其の人の作爲に涉りて、漸く虚無自然の道に遠ざかることを恐るるのみ、揚子の説の如きは、徒に文字に拘泥して、老子

の真意を解せざる者と謂ふべき也。

【辨正】俞樾曰ふ「無爲ト無以爲トハ區別スル所ナキニ似タリ、下文ニ云フ上仁爲之而無以爲ト、夫レ無爲ト爲之トハ其の義迥ニ異ナリ、而ルニ同ジク無以爲ト言フ、其ノ通ズベカラザル明カナリ矣、韓非子解老篇ニ上德無レ爲而無不爲也ニ作ル、蓋シ古本ノ老子ハ此ノ如シ、今ノ無以爲ニ作ル者ハ、下ノ上仁ノ句ニ涉リテ誤ル耳、傳奕本正ニ不ニ作ル」と然れども無爲は道の無爲自然に法りて無心なるをいひ、無以爲は心を用ひて爲すといふこと無きを辨じたるなれば、決して其の區別なきに非ず、故に河上公主弼本に従ひて解せり。

昔之得一章第三十九 一百三十九言

【章旨】此章、一即ち虚無自然の道の妙用を説く。

昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、王侯得一以爲天下貞。其致之一也。

【譯讀】昔の一を得たる者なり。天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈なり。谷は一を得て以て盈ち、萬物は一を得て以て生じ、王侯は一を得て以て天下の貞たり。其の之を致すは一なり。

【字義】○昔之得一者 昔は始なり、此一句は總冒即ち綱なり、天得一以清以下の六句は分説即ち目なり。○一 道の物に賦する者なり、道は二なし、故に一といふ、萬物は一を得て性と爲し、形と爲し、或は天地と爲り、神祇と爲り、山川草木と爲り、王侯庶人と爲る也、第十章に載營魄抱一能

○河上公、以此爲法本章。  
○沈曰、此章貴一。

○王侯、諸本皆作侯王、真一作正。

無<sup>カラシ</sup>離<sup>ル</sup>乎、また第二十二章に聖人抱<sup>キテ</sup>一<sup>ヲ</sup>爲<sup>ル</sup>天下式とある一に同じ。即ち第二十五章に有<sup>リ</sup>物混成、先<sup>ダ</sup>天地<sup>ニ</sup>生<sup>ズ</sup>寂<sup>ク</sup>分<sup>ク</sup>寥<sup>ク</sup>分<sup>ク</sup>、獨立<sup>シテ</sup>而不<sup>レ</sup>改、周行<sup>シテ</sup>而不<sup>レ</sup>殆、可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>天下母とあるは是れ也。一とは混成せし物の全體なり。○神 陰陽變化測られざる者を稱していふ。○谷 虚にして水の盈つる所の處をいふ、即ち江海の類。○貞 法式なり、天下の標準となる義。一本に貞を正に作る、天下の正位に居る義。○致之一也 致は召<sup>マシ</sup>き來<sup>キ</sup>す也、一は一致を謂ふ。

【直解】第一節、萬物皆一を得て成るをいふ、一とは天地に先だちて混成せし物(道)の全體なり、凡そ萬物皆對待あらざるはなし、對待の物は、各、一方一隅に滞りて通ずる能はず、只陰通じて陽となり、陽通じて陰となり、柔通じて剛となり、剛通じて柔となり、幽明盈虚屈伸生死貴賤高下に至るまで、皆通じて一と爲り、之を分つことなく、然る後に之を一と謂ふ、一は即ち絶對の道なり、さて萬物の始(昔)は各、一即ち自然の道を資り得て生ずるもの也、例へば桃李の種子を箱の中に入れて置きても芽を出さず、これを土の中に埋め置けば、大極の元氣(即ち道)を稟<sup>ウ</sup>け得て、芽を出す

○第十四章、視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一。

如し。この昔之得、一者の一句は、總説即ち綱にして、以下六句は分説即ち目なり。それ故に天は一の道を得て自然に清めるもの也、天の氣は至つて清く、一點の邪氣を混せず、易にいふ大哉乾元の元、即ち元氣が天一<sup>杯</sup>に周<sup>ル</sup>く運行するが故に、其の氣が常に澄みわたりて清く、日月も明かに下土を照臨する也。又地は一の道を得て自然に靜かに安寧なる也。易に至<sup>シ</sup>哉坤元とある元は即ちこの一に同じく、地もこの一元の氣を資り得て常に靜かに寧く、能く萬物を載せて動くことなき也。又神はこれも一の自然の道を得て居るが故に、其の働は如何にも不可思議にして、靈驗著<sup>シク</sup>しく、善に福し、淫に禍して、少しも差<sup>ガ</sup>ふことなき也。又回<sup>ク</sup>して虚なる谷、即ち江海の類は、これ亦虚無自然の道、即ち一を資り得て居るが故に、天下の衆水が之に歸して常に盈つる也。すべて天地間の萬物は悉く皆一の自然の道、即ち大極の一元氣を得て以て生ずるを得る也。されば其の萬物の靈長たる人の其の又頭目<sup>カシ</sup>たる王侯は、これ亦一の自然の道を得て居るが故に、天下の貞<sup>チカ</sup>しき標準となり、萬民の歸服する所となる也。以上述べたるが如く、天の清めるを致し、地の寧きを致し、神の靈なる、谷

の盈つる萬物の生ずる、王侯の貞たるを致す所以の理は、皆一の道を資りて生ずるものなること、すべて相同じく、互に一致して些も異なる所なき也。

天無以清、將恐裂、地無以寧、將恐發、神無以靈、將恐歇、  
谷無以盈、將恐竭、萬物無以生、將恐滅、王侯無以爲貞、  
而貴高、將恐蹙。

【譯讀】天以てすること無くして清くば、將恐らくは裂けん。地以てすること無くして寧くば、將恐らくは發せん。神以てすること無くして靈ならば、將恐らくは歇まん。谷以てすること無くして盈たば、將恐らくは竭きん。萬物以てすること無くして生せば、將恐らくは滅せん。王侯以てすること無くして貞たり而して貴高ならば、將恐らくは蹙れん。

【字義】○以 上文の六つの得一以の以に同じ。○裂 衣のやぶるる義より物の破れ毀ふをいふ。易辭の乾坤毀の毀の如し。○發 あばくと訓

す、發き泄れて保固なること能はざる義。○歇 消滅して靈ならざる也。○竭 枯れて竭くる也。○蹙 音ケツ顛仆ルなり。

【直解】第二節、萬物自然の道たる一を得ずんばすべて敗滅するに至るをいふ、是れ前節の反説ラトクナリ。若し假に天が自然の道の賦する所の一を用ひず、作爲によりて姑く澄みて清くあるものならば、決して其の清きことは永く續かずして、恐くは濁りて裂け破るるに至らん。地も亦其の通りにて、一の自然の道を以てせず、作爲によりて姑く寧靜であるものならば、決して永く續かずして、恐くは動きて地氣が發泄し、何時までも寧く靜かなること能はざらん。神も一の自然の道を以てせずして、作爲によりて姑く靈妙なるものならば、其の靈妙の働は、決して永く續かずして消滅するに至らん。谷即ち江海も一の自然の道を以てせずして、作爲によりて姑く盈ちてあるものならば、恐らくは枯れて竭くるに至らん。すべて天下の萬物の生成する所以は、皆是れ一即ち自然の道の働なり。然るに若し萬物が一の自然の道を以てせずして、作爲によりて姑く生成せしものならば、恐くは滅亡するに至らん。又天下に君たる王

も、一國に君たる侯も、一の道を以てせずして、作爲によりて姑く貞即ち下民の標準となりて徒に貴く高き位に居るものならば、決して永くは續かず、恐らくは人心服せずして顛れ覆るに至らん、之を要するに以上に列擧せし天地間の萬物は、すべて一即ち自然の道を資りて生成したるものなれば、萬古に涉りて少しも變ずることなけれども、若し自然の道を以てせずして、人の作爲に出でたるものならば、決して永く持續すること能はずといふ理由を、前節の反面より説明せし也。

故貴以賤爲本、高以下爲基、是以王侯自謂孤寡不穀、此其以賤爲本耶、非乎、故致數輿無輿、不欲珠玉、珞珞如石。

○河上本、賤下、高下、並有必字。  
○王侯諸本皆作侯王。  
○此其以賤爲本耶、彌本作此、非以賤爲本耶、兩輿字、河上並作車。

【譯讀】故に貴は賤を以て本と爲し、高は下を以て基と爲す。是を以て王侯自ら孤寡不穀と謂ふ。此れ其れ賤を以て本と爲すか、非ずや。故に輿を數ふることを致せば輿なし。珠玉として玉の如く、珞珞として石の如くな

ることを欲せず。

【字義】○孤寡 孤は孤兒なり、寡は老いて夫なき者、並に最も憫むべき窮民なり、故に謙して自稱とす。○不穀 穀は善なり、不穀は不善の義。○致 極むる義。○輿 車上人の乗る所、轉じて車の義とす、王弼本に輿に作るは訛なり。○珠玉 玉の光澤ある貌。○珞珞 石の堅くして相入らざる貌、翼註本に落落に作る、同義なり。

【直解】第三節前節を承けて人事に歸入して説く。それ故に王侯の貴く高き所以は、其の人が一の道を身に體し得て、自然に民が其の徳に歸服せしに由る也、即ち下賤なる民があればこそ推し戴かれて貴く高き位に在るなれ、若し王侯たる者、己が貴高に矜りて、我儘の振舞を爲し、民の心が離散すれば、永く高貴なる位を保つこと能はずして、やがて顛覆するに至る。されば貴く高きは、賤しく下きを以て基本とすることを知るべき也。これを以て王侯は自分の事を卑下して孤といひ、寡人といひ、又不穀即ち不善の人といひたまふ、名に循ひて實を責むれば、貴きを挾みて自ら尊大にする意なきことを知るべし。此の如く自ら謙遜せらるれば

○孟子(盡心下)得乎丘民而爲天子。

○第四十二章、人之所惡、唯孤寡不穀、而王公以爲稱。

こそ、天下の民の歸服する所となり、永く其の貴き位を保ちたまふなれ。是れ貴きは賤しきを以て本と爲すの證にあらずや、重ねて非乎といふは、さやうなる道理にてはあらざるかよくよく深く考へて辨へ知るべしと、問ひ詰めて意味を強くする辭なり。道はもと衆有即ち萬物を御するに一無を以てす、譬へば茲に輿あり、輿には輪あり、輻あり、轂あり、軾あり、衡あり、相合して一の輿を成す、若し之を一一に分離すれば、輿といふ者は無く、只輪、輻、轂、軾、衡あるのみ、然れば輿は輪輻などの衆有を合せたる一の虚名たる也。猶ほ道は唯一なるものにて、それが分れて萬物となるも、道の本體は常に虚無なるが如し、故に輿を一一に數へ極むれば、終に輿なきに至るといふ也。それと同じく天下の億兆の人を合して、然る後に王侯の稱あり、天下の人を散すれば王侯も無き也。故に王侯の貴高なる所以は、下賤なる民庶あるが爲め也。若し民庶を去らば、租税を出して國用に供する者もなく、王侯獨り自ら貴高なること能はざる也。是れ貴賤もと一體にして君民相離るべからざるの意を明かにする也。故に前にも述べたるが如く王侯自ら孤寡不殺と稱して卑下したまふが故

に、何時までも其の貴き位を保たるる也。謙せざれば尊からず、屈せざれば伸びず、嗚呼是れ道の變通自在なる妙用なり。さてすでに一なれば絶對にして貴もなく賤もなし、而るに若し、之に反して貴賤の分判、天淵の如く甚だしければ、君民一體の意を失ひ、上下乖離、國家の事日に非ならんとす。故に有道の君子は、珠珠として玉の貴きが如く、珞珞として石の賤しきが如く、各、一方に偏り、滯りて、變通混化すること能はざるが如きを欲せざる也。宜しく石にあらず、玉にあらず、一即ち虚無自然の道を守りて所謂天下の璞、木に喩ふれば、樸の字を用ふ、たるを得ば、斯ち可なり。按ずるに論語仁に子曰、參乎、吾道一以貫之とある一は、此章の一と其の歸する所は、相同じき也。

○河上公、以此爲去用章。  
○沈曰、此章貴弱。

○天下之物、河上弱並作天下萬物。

### 反者道之動章第四十 二十一言

【章旨】此章、道の動用を説きて、無道は天地萬有(萬物)の本たることを明かにす。

○反者、道之動、弱者、道之用、天下之物、生於有、有生於無。

【譯讀】反は道の動なり、弱は道の用なり、天下の物は、有に生じ、有は無に生ず。

【字義】○反 復なり、靜なり、本の靜に反る義、即ち物は其の極に達すれば、再び本に引き返るをいふ。例へば亂世無道の極、又本に反りて靜かなれば、道德が蘇生(ヨミガ)して動き出づるが如し、易の復卦に之を説くこと詳かなり、宜しく參看すべし。○弱 強の反對なり、何も争ふことなく、無爲自然にして時に従ひ卑順にして行くをいふ。○有 天地を斥す。○無 虚無の道をいふ。

【直解】前の二句は反と弱とを以て道の無なることを明かにし、末の二句

は萬有はすべて無より生ずるをいふ、是れ主意、さてすべて物は循環して本に反るもの也、故に無道の世も、其の極に達すれば、これではならぬと氣付きて、再び本の靜に引き返り、道德の萌芽が動きて生ずるやうになる也、姑く個人に就きて言へば、人の性はもと靜かなる者なり、然るに私欲多ければ、種種の妄念起りて、心常に躁がしく亂るるが故に、是非善惡の判断を誤り、事を仕損ずるに至る。然るに一旦紛紛たる妄念を一掃して本の靜にかへれば、道心動きて天理も明かに見ゆるやうになるが如し、右の如く動の極は必ず復る、復る者は必ず靜かなり、靜かなる者はまた動く、易の艮卦の艮は止なり、生なり、止まる者は生ずるの因となる、即ち艮は東北の卦にして萬物の終を成し、又始を成す所以なるが如し、これを反者道之動といふ、第十六章に夫物芸芸各歸其根、歸根曰靜、靜曰復、命とあるも其の意は同じ、彼の諸葛孔明が葛巾を著け、白羽扇を把り、從容として三軍を指揮せしも、板倉重宗が茶磴を碾き、明障子を隔てて、訟獄を聽斷せしも、皆躁がしく亂るる心を落ち著けて、本心の靜に復し、是非善惡の觀念を明かにして、正しく事を處理せんとするの工夫に出

でたる也。周惇頤の太極圖説に主靜トスの説あり、亦此意を言ふ也。道は無爲自然にして萬物を生ず、さて弱は強の反對にて、何事も自然に任せ、無私無欲にして争ひ逆ふことを爲さざる也。故に弱は虚無自然の道に合へるを以て、老子は深くこの柔弱の徳を貴ぶ也。然るに世人多くは之に反して剛強の以て用に任ずることを知ると雖も、剛強なる者は必ず摧け折れて、自ら全うする所以の道にあらざる也。唯柔弱なる者は、柳の枝に雪折なきが如く、永く用に任じて摧折の虞なき也。故に弱者道之用ハタカといふ也。すべて心柔弱にして争はず、堪忍の強きが眞の強といふ者なり。されば弱は却つて強に勝つの道なり。第五十二章に守柔曰強とあり、又列子黄帝に鬻子を引ききて欲剛、必以柔守之、欲彊、必以弱保之、積於柔、必剛、積於弱、必彊とあるは、皆此意を言ふ也。越王句踐が會稽の辱を忍びて呉に勝ちたるも、韓信が辱を忍びて屠中の少年の胯間に屈して、他日志を天下に伸ばしたるも、魏の司馬懿が諸葛孔明より數戰を挑まれても、容易に兵を出ださず、巾幗婦人の服を遺られても、敢て之を以て辱とせず、善く隱忍して柔弱の道を守り、兵を弄せずして孔明の死を待ちし

が如きは、老子の此訓に合へる者なり。之に反して楚の項羽や佛國の拿破崙の敗亡せしが如きは、道の用たる弱を守ること能はず、己の強を縦ほしまにして底止する所を知らざりしに由る也。第四十二章に強梁者不得其死とあるは是れ也。豈深く戒慎せざるべけんや。さて天地が出来て、而る後に萬物が出来、故に萬物は皆有即ち天地よりして生ずといふ也。首章の有名萬物之母とあるは是れなり。然れども天地萬物の未だ出来ざる前は、混沌たる太虚即ち虚無の道に外ならず。故に有生於無といふ也。即ち首章の無名、天地之始とあるは是れなり。すでに無は天地萬物の本なれば、天地萬物は常にこの虚無自然の道を離るべからず、必ず本の無に反るべき也。此章動靜強弱の理を言ふに因りて、又推言して有無の始に及ぶ也。老子の學は大抵虚を主とし靜を主とし弱を主とし卑を主とす。故に天地の間の有無動靜を以て推し廣めて之を言ふ、専ら天地のみに關して言ふにはあらざる也。



○河上公、以此爲同異章。  
○沈曰、此章言「道大」。

○奕本動下、無而字。天上、有而字。

上士聞道章第四十一 九十五言

【章旨】此章道は大いにして名無く、而して善く萬物を成就することを言ふ。

上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑不足以爲道。

【譯讀】上士は道を聞き、勤めて而して之を行ふ。中士は道を聞き、存するが如く亡するが若し。下士は道を聞き、大いに之を笑ふ。笑はざれば以て道と爲すに足らず。

【字義】○上士 士とは道を學ぶ者なり、上士は上等の學者をいふ。

【直解】第一節、道を聞く三品の人を説く。さて上等の士は、道を聞き、善く其の旨を解り、深く之を信するが故に、心に退轉なく、勤勞して之を躬に行ふ也。顏回が孔子より克己復禮の教を聞き、言下に領解して、回雖不敏、請事斯語矣。顏淵語といひ、それより駁駁として聖域に進みしが如し。

○第七十八章、正言若反。

中等即ち普通の士は、道を聞き、或は解り、或は解らず、所謂半信半疑なるが故に、道が其の人の心に存じて有るが如く、又亡びて無きが如き也。これ其の志薄くして信の厚からざるに由る也。最下の士に至りては、道を聞き、其の微妙の理を悟ること能はず、却つて、迂闊なりとして之を誹り、腹を抱へて大いに笑ふ也。叔孫武叔が孔子を誹り、淳于髡が孟子を笑ひしが如し。この下士に笑はるる所が、即ち道の最も貴き所以なり。昔韓退之が四六駢儷の文の盛んに流行せし時、己獨り古文を作りしに、世人が己の作りし文を見て、之を笑へば、則ち以て喜と爲し、之を譽むれば、則ち以て憂と爲したるが如き。韓文卷十六 答李翺書 是れ凡眼の人に譽めらるる所のある間は、己の文品の未だ四六文の俗氣を脱せざる所あるが故に、憂とせしなり。文章すら且つ然り、況や道に於てをや。道は第十五章に微妙玄通、深不可識、また第七十章に知我者希、則我貴矣、とあるが如く、凡夫の容易に悟り知ること能はざるものなり。若し下愚の人にも容易に悟り知らるるが如き淺薄なるものならば、眞の大道とするには足らざるなり。

○奕本有之下  
有曰字  
○河上弼進道  
句在夷道句之  
上  
○儉奕本作儉  
○論奕本作論  
古字通

故建言有之。明道若昧、夷道若類、進道若退、上德若谷、  
太白若辱、廣德若不足、建德若偷、質直若渝、大方無隅、  
大器晚成、大音希聲、大象無形。

【譯讀】故に建言に之あり。明道は昧きが若く、夷道は類の若く、進道は退く  
が若く、上徳は谷の若く、太白は辱の若く、廣徳は足らざるが若く、建徳は  
偷の如く、質直は渝るが若く、大方は隅なく、大器は晩成し、大音は希聲に  
して、大象は形なし。

【字義】○建言 建は立なり、立言の義、左傳襄公二の叔孫豹曰魯有先大夫  
曰臧文仲既沒其言立の註に「立トハ廢絶セザルヲ謂フ」と、明道以下の十  
二句是れ也。○夷 平なり、五十三章の大道甚夷の夷と同じ。○類  
絲の節なり、平かならざる也。林本に類に作る、古字相通す、註に同也とあ  
るは非なり。○谷 虚なるを謂ふ。○辱 奕本に黷に作る、けがるる  
也。塵に同じ。○建徳 立德に同じ、建とは拔けざる義、第五十四章に善

建者不拔とあるは是れ也。○儉 苟且なり、惰なり。○質直 直にし  
て質朴なる也、諸本直を眞に作るは非なり、老子通に従ひて直に改む。○  
渝 變改なり。○大方 太虚なり。○晩成 速成論語の反對、大鼎大  
鐘などを鑄るが如きは豈能く速に成らんや、人材も亦然り、後漢書馬援  
に汝大才當晩成とあるが如し。○希聲 希は無なり、第十四章に聽之  
不聞名曰希、また第二十三章に希言自然とあり、論語先進に鼓瑟希とある、  
皆同じ、奕本稀に作る、通す。○大象 道を謂ふ、第三十五章に執大象、天  
下往とある是れ也。

【直解】第二節前節の不笑不足以爲道の句を承けて、道の微妙にして凡眼  
にては容易に窺ひ識ること能はざるを説く、さて第七十八章にも正言  
若反とありて、天下の至言は、俗人が聞く時は、却つて正理に反けるが如  
く思はれて笑ふ也。この故に古の立言の士に明道以下十二句の語ある  
也。明道若昧とは、眞に明かなる者は、所謂和光同塵第四にて内に其の光  
を窺ひて彰はさざれば、却つて味く愚なるが如く見ゆる者なり、老子が  
君子盛徳容貌若愚史記老といひ、第二十二章に不自見故明、また中庸に

○第七章、後其身而身先、外其身而身存、

○第十五章、曠兮其若谷、第四章、道沖而用之、或不盈、

○第二十章、俗人昭昭、我獨若昏、

闕然而日章とあるは皆是れ也。夷道若頽とは眞に公平なる道は、自然のままに任せ、物に依りて行ふが故に、或は高く或は低く、偏倚して平かならざるやうに見ゆること、譬へば絲に節のありて美ならざる如き也。進道若退とは道に進む者は、其の身を後にし、其の身を外にして物と争はず、謙下なるが故に、俗眼にては退くが如く見ゆれども、實は其の徳益進みて衆の推し尊ぶ所となる也。揚子法言君子に顔淵以退、爲進、天下鮮儷とあるは是れ也。上徳ある人は、第三十八章に上徳不徳とあるが如く、徳ある風を爲さず、谷の空しく闊くして清濁美惡を擇ばず、一切の物を受け込むが如く、卑下虚沖にして、能く何物にても受け容るる也。太白即ち太だ潔白なる者は、皎皎として以て自ら異にすること無きが故に、其の潔白が目立たず、却つて傍觀には辱即ち汚れたるが如く見ゆるもの也。汚れたるが如く見ゆるも、何處までも潔白の本性を失はざることは、金剛石が掃溜の中に在りても、其の光は依然として變せざるが如く、蓮花の汚泥より出で、亭亭として淨く植ちて、一點の濁に染まざるが如き也。論語陽に不曰白乎、涅而不緇とあり、涅は黒く物を染むる土なり、極め

○第三十八章、上徳不徳、第四十五章、大成若缺、其用不敝、大盈若沖、其用不窮、

て白き物は、久しく黒き染料の中に入れ置きても、決して黒くはならず、聖人は如何なる濁亂の世、惡俗の間に處りても、決して其れに汚さるること無きを言ふ。孟子萬章に柳下惠の事を敘して、爾爲爾、我爲我、雖袒裼裸裎於我側、爾焉能浼我哉とあるが如きは是れ也。又同じ文中に伯夷の潔白なることを敘して、目に惡色を見ず、耳に惡聲を聽かず、其の君にあらざれば事へず、其の民にあらざれば使はず、鄙野凡俗なる村里の人と一處に居ることは、譬へば朝衣朝冠の禮服を著て、泥や炭の上に坐するが如き心地すとあり、柳下惠より觀るときは、伯夷の行の如きは未だ太白とは謂ふべからざる也。廣く大いなる徳は、すでに十分に備はるが上にも、猶ほ常に足らざるが如き也。論語泰に有若無、實若虚とあるは是れ也。建徳即ち確と立ちて、抜けざる徳ある人は、必ずしも禮法などの末節に拘泥せず、何事も勉強せずして、自然に従ひて之を行ひ、人に接するに易簡なるが故に、一寸見る時は苟且にして怠るが如く見ゆる也。質朴にして正直なる人は、言行に虚飾なく、常に自然の運に任せて、我意我見を固執せざるが故に、其の行ふ所は、時と場合とに應じて變動して一

ならず、故に渝るが如しといふ也。大方即ち太虚は廣大無邊にして、誰も其の四方四隅の端を見る者なき也。故に佛書に本來無東西、何處有南北といへり。虚無の大道の無邊なるも亦此の如し。故に道を得たる人は行に廉隅なく、心に眇域を設けず、如何にも圓滿に見ゆるもの也。大鼎大鐘の如き洪大なる器は、一朝一夕にして出来る者にあらず、必ず多くの歲月を費して而る後に漸く出来る也。棟梁の材は必ず數百年を経たる大木ならでは、用に立たざるが如し。人才も亦然り、非常の徳器は非常の努力を積むにあらざれば、成就すること能はざる也。これ孔子が速成を欲する者を惡まれたる所以論語なり。大音とは聽之不聞、名曰希第十とあるが如く、聞くことを得べからざる音なり、すでに聲あれば高下清濁によりて宮商角徵羽の五音に分る、分れたる音は小音にして、衆音を統ぶること能はず、故に聲あるは大音にあらざる也。虚無の大道は、すべての音の本なるが故に大音といふ、大音は聲なき也。一説に大音は、谷神即ち道の聲なり、道の聲は耳にこそ聞こえぬ、千古に存する也。其の聲なきに聞く所が眞に道の聲を聞きたる也。悟道の人は聞きて居る也と、此説禪

○解嘲、大味必淡、大音必希。

に近しと雖も亦通ず。道は萬象の本なるが故に大象といふ、即ち道は絶對にして一切の相を離れ、虚無にして形なきもの也。以上は古の建言を列舉せし也。

道隱無名。夫唯道善貸且成。

【譯讀】道は隠れて名なし。夫れ唯道は善く貸して且つ成る。

【字義】○貸 人の乏しきに應じて姑く貸與する義にて、與へ切りに與ふるにはあらず、善貸とは目立たぬやうに上手に貸す也。○且 暫なり、久固にあらず。

【直解】第三節前節を承けて道はもと名なし、故に凡眼にては見えざれども、能く萬物を成就すること可言ふ。虚無の大道は第二十五章に有、物混成、先天地生とあるが如く、天地に先だちて在れども、隱微にして見るべからず、又形なくして名づくべきやうも無し、強ひて名づけて道とはいふ也。この道は萬古に互りて變ることなく、如何なる處にても徧く運行して巧に其の力を萬物に貸し與へて、それぞれに其の性命を成就する

也。さて貸とは姑く乏しきに應じて供給する義にて、何時までも與へ切りに與ふるにはあらず、例へば人の體に道德のあるは、其の人の存生中、天より貸與し置く也、死して體が無くなれば、其の道德は同時に引揚げ、て仕舞ふが如し。他の萬物に於けるも亦然り。故に且成といふ。且とは暫の義にて、其の物の存在する間は、皆この道を天より借用して、其の性命を成就するを言ふ也。されども其の物が盡きて無くなれば、再び本の道に復歸す。かくして萬物は古今に互り、生生化化して止む時なく、柳は緑に花は紅に、鳶は飛び魚は躍る也。

道生一章第四十二 七十二言

【章旨】 此章前章を承けて道體は沖虛にして天地萬物の本たるを以て、人も亦之を體して謙下柔弱を貴び、強梁なるべからざることを言ふ。

道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽。沖氣以爲和。人之所惡、唯孤寡不穀而王公以爲稱。故物或損之而益、益之而損。

【譯讀】 道は一を生じ、二は二を生じ、三は三を生じ、三は萬物を生ず。萬物は陰を負ひて而して陽を抱く。沖氣以て和すること爲す。人の惡む所は、唯孤寡不穀のみ。而るに王公は以て稱と爲す。故に物或は之を損して而して益し、之を益して而して損す。

【字義】 ○一 太極即ち一元の氣なり。 ○二 兩儀即ち陰地と陽(天)と也。 ○三 三才即ち天地人なり。 ○負陰抱陽 凡そ物の體背は後に在り、

○河上公以此爲道化章。  
○沈曰、此章貴二。

○王公以爲稱、奕本作王侯以自稱也。

陰にして静か也故に負といふ。耳目口鼻は前に在り、陽にして動く也故に抱くといふ。○冲氣 冲は虚なり、冲虚の氣をいふ。

【直解】第一節、萬物は虚無に生ず、故に謙虚柔弱の貴ぶべきことを説く。さて虚無自然の道(無極)よりして一即ち太極を生ず、莊子に道在太極之先とは是れなり、一生二とは太極動きて兩儀即ち陰陽を生ずるをいふ。易繫辭上傳に易有太極、是生兩儀とある是れ也。二生三とは陰陽の二氣相交りて三才を生ずるをいふ也。三才は即ち天地人なり。三才すでに生じて、然る後に萬物を生じ、鳥は飛び、獸は走り、火は燃え、水は流れ、それぞれ種種の形を成す也。實は人も萬物の一なれども、天地の化育を贊くる力ある者なれば、天地に參して三才とする也。すべて萬物の生ずる陰陽二氣の交感に由らざるは無し。故に萬物は皆陰陽を備ふ、先づ動物に就きていへば、背は後に在りて陰にして静か也。耳目口鼻は前に在りて陽にして動く也。植物も亦然り、北の寒き方即ち陰に背きて、南の暖かなる方即ち陽に向ひて、枝葉も繁茂する也。故に萬物負陰而抱陽といふ也。されば萬物がすでに生じたる後、能く其の生を保つ所以は、虚冲の元氣が其の間

皇紀二千六百  
四年式典  
當由進行  
貞

に運行して、鹽梅よく陰陽二氣を調和し抱合せしむるを以て也。若この冲氣即ち一元の氣が散じて陰陽の調和を失ふ時は、即ち死滅する也。草木と雖も、其の中にこの元氣を含めるによりて花も開き實も結ぶなり。すでに萬物の生は、冲氣に因ることを知らば、人人皆冲虚柔弱の道を體すべき也。第四章に道、冲而用之、或不盈、淵乎似萬物之宗とあると并せて考ふべき也。是に由りて之を觀れば、天地の未だ有らざる先にこの一あり、一ありて三才を成し、而して萬物始めて生育す、故に萬物の生ずる所以の者は、一に本づく、さて一の名は尊ぶべく、又卑むべし、之を尊ぶときは、絶對の稱と爲し、之を卑むときは至微の稱と爲す、さて幼にして父なき孤みよしこや、夫を失ひてたより無き寡婦や、不穀即ち不善の如きは、皆一の別名なり、されば孤寡不穀の稱は一にして至微なるを以て、免角物の多きを喜びて少きを嫌ふ衆人は、之を惡むと雖も、王公は虚無の道を體し、自ら謙遜卑下せらるるが故に、之を以て自稱と爲したまふ。天子が自ら稱して予一人湯經といひ、また冲人書經といひ、また朕書經といひて自ら至微至眇を以て處りたまふも、朕は物の初倪なり、もと舟を造る時の板

の合せ目の義より、轉じて極めて賤しく人の目にも立たざる者といふ義と爲す。亦この意に外ならず、此の如く王公が深く自ら貶損して敢て尊貴を以て人に驕りたまはざるが故に、其の徳愈盛んに備はり、萬民の推尊して歸往する所となりたまふ也。故に天下の物或は之を損して反つて益し、或は之を益して反つて損するは自然の理なり。江海の卑下に居て衆くの川谷の水を受け、三日月の虧くれば漸くに盈つるが如きは、これ損して益する者なり。丘山の高くして崩れ、十五夜の月の盈つれば漸くに虧くるが如きは、これ益して損するもの也。易の豊卦傳に日中則長、月盈則食、天地盈虚、與時消息、而況於人乎、況於鬼神乎とあるは是れ也。上に述べたる王公が自ら孤寡不殺と稱して貶損したまへば、萬民其の徳を慕ひて之に歸服し、長く尊貴の位を保ちたまふも、亦損之而益といふもの也。之に反して王公自ら己の尊貴に驕り、民を視ること土芥の如くなれば、民心離散して其の位を保つこと能はざるに至るは、益之而損といふもの也。書經大禹に滿招損謙受益、時乃天道とあるも、亦この理をいふ也。之を要するに沖氣以爲和は即ち益するの道たるを知るべき也。

人之所教、我亦教之。強梁者不得其死、吾將以爲教父。

【譯讀】人の教ふる所は、我も亦之を教ふ。強梁なる者は其の死を得ず。吾將に以て教の父と爲さんとす。

【字義】○教之 之の字は下文を斥す。○強梁 多力にして強き義、即ち剛強跋扈の意にて正に柔弱謙下の徳と相反す。○其死 身を全うして終るをいふ。○教父 父とは本の義、猶ほ萬物之母といふが如く假稱なり、母は養を主り、父は教を主る、故に生を言へば母といひ、教を言へば父といふ也。

【直解】第二節、柔弱謙下の反對なる強梁の害を言ふ。さて人之所教とは、下の強梁者の一句を斥す。古人の教へし所の強梁云々の語は、誠に至理の存するものあれば、我も亦之を以て人を教へんとする也。按ずるに金人銘に強梁者不得其死、好勝者必遇其敵と見ゆ、即ち血氣の勇に任せ、強暴の振舞を爲す者は、必ず強敵が来て、相闘争するに至るが故に、其の天命を全うすることを得ずとは、正に之を益して損する者にて、實に千

○人之所教、我亦教之、明皇作人之所教、亦我義教之、突本作人之所以教我、亦我之所以教人。○教父、突本作學。

○第三十六章、柔勝剛、弱勝強。第七十八章、天下柔弱、莫過於水、而攻堅強者、莫之能勝。

古の金言なり。孔子が子路の行行如(剛強なる貌)たるを見て、不得其死、然とのたまひしに、果して後日衛國の難に死せり、左傳哀公十五年これ其の證なり、されば吾は今よりこの金言を尊びて教の父即ち根本と爲さんとす。故に人は上に述べたるが如く、虚無の大道を體し、柔弱謙下ならざるべからず。此章は第三十九章に貴以賤爲本、高以下爲基、是以王侯自稱孤寡不穀とあると併せて考ふべき也。

○河上公、以此爲偏用章。  
○沈曰、此章貴無爲。

○河上、無有上、有出於二字、入於、弱無於字、弱益下、無也字。

天下之至柔章第四十三 四十一言

【章旨】 此章前章の意を承けて無爲の益を言ひ、不言の教の貴ぶべきことを説く。

天下之至柔、馳騁天下之至堅、無有入於無間、吾是以知無爲之有益也。

【譯讀】 天下の至柔は天下の至堅を馳騁す。無有は無間に入る。吾是を以て無爲の益あることを知るなり。

【字解】 ○馳騁 自由に役使用する也。 ○至堅 堅はカタシと訓すれども又重の義あり、堅きものは重ければ也。莊子逍遙の大瓠の條に以盛水漿、其堅不能自舉也とあるは、以て證とすべし。 ○無有 無形なり、無をいふ、光にても空氣にても鬼神にても皆無有なれども、こゝは水を斥していふ、孫子實に水無常形、また荀子道に槃圓而水圓、孟方而水方と、水は實形なくして方圓は器の方圓に従ひて變ずるをいふ也。 ○無間 間



は開隙なり、無間はすまなき也。

【直解】第一節、柔の剛を制し、無の有を御することを言ひて下文を起す。天下の至りて柔弱なる者は、天下の至りて堅く重き者を自由に役使する也。例へば第七十八章に天下柔弱、莫過於水、而攻堅強者、莫之能勝とあるが如く、水は平日は至りて柔弱なる者なれども、一旦洪水となり、海嘯となれば、其の勢猛烈にして當るべからず、家屋人畜の惨害は勿論、至りて堅く重き大石にても容易に漂し去るが如し、抑も堅強を以て堅強を御すれば、折れざれば則ち碎く、而るに柔弱を以てせば、容易に剛強を制することを得るの理は、例へば古來鬼をも拉ぐ猛士も、美婦人の爲めには魂を奪はれ、又敵軍への使に、甲冑を著たる武士を遣はせば、直ちに殺さるるも、忍辱の鎧を纏ひたる出家を遣はせば、圓滿に使命を全うするを得るの類なり。また形あるものは、障りて入らざる所あれども、形なき者、即ち無なる者は、伽羅の香の衣に染み入るが如く、月の光の間の板戸の隙にもさし込むが如く、聊も障ることなく、如何なる處にも透徹せざることなき也。それと同じく水も亦常の形とてはなければ、縫罅なき堅き

土地にも滲み入りて、百穀草木を潤し養ふ也。吾は上述の如く柔弱の能く剛強を制し、無の能く無間に入るを觀て、以て凡そ何事にても無心無爲の益、即ち功用あることを知る也と、これ前章の損之而益の義と同じ。

### 不言之教、無爲之益、天下希及之。

【譯讀】不言之教、無爲の益は、天下之に及ぶこと希し。

【字義】○不言之教 聖人徳を以て民を化し、號令などを假らざるをいふ。○及 知り及ぶを謂ふ。

【直解】第二節、前節に無爲の益を言ふを承けて、不言之教の貴ぶべきことを言ふ。これ此章の主意。如何程口先にて聖賢の道、道德の教を喋喋と饒舌立てても、又筆先にて堂堂と書き立てても、躬行實踐の工夫を缺がば、所謂口頭聖賢、紙上道德にして繪に畫きし餅と同じく何の益かあらん。之に反して其の人に眞の道德さへ備はれば、口に出して言はずとも、自然に人を感化し善導することを得るもの也。それにつきても近來片腹痛きは、彼の名奔利走に齷齪し、暮夜權門勢家に伺候して請託を事とす

○第三十七章、不欲以靜、天下將自正。

○奕本、希作稀、及之下、有矣字。

る以外に、何の長所さうそもなき不學無術にして常操なき俗吏輩が誤りて廟堂に列し、鹿瓜しかづからしくも思想善導、官紀振肅などを提唱するは、生臭坊主なまぐさばうしゆの説教と同じく滑稽至極の沙汰といふべき也。それは姑く置き、不言の教は實に教の極致神髓ともいふべき也。孔子が予欲無言カラスレトフコト（中略）天何言哉、四時行焉、百物生焉陽貨といひ、釋迦が吾四十九年住世、未曾說一字カといひ、孟子も弟子の公孫丑が浩然之氣の譯を問ひたるに答へて、曰難言也といひしが如き、皆此意に外ならず。例へば古の堯舜の如き聖天子は、誠信の至徳ありたればこそ、言はずして其の化、四海に普及し、自然の感應によりて無爲の政行はれ、後世の如く煩はしき號令などを頒發することなきも、民は知らず識らず、其の恩澤に沐浴して、鼓腹擊壤の至樂を享受するを得、太平至治の極功も自ら成りたるなれ、即ちその爲すこと無きは、却つて大いに爲したる所以也。これにて第四十八章の無爲カラスレト而無不爲の至理を悟り知るべき也。されば不言の教、無爲の益の二者は、實に虚無の大道の妙用なるに、天下の人の此至理を悟り知るに及ぶもの無きは、豈歎すべきの至ならずや。嚴君平曰ふ、爲スコト有ルノ爲ハ、廢

○第二章、聖人處無爲之事、行不言之教。第三章、爲無爲、則無不<sub>レ</sub>治。

アリテ功ナシ、爲スコト無キノ爲ハ、成遂シテ窮リナシ、天地是レ造リ、人物是レ興ル、有聲ノ聲ハ百里ニ聞ユ、無聲ノ聲ハ天外ニ動キ、四海ニ震フ、言ノ言フ所ハ、異類ニハ通ゼズ、不言ノ言ハ、陰陽化シテ天地感ズ、且ツ道徳ハ無爲ニシテ天地成リ、天地ハ言ハズシテ四時行ハル、此二者ハ神明ノ符ニシテ自然ノ驗ナリ」と、此説之を得たり。

○河上公、以此爲立成章。  
○沈曰、此章貴知足。

○河上、無是故二字、彌突並有。

### 名與身章第四十四 三十九言

【章旨】此章、名と利とは生を損すること、を言ひて、人を誡むるに、當に足ることを知り、止まることを知るべきことを以てす。

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病、是故甚愛必大費、多藏必厚亡。

【譯讀】名と身とは孰れか親しき。身と貨とは孰れか多なる。得ると亡ふとは孰れか病ましき。是の故に甚だ愛すれば必ず大いに費ゆ。多く藏すれば必ず厚く亡ふ。

【字義】○親 己が身に切近なるを謂ふ。○多 愈なり、猶ほ重といふが如し、多きものは重き也。○甚愛 甚だしく名を愛する也。○多藏 多く貨を貯ふる也。

【直解】第一節、名を好み利を愛するの害を言ふ。老子の學は無欲恬澹を貴び、名利を求むる爲めに汲汲たる者を賤む。而るに俗人は兎角慾深くし

40  
24

○第四十六章、  
告莫大於欲得。

て生涯名譽と利慾との奴隸となり、之を貪り求むるが爲めには、往往身命をも失ひ殞つるに至る。されば賈誼も貪夫、殉財、分烈士、殉名賦服鳥といへり。吁、區區たる浮名浮利を貪るが爲めに、貴重なる身命を失ふ者の世間に絶ゆること無きは、豈惑の甚だしき者にあらずや。さて名譽と身體とは、何れか己に親しく切近なりや、言ふまでもなく名譽は身外の物なれば、己の身體の己に切近なるに若かざる也。又身體と財貨とは、何れか愈りて重きや、是れ亦財貨は外物なれば、己の身體の方が重きことは勿論なり。又其の名譽と財貨とを得たると、この二者を得るが爲めに、身體を亡ふとは、何れか利にして何れか病(害)なりや、是れ亦言ふまでもなく命ありての物種、假令名利の二者を思ふ儘に得たりとも、我が身を亡はば何かせん、謠曲八島に「されば此弓を敵に取られ、義經は小兵なりと云はれんは無念の次第なるべし、よしそれ故に討たれんは力なし、義經が運の極と思ふべし、さらば敵に渡さじとて、浪に引かるる弓執りの名は末代に非ずや」とありて、古來武邊の一美談として、はやせども、君子は危きに近よらず、孔子も暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也、必也臨事

而懼好謀而成者也。のたまへり、固より正義の爲めには身命を抛つこと鴻毛の輕きにも比すべけれども、場合によりては泰山の如く重んぜざるべからず、一軍の總大將たる義經の行事としては、少しく輕舉妄動の嫌なきにしもあらざる也。上に述べたるが如くなるが故に、名譽を愛し欲すること甚だしき時は、必ず晝夜營營として心身を過勞して之を求め、其の精力を費すこと大いにして、其の極は己の身命をも失ふに至る也。費は齎の反對なり、呂覽情欲篇に「知早齎、則精不竭」とあると併せて考ふべし。又あまりに多くの財貨を貪り蓄ふるは、必ず厚く亡ふ所あるに至る也。厚とは附益するの義なり、即ち但に其の財貨を亡失するのみならず、其の身と家とを附け加へて悉く之を亡失するに至るをいふ。彼の殷の紂王が鹿臺の財を蓄へ、鉅橋の粟を積みながら、一旦身と國とを併せて之を亡ひしが如きは、多藏則厚亡の適例と爲すべき也。これは近年市井間の出來事なれども、東京の某銀行主人、横濱の米穀商某の慘殺せられたるが如きも、亦此誠に背きたる結果に外ならず、この甚愛多藏の二句は、下文の三句を發明する也。

知<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>辱<sub>レ</sub> 知<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>殆<sub>レ</sub> 可以長久

【譯讀】 足<sub>レ</sub>ることを知<sub>レ</sub>れば辱<sub>レ</sub>められず。止<sub>レ</sub>まることを知<sub>レ</sub>れば殆<sub>レ</sub>からず。以<sub>レ</sub>て長久なるべし。

【直解】 第二節前を承けて止足を知れば長久なる所以を言ふ。さて前節に述べたるが如くなるが故に、人は名譽と財貨とに對しては、宜しく澹泊無欲なるべく、常に足ることを知りて其の上を貪り求めざれば、他人から辱を受くることもなく、又程好き處に止まることを知りて、其の上を願ひ欲することなければ、危害に遇ふこともなく、以て長久に其の身を全うすることを得べき也。この知止といふことは、大學にも在<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>至善とあり、人人各其の至善の所に止まり安んずべきことを教へたる也。林希逸の注に「此三句ハ却ツテ是レ千古萬古受用シテ盡サザル者ナリ」とあるが如く、古來幾多の英雄才子其の終を全うすること能はざるは、大抵止足を知らざるに坐する也。昔前漢の疏廣、疏受の二人の叔姪が、宣帝の時、太子の師傅と爲り、朝廷の人人以て榮譽として羨みしに、廣、一日

○第四十六章、  
禍莫大於不知  
足。

受に謂つて曰く、吾聞知足、不辱、知止不殆、功遂身退、天之道也。豈如歸老、故郷、以壽命終とて、遂に職を辭して歸郷し、樂みて餘生を送り、皆壽を以て終りし前漢書列傳四十一が如きは、真に能く止足を知る者の龜鑑と謂ふべき也。之に反して古人が年過七十而居位、猶鐘鳴漏盡而夜行、罪人也。三國魏志田豫傳いひしは、老いて退くことを知らざる者の頂門の金椎と爲すべき也。

○河上公、以此爲洪德章。  
○沈曰、此章貴清靜。

○大盈若沖、突作大滿若盅、李善魏都賦、注作大滿若沖。  
○屈、突作諶、通。

大成若缺章第四十五 四十言

【章旨】 此章、前章止足の道を説くを承けて、道を體する者は、清靜を貴び、以て天下の式たるべきを言ふ。清靜は即ち止足を知るもの也。

大成若缺、其用不敝。大盈若沖、其用不窮。大直若屈、大巧若拙、大辯若訥。

【譯讀】 大成は缺くるが若し、其の用敝れず。大盈は沖しきが若し、其の用窮まらず。大直は屈するが若し、大巧は拙きが若し、大辯は訥なるが若し。

【字義】 ○敝 やぶれ盡くる也。 ○沖 盅に同じ、虚なり。 ○大直 直は曲直の直にあらず、屈伸の伸と同義なり、故に屈と對す。第二十二章の枉則直の直に同じ、并せて考ふべき也。

【直解】 凡そ大いに成る者は缺けたるが如く見ゆるもの也、其の缺けたるが如き心を以て、成るを守るが故に、却つて何時までも其の用は敗れ盡くること無き也。例へば天は西北に傾き、地は東南に満たず、これ缺けた

るが如き也。然れども其の覆載の用は萬古に互りて敗れ盡くることなきが如し。又聖人は自然に法りて其の徳大いに成れりと雖も、自ら以て徳ありとせず、至りて謙遜にして、其の徳が缺けて愚なるが如くに見ゆる也。それ故に却つて何時までも其の徳を失はずして、其の用は敗れ盡くること無き也。それと同じく虚無の大道は、天地の間に盈つれば、大いに盈つといふべし。然れども主宰はもと無心にして未だ嘗て己の有と爲さざるが故に、一寸見ては虚しきが如く思はるる也。それ故に却つて古今に互りて萬物を生生して、其の用窮まらざる也。第四章に道沖而用之、或不盈、淵乎似萬物之宗とあると併せて考ふべし。又聖人はこの自然の大道に法り、無爲を以て天下を化し、太平を致せども、自ら以て己の功と爲さざるが故に、其の徳虚しきが如く見ゆる也。それ故に却つて長く萬民の景仰する所となりて、治國平天下の用窮まることなき也。これ大盈若沖、其用不窮といふ者にあらずや。又大直即ち大いに伸ぶる者は、一寸見ては屈するが如く見ゆる也。彼の黄河揚子江の遙遙として萬里海に朝するを見れば、則ち大いに伸ぶるものといふべし。これ上流に於け

○莊子〔齊物〕大辯不言。

○兩靜、交竝作靖、通。  
○交、清靜上、有知字、下有以字。

る千屈萬折の致す所に因らざるは無き也。易下傳に尺蠖之屈、以求信也とあるは是れ也。第六十六章に聖人欲上、民必以下、之とあるは、この大直若屈の理を言ふ也。以下三句其の用を略して言はざるは省筆法を用ひたる也。又大いに巧なる者は、己の細工の上手なることを人に誇り示すことなし、故に却つて下手なるが如くに見ゆるもの也。猶ほ造化の巧、善く萬物の形を生成すれども、少しも雕琢を假らざるが如し、彼の聖人の無爲にして太平の功を成すが如きは、亦大巧若拙の證とすべき也。又大いに是非善惡を言ひ分くること明かなる辯者は、却つて訥辯即ち口澁りて言ふことの遲鈍なる者の如き也。これ口舌を弄せず、黙して居ても衆人の信服する所たれば也。彼の聖人の不言の教の民心に洽きは、即ちこの大辯若訥の證とすべき也。

躁勝寒、靜勝熱、清靜爲天下正。

【譯讀】 躁は寒に勝ち、靜は熱に勝つ。清靜は天下の正たり。

【字義】 ○躁勝寒、靜勝熱 大戴禮武王踐阼の敬勝怠、義勝欲と同一の語例、躁勝

寒の三字は客、静勝熱の三字は主、主客を設けて、以て清静の益あるを論ず。○正 表正なり、萬民の矜式する所となる也。

【直解】第二節、此章の主意を言ふ。さて前節に述べたる、缺くるが如く沖しきが如く、屈するが如く、拙きが如く、訥なるが如くなるも、其の用の敵れず窮まらざるは、其の術、人力を用ひずして自然に従ふに在る也。されば何事も人力にて爲すことは、到底自然には及ばざる也。躁はサワグと訓ず、動くの甚だしき也。例へば氷點以下の寒天にても、力を入れて體操を爲し、或は寒詣などをして疾走すれば、汗が出る程暖かくなりて嚴寒にもうち勝つことを得る也。されども固より人力を勞して爲すことなれば、長くは續かざる也。之に反して百度以上の酷暑にても、一室に静坐し、無念無想の境に在る時は、近年流行の扇風器などを假らずして、長く暑熱に勝つことを得る也。唐詩に心静カナレバ 身便涼とあるは是れ也。これ静かなるは逸して力を勞せず、自然のままなるが故なり。吁、世人多くは營營として名利の爲めに熱中し、心火常に焚くが如く、一日の寧きことなし。早く止足の道を悟り、心を清静にするにあらずんば、將何を以てか之に

勝つことを得んや。只有道の士は心に一點の塵滓なく、清静無欲にして、名利の外に超然たるが故に、天下萬民の矜式する所となる也。第五十七章に我好静ニヤ而民自正シとあるも亦此意を言ふ也。之を要するに前節に述べたる若缺若冲若屈若拙若訥の五者は皆清静無爲の致す所なり。學者此理を悟了せば、則ち其の用敵れず窮まらずして、以て天下の模範たることを得べし。又肯て名と貨とを逐ひて身を輕んずることを爲さんや。白居易曰ふ、夫レ人情ヲシテ儉樸ニ、時俗ヲシテ清和ナラシメント欲セバ、黄老ノ道ヲ體スルヨリ先ナルハ莫キ也。其ノ道ハ寬簡カタミヲ尙ビ、儉素ヲ務メ、聰察カガツカヲ炫カガツカサズ、智能ヲ役セザルニ在ルノミ、蓋シ善ク之ヲ用フル者ハ、一邑一郡一國ヨリ、天下ニ至ルト雖モ、皆以テ清静ノ理治ヲ致スベシ、昔宓賤之ヲ得タリ、故ニ堂ヲ下ラズシテ單父ノ人化ス。汲黯之ヲ得タリ、故ニ閣ヲ出デズシテ東海ノ政成ル。曹參之ヲ得タリ、故ニ獄市擾ルル勿クシテ、齊國大イニ和ツボグ。漢文漢の文帝之ヲ得タリ、故ニ刑罰用ヒズシテ天下大イニ理まさマル。其ノ故ハ他ナシ、清静ノ致ス所タルノミと。此説眞に然りといふべし。

○河上公以此爲儉德章。  
○沈曰此章貴知足。

○突、糞作播。吳幼清本作以糞車、張衡東京賦引亦有車字。

### 天下有道章第四十六 四十四言

【章旨】此章前章の清靜無爲の益、竝に第四十四章の知足、不辱の句を承けて申ねて之を言ふ也。

天下有道、卻走馬以糞、天下無道、戎馬生於郊。

【譯讀】天下道あれば、走馬を卻けて以て糞ふ。天下道なければ、戎馬郊に生ず。

【字義】○卻 屏け去りて用ひざる也。○糞 田地をつちかふ義、禮記合の可以糞田疇の疏に糞壅、苗之根也とあり。○戎馬 戰馬なり。○郊 交なり、二國相交るの境なり。

【直解】第一節、足ることを知るの利をいふ。天下に清靜無爲の道行はれて、人人皆足ることを知れば、世は太平に治まりて、戰爭などの起ることなし。故に走馬即ち戰場にて奔るを追ひ、北ぐるを逐ふに用ふる馬は、之を用ふる所なければ、廢し卻けて農作に供し、田地をつちかひ糞ふに用ふる也。書經成に假、武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服とあるは是れ也。其の反對に天下に無爲の道行はれず、人人足ることを知らざる時は、終年擾擾として、唯利欲を貪りて互に相争ひ、國國各富強を圖り、土地を侵掠し、人民を争奪するを以て能事と爲し、それが爲めに戰端を開くやうになり、其の戰爭數年の久しきに彌りて息まざれば、軍馬が郊即ち國と國との境を交ふる遠き戰場にて子を生むやうにもなりぬべし。鹽鐵論に師旅數發、戎馬不足、牝牡入陣、故駒犢生於戰地とあるは是れ也。天下に道あると道なきとは、其の利害の異なること此の如し。而して其の分るる所以を原ぬれば、人人の心に足るを知ると、知らざるとに在るのみ。

罪莫大於可欲、禍莫大於不知、足咎莫大於欲得、故知足之足常足。

【譯讀】罪は欲す可きより大なるは莫し、禍は足ることを知らざるより大なるは莫し、咎は得んことを欲するより大なるは莫し、故に足ることを

○彌本無罪莫大句。  
○咎莫大、突大作、韓非作咎、莫懲於欲、利、李約權作甚、說文解字、懲痛也、古音甚、懲同。



知るの足るは常に足る。

【字義】○可欲 欲し求むべき物なり、土地人民又は金銀珠玉の類をいふ。第三章に不見可欲使民心不乱とあるは是れ也。○罪禍咎 三字一意にして文を異にするのみ、咎も亦禍なり。

【直解】第二節前を承けて治亂の本は、足ることを知ると足ることを知らざるとに在るを言ふ。上述の如く、戦争の禍は飽くことなき慾心より起る、故に罪は欲すべき物あるより大いなるはなし、即ち人にして金銀珠玉或は衣食住の華美なる物を欲する時は、之を得んが爲めに日夜心を苦め、無理の才覺を爲し、甚だしきに至りては詐欺竊盜などの刑に觸るるに至る。第十二章に難得之貨、令人行妨とあるは是れ也。人君にして土地の大、人民の衆からんことを欲する時は、鄰國と兵を構へ、久しく結びて解けざれば、人民は塗炭の苦に陥るに至る也。すべて禍は足ることを知らざるより大いなるはなく、咎は欲すべき物を得んと欲するより大いなるはなし、故に足ることを知りて、己の分に安んじ、それに満足して、其の他を羨むの心なき者は、心常に晏如として足ることを得る也。すべ

○第四十四章、  
知足不辱、知止  
不殆。

て人の慾は際限なく、一つ叶へば又一つと、次第に増長して底止する所なきもの也。唯君子は道を樂みて貧を憂へず、止足の道を悟りて、己の分の宜しき所に満足するを以て、心常に足りて綽綽然として餘裕ある也。第三十三章に知足者、富とあると并せて考ふべき也。論語也。賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也とあり、顏回の如きはこれに庶幾しと謂ふべき也。

○河上公、以此爲「鑿遠章」。  
○沈曰、此章貴不爲。

○戶下、闢下、突並有、可以二字、見、突作、知、韓非作、不、闕、於、闕、可、以、知、天、道、也。  
○韓非、遠下、有者字。  
○不行而知、知本或作至。

### 不出戶章第四十七 三十六言

【章旨】此章前を承けて聖人の心は無爲自然の道と冥合す、故に爲すことなくして功成るを言ふ。

不出戶知天下、不窺牖見天道、其出彌遠、其知彌少、是以聖人不行而知、不見而名、不爲而成。

【譯讀】戸を出でずして天下を知り、牖を窺はずして天道を見る。其の出づること彌遠ければ、其の知ること彌少し。是を以て聖人は行かずして而して知り、見ずして而して名かに爲さずして而して成る。

【字義】○不見而名 韓非子老に名を明に作る、名と明とは古相通ず。

【直解】聖人は常に道の本を執りて末を追はず、理を知りて形を求めず。夫れ天下は廣く大いなりと雖も、人情と物理とは、道より出でて古今東西少しも異なることなし。されば一人の情は即ち千人萬人の情なり、故に吾好む所は人も亦之を好み、吾惡む所は人も亦之を惡む。孟子が萬物皆備

於我上盡心と言ひしが如く、天地間の萬物の理は、大小精粗の別なく、悉く我が性内に備はりあれば、吾心を以て天下の事を推し度れば、少しも差ふことなき也。論語仁に夫子之道、忠恕而已矣とあり、また言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦、行矣公衛靈とあるは是れ也。又天道は隱微幽遠にして測り知り難しと雖も、陰陽變化の理は萬古易ることなし、況や人天も同一にして、更に別理なければ、すでに人道を明かにすれば、窗を窺ひて外を見ずと雖も、瞑目して明かに天道の在る所を見ることを得べき也。孟子離婁に天之高也、星辰之遠也、苟求其故、千歲之日至、可坐而致也とあり、また淮南子訓山に以小明大、見一葉落而知歲之將暮、觀瓶中之冰、而知天下寒とあるは是れ也。上述の如く聖人は反りて之を己に求むれば、天下の人情事理悉く明かに知られざるは無し。俚諺に歌人は居ながらにして名所を知るといふも、亦此意をいふ也。然るに後世出でて四方に巡狩し、海内の情を視察せんとする者の如きは、多くは本を捨てて末を追ひ、理を忘れて形を求むる者にて、其の求むること愈勞して、其の心は愈昏く、時に或は佞邪なる地方官の爲めに欺罔せられて、政教風俗の真相を察する

こと能はず、況や四海の富に驕りて止足を知らず、耳目の欲を肆にして其の心志を惑溺し、聞見限りありて天下の事情は千緒萬端一一枚擧すべからざるをや。かくして出で行くこと彌遠くして、知り得ることは彌少きは、真に慨歎すべきことならずや。宋の戴益の探春詩に「盡日尋春不見春、芒屨踏遍隴頭雲、歸來適過梅花下、春在枝頭已十分」とあるも亦此意を寓せし也。これを以て聖人は出でて行かざれども、自ら天下の事情を知り、一一物の形を點檢して見ざれども、自ら之を明かにすることを得、何事も無爲自然の道に任せ、故らに爲すことなくして、自ら成就するを得る也。第三十八章に「無爲而無不爲」とあるも同じ。蓋し聖人は無私無欲、中心虚明にして、物理人情に精通し、反つて之を己に求むるが故に、能く此の如きことを得る也。韓詩外傳三卷に「昔者不出戶而知天下、不窺牖而見天道、非目能視乎千里之前、非耳能聞乎千里之外、以己之情量之也、己惡饑寒焉、則知天下之欲衣食也、己惡勞苦焉、則知天下之欲安佚也、己惡衰亡焉、則知天下之欲富足也、知此三者、聖王之所以不降席而匡天下、故君子之道、忠恕而已矣」と、此説之を得たり。

爲學日益章第四十八 四十一言

【章旨】此章前章の「不爲而成」の句を承けて、道を修め、日に智欲を損して無爲に至れば、天下自ら服するを言ふ。

爲學日益爲道日損損之又損以至於無爲無爲而無不爲

【譯讀】學を爲せば日に益し、道を爲せば日に損す。之を損して又損し、以て爲すことなきに至る。爲すことなくして而して爲さずといふことなし。

【字義】○學 紛然として歸著する所なきが如き世俗の學をいふ。第二十章の絶學無憂の學に同じ。老子は主として禮を斥す。

【直解】第一節、道を修めて無爲に至るを言ふ。すべて學を爲す者は、未だ知らざることを知り、未だ習はざることを習ひて、日に智識才能を益さんことを欲する者なり、殊に彼の禮を學ぶ者の如き、三千三百條件の夥多なる作法を一一に習熟せんことは容易ならざるのみならず、かかる

○河上公、以此爲忘知章。  
○沈曰、此章貴損。

○奕本、學下、道下、並有者字。又損下、有之字。而作則。

○第十九章絶  
聖棄知民利百  
倍。

學問に没頭すれば、知見外に馳せて、内修の工夫を缺き、智識才能の開くるに隨ひて、私心私欲は日日に増益するに至る。而るに世人の多くは道の大原の一に出づることを知らず、競うて學を爲して、聞見の博からんことを求め、本を忘れて末を逐ひ、紛然として歸著するところなく、所謂論語讀みの論語知らずの譏を招くに至る。大慧が士大夫讀得書多、底無明愈多、讀得書少、底無明愈少といへるも、禪家にて帶淫修禪、如蒸沙作飯、縱有多智、皆成魔道といへるも、亦是れをいふ也。而るに道を修むる者は、之に反して、枝葉を脱略して、直ちに本根を探り、所謂一を求むるを旨とするが故に、學びて知ることを止め、すでに習ひたることを捨てて、日に智識才能を損し、滅し、外禮數を簡にして、内誠實純朴の徳を修め、己の聰明を黜け、私智私欲を去ることを務むる也。かくして私智私欲を損したる上にも、又之を損し、最早損し盡して、更に損すべき妄念なく、心清静虚無にして、一點の私智私欲の存することなくんば、以て一即ち自然の大道と契合して爲すことなきの境に至ることを得る也。すでに爲すことなきに至れば、何事も故らに爲すといふ心なく、萬物の自然に任せて

各、其の生を遂げしむるが故に、却つて天下の事に於いて、爲さずといふことなき也。譬へば天地は爲すことなくして、四時行はれ、百物生じ、春は花咲き、秋は實り、鳶は飛び、魚は躍るが如し。中庸第二章に從容、中道、聖人也とあるは是れ也。前章の不行而知、不見而名、不爲而成といふは即ちこの無爲而無不爲の效なり。

故取天下常以無事及其有事不足以取天下。

【譯讀】故に天下を取るには、常に事なきを以てす。其の事あるに及びては、以て天下を取るに足らず。

【字義】○取 得る也。○天下 天下萬民の心を斥す。○無事 即ち無爲なり。

【直解】第二節前を承けて無爲の功を言ふ。上述の如くなるが故に、聖人が天下の人心を得るには、常に無事即ち道を體して無爲に至るを以て也。無爲の徳あり、不言の教を以て萬民を化するが故に、推し戴かれて天子となり、太平の功を成就する也。之に反して有事即ち私智私欲を以て作

○突本、故、作、將  
欲、下、下、有、者、字、  
不足上、有、又、字、  
句末有、矣、字、

爲するに心あるに及びては、自然の道に背くを以て勞して功なく、萬民の心を得るに足らざる也。無心無爲の功たる、亦大いなりと謂ふべし。第二十九章に將欲取天下而爲之、吾見其不得已。天下神器、不可爲也。爲者敗之、執者失之。また第五十七章に以無事取天下とあるも同じ。また莊子の大宗師在宥の二篇にも此意を言ふ、宜しく就きて玩味すべき也。

聖人無常心章第四十九 六十八言

【章旨】 此章、前章の意を承けて、聖人は無爲にして百姓の心を以て心と爲す、故に百姓皆心服することを言ふ。

聖人無常心。以百姓心爲心。善者吾亦善之。不善者吾亦善之。德善矣。信者吾信之。不信者吾亦信之。德信矣。

【譯讀】 聖人は常の心なし。百姓の心を以て心と爲す。善なる者は吾も亦之を善とす。不善なる者も吾亦之を善とす。德善なればなり。信なる者は吾之を信とす。不信なる者も吾亦之を信とす。德信なればなり。

【字義】 ○聖人 徳と位とを兼ねたる聖人をいふ。 ○無常心 心に主とする所なき也。即ち何を主として好むの、何を主として惡むのといふ心なき也。論語仁に子曰君子之於天下也無適也。無莫也。とあるは是れ也。 ○徳 人の天より稟け得て生ずるもの、即ち性を謂ふ。

【直解】 第一節、聖人の治術を言ふ。天下に王たる聖人は、常に定まれる主義

○河上公、以此爲任德章。  
○沈曰、此章貴孩百姓。

○德善矣、弱、無矣、字、奕、作、得、善矣、德、信、矣、奕、作、得、信、矣。

とては無し、即ち己の心を以て心と爲し、此事は是非とも此の如くせんと我意を固執するが如きことなく、天下の萬民の心を以て己の心と爲すが故に、民の好む所は己も亦好みて之を政に施し、民の惡む所は己も亦惡みて之を除き去るやうにする也。大學に民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母とあるは是れ也。又聖人は其の心虚無にして天の心と同じく、廣く衆を容るるが故に、百姓の中の善なる者は、吾固より之を善として親むは勿論、不善の人ありとも、吾亦之を善として待つ也。これ其の人の不善なるは、一時私欲の爲めに心迷ひて爲すまじき非違を行ふ者なれば、かかる不善の人をも善として容れ、我が善を以て感化すれば、終には悔い改めて善人ともなりぬべし。例へば小兒の腕白なるを叱らずして、お前は近頃大人しくなりたりと譽むれば、却つて自ら恥ぢて行を慎むやうになるが如し。是れ人の徳即ち性は皆善なれば、不善の人と雖も、其の本の心を原ぬれば、未だ嘗て善ならずんばあらざるが故なり。而るに衆人は度量狭くして、是非善惡の見を固執するが故に、不善の人をば、惡みて之を排斥するによりて、不善の人は、身を容るるに地なく、

花物

林下ニハ神  
アリ、水自過  
ニハ自カアリ

○聖人下、強無  
之字。  
○飲下、突有焉  
字。飲、飲明皇作  
憚、憚、非、渾、其、心、

益、自暴自棄に陥りて、終生悔い改めて善に遷ること能はざるに至る也。彼の出獄人が深く前非を悔いて正業に従事せんとするも、世間の人が彼は前科者なりとして相手に爲さざるが爲めに、再び罪を犯すに至る者少からずと聞く、亦以て證とすべし。論語伯に人而不仁、疾之已甚、亂也とあるは、亦これを謂ふ也。又百姓の中の誠信なる者は、吾固より之を誠信なる者として親むは勿論、誠信ならずして詐僞を爲す者と雖も、吾亦之を誠信なる者として之を遇し、自然に己が誠信の徳に同化せしむるやうにする也。これ其の徳即ち天より稟け得たる本性を原ぬれば、未だ嘗て誠信ならざるはなく、其の一時詐僞を爲すは、私欲の爲めに其の心を惑溺せしめたるに因るが故なり。孟子の性善説も歸する所は此と同じき也。第二十七章に聖人常善救人、故無棄人、また第六十二章に人之不善、何棄之有とあると并せて考ふべし。

聖人之在天下、歙歙爲天下、渾其心、百姓皆注其耳目、  
聖人皆孩之。

林本無其字。奕作渾渾焉。

【譯讀】聖人の天下に在るや、歛歛として天下の爲めに其の心を渾にす。百姓は皆其の耳目を注ぐ。聖人は皆之を孩にす。

【字義】○歛歛 ふらりとして心に主とする所なき貌。○渾 混に同じ、心がまろくなつて居て、少しも圭角なく、物の差別を爲さざる義。○孩 小兒の始めて生れて、漸く笑を解する時の如く少しの不善不信も無き也。

【直解】第二節、聖人の治效を言ふ。聖人の天下におけるや、心に主とする所なく、常に虚無にして静かに落ち著き居り、物來ればそれに順應するのみ。故に天下に向つて其の心をまろくして少しも圭角なく、有物混成、先天地生第五章とあると同じく、即ち太極の渾然として物を分別せず、萬端の事をすべて一纏と爲すが如く、心に善不善、信不信の差別を立つることなく、廣く之を包み容るる也。さて百姓は方に其の耳を竦だて、目を瞪り、伺察小慧を以て賢と爲し、争ひて私利私欲を求めんが爲めに、往往不善不信の行を爲すに至ると雖も、聖人は之を憐みて憎惡することなく、一に之を待つこと、始めて笑ふことを解する嬰兒の如くする也。

○第二十章、我獨泊兮其未兆、如嬰兒之未孩

嬰兒は無心にして不善不信あることなし、而るに其の嬰兒の如くする百姓に不善不信あるが如きは、前にも述べしが如く、其の天性に出づるにあらず、無知なるが故に心迷ひて昏きに由るのみ。故に聖人は屑屑として善不善、信不信を較べて之を分別すること、爲さず、廣く之を包容して、自然に感化善導し、天下の百姓を擧りて、渾然として敦樸無欲にして、善信の人たらしむ。これ聖人無爲の道を體して天下を御するの妙用にして、治效の最も至極せる者なり。

○河上公、以此爲貴生章。  
○沈曰、此章論攝生。

○民之生動之、死地、彌、民作人、奕、作、而、民之生、生而動、動皆之、死地、韓、非同、○奕、厚、下、有、也、字。

出生入死章第五十 八十一言

【章旨】此章攝生の要を論じ、世人が生を貪りて却つて生を損するの惑を解きたる也。

出生入死。生之徒十有三。死之徒十有三。民之生動之。死地亦十有三。夫何故以其生之厚。

【譯讀】出れば生、入れば死。生の徒十に三あり、死の徒十に三あり、民の生動きて死地に之くもの、亦十に三あり、夫れ何の故ぞ、其の生を生とするの厚きを以てなり。

【字義】○出生入死 出生は無よりして有なるをいひ、入死は有よりして無なるをいふ、生は一寸此世に出でて寄留するが如く、死は己の本宅に歸りたるが如し、故に入といふ、淮南子精神に生寄也、死歸也、何足以滑和とあるは是れ也。○徒 たぐひ也、屬の義。○生生 上の生の字は心を用ひて養生するをいふ。

【直解】第一節、常人の生死に就きて言ふ、出即ち無より有に見はるれば生といひ、入即ち有より無に歸すれば死といふ也。さて此世に生れ出でたる人の天賦には、長壽なる者あり、夭折する者あり、長壽なる者は、生の徒即ち生のたぐひに屬し、それが凡そ十分の三あり、夭折する者は死のたぐひにて、それが凡そ十分の三あり、此二者即ち人の壽命の長短は天命なれば、人力にては、如何とも爲し難き也、而るにここに人あり、折角生の徒即ち長壽を保つべき運命を有しながら、柔弱の道を守りて、澹泊無爲に安んずること能はず、己の強きを恃みて物と相争ひ、私欲を肆にして妄動し、以て自ら死地にゆき、身命を喪ふ者も、亦十分の三あり、夫れ人情が故に然るか、他なし、自ら己の身を養ふ心が厚きに過ぎて、一寸したる風邪にも薬を服し、少しの發熱にも醫師を喚び、やれ吸入器、やれ冰囊と餘りに神経過敏なるが故に、却つてそれが爲めに身體を害するに至る也、易にも无妄之薬、不可試也とあるは是れ也、加之平生美味に飽き、醇酒に耽る者の如きは、皆身を害し命を短くする因となる也、貝原益軒の養

○第七十五章、以其求生之厚、是以輕死。



生訓にも凡そわが身を愛し過ごすべからず、美味をくひ過し、芳醞を飲  
 み過し、色を好み身を安逸にして怠り臥すことを好む、皆是れ我が身を  
 愛し過す故に、却つて我が身の害となる。又無病の人補藥を妄に多く飲  
 んで病となるも、身を愛し過す也、子を愛し過して子の禍となるが如し  
 といへり。又呂覽性本にも出則以車、入則以輦、務以自佚、命之曰招廢之機、肥  
 肉厚酒、務以自彊、命之曰爛腸之食、靡曼皓齒、鄭衛之音、務以自樂、命之曰伐  
 性之斧、三患者富貴之所致也とあるも亦此意を言ふ也。易の頤の卦の頤  
 は養の義なり、養が過ぐれば却つて身が倒れるが故に、頤の卦に次ぐに  
 大過の卦を以てす、大過は顛なり、生を養ふこと厚きに過ぐれば、身體顛  
 覆するに至るの卦なり、この易の卦の義は、即ち老子の此句の意と正に  
 相同じ、さて六十歳以上の老人は姑く置き、小兒の死亡率が著しく多き  
 所以は、父母が餘りに之を愛し過ごして、無暗に厚衣をさせ、飽くまで美  
 味を與ふるに因ること少からず、されば保嬰論に若要小兒安、須帶三分  
 饑、與寒、此攝生之要也、終身守之可也といひ、後漢書王符に哺乳多則生癩  
 病とあるは、皆此意を言ふ也。

○何故下、突本  
 有也字、無死地  
 下、彌本無焉字。

蓋聞善攝生者、陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵、兕無所  
 投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃、夫何故以其無  
 死地焉。

【譯讀】蓋し聞く能く生を攝する者は、陸行して兕虎に遇はず、軍に入りて  
 甲兵を被らず、兕も其の角を投ずる所なく、虎も其の爪を措く所なく、兵  
 も其の刃を容るる所なし。夫れ何の故ぞ、其の死地なきを以てなり。

【字義】○攝生 攝は攝政、攝官の攝の如く、生を認めて己の有と爲さず、暫  
 く之を管攝するが如き也。即ち虚無の道よりいへば無即ち死が本にて、  
 有即ち生は假の物なり、其の假の物を暫く管りて保つ義にて攝といふ。  
 ○兕 爾雅に形如野牛、一角、重千斤とあり。 ○遇 期せずして偶然に  
 出會ふ義。 ○甲兵 猶ほ兵戈と謂ふが如し、甲冑は身を護る所以にし  
 て人を傷くる者にあらず、ここは兵の字が主にして甲の字は帶説にて  
 意味なし。

○第五十五章  
含德之厚、比於  
赤子、毒蟲不螫、  
猛獸不據、攫鳥  
不搏。

【直解】第二節、聖人死地なきを言ふ。前節に十中の九をいふ。此節は、殘餘の十分の一に就きて説く。蓋し嘗て之を聞く、善く生を攝して身を保つ聖人は、陸を行きても兕とか虎とかの如き猛獸に出會ふことなく、軍中に入れども兵刃の害を被らず、無欲にして心に少しのすきまがなき故、兕も其の鋭き角を觸るる所なく、虎も其の利き爪をむき出してひつかける所なく、能く切れる刃物も其の刃を加へ容るる所なき也。莊子大宗師に古の真人を論じて入水不濡、入火不熱とあるも、亦此意をいふ。夫れ何が故に然ることを得るか、他なし、聖人は無我無心にして私欲に動かされず、柔弱にして物に逆はず、故に其の身常に安泰にして危き死地なきが故なり。以て虚無の道を體して、私欲を除き去れば、身を保つことを得、私欲多き時は身を喪ふ、身を愛すことの厚きに過ぐるは却つて身を害する所以の理を悟るべき也。林希逸曰ふ、昔某ノ寺アリ、前ニ一池アリ、惡蛟之ニ處リ、人皆敢テ近ヅカズ、一僧遠キヨリ來リテ、初ヨリ之ヲ知ラズ、行キテ池邊ニ至リ、遂ニ衣ヲ解キテ浴ス、見ル者之ニ告ゲテ曰フ、此中ニ蛟アリ、甚ダ惡シ、浴スベカラズト、僧曰フ、物ヲ害スルノ心ナケレバ、物モ人

ヲ傷クルノ意ナシト、遂ニ浴シテ出ヅ、老子ノ説ハ虚言ニ似タリ、此レヲ以テ觀レバ則チ其ノ言モ亦虚ナラズとあり。無住國師の砂石集に此章を引きて曰ふ、老子いふ道德ある人は兕虎も爪をさしおく所なく、甲兵も刃を接ふる所なしと、其の意は大道を心に修め、妄念なく、身に死地なき者は、殺すべき所なきが故なり。此故に魔にとらるるは、先づ心が魔となり、佛に度せらるるは、先づ心が佛となる、憍慢、即魔也、菩提心、即佛也、大般若の意は般若を念する者は、軍に入るに刀杖身を犯さず、其の故は、般若は無相平等の智より、同體無縁の慈悲を興す、故に身に貪瞋愚癡等の兵杖なし、この故に敵おのづから慈悲を興し、こはき物おのれと損し落ちうせる由を説かれたり、薪を焚くに木の中の火起て後、外の火は附く也、生木は中の火起ること遅し、故に火の燃ゆること遅し、すべて心より萬事起て後、外の縁は來るなりと、佛家の説なれども、參考の資と爲すべき也。按ずるに聖人と雖も、人間なれば、絶對に兕虎兵刃の害を被らずといふ筈なし、然るにここに其の害を被らずといへるは、聖人は虚無の道を體し、無欲にして初より己が身を無きものとし、唯其の身に含る所の

精神のみを有とす、精神は固より形なければ、兕虎兵刃も害を加ふるこ  
と能はず、萬世までも生存するを得るが故に、此の如く極言せしなり、而  
るに此章を曲解して聖人は肉體までも不老不死なることを得るもの  
と爲し、道士の煉りたる怪しき丹藥などを服して、それが爲めに死せし  
天子さへもあり、其の愚や憐笑すべき也。

【辨正】此章三個の十有三に就きては古來諸說紛紛たり、或は生之徒十有  
三は第六十七章の三寶即ち慈、儉、不敢爲、天下先を斥し、死之徒十有三は  
其の反對なる剛強、多欲、驕亢を斥し、民之生、動之、死地亦十有三は、第四十  
六章の罪禍、咎を斥すと解する者あり、或は十に加ふる三と解して九竅  
四關を言ふと爲し、或は六水七火と爲し、或は十惡三業と爲し、或は七情  
六慾と爲し、或は十は數の終にして至りて多し、其の上更に三を加へ  
たるは、多きが上にも多き意をあらはすと説く者あり、其の他にも異論  
百出、恰も聚訟の如し、之を要するに皆是れ牽強附會、胡說亂道、眞に噴飯  
すべき也。

○河上公、以此  
爲養德章。

道生之章第五十一 七十二言

【章旨】此章、道德は萬物の本たり、故に道を尊び、德を貴ぶべきことを言ふ。  
道生之、德畜之、物形之、勢成之、是以萬物無不尊道而  
貴德。

【譯讀】道之を生じ、德之を畜ひ、物之を形し、勢之を成す、是を以て萬物は道  
を尊びて、而して德を貴ばざることなし。

【字義】○道 虛無自然の大道、即ち理なり。○德 萬物が道を得て性(即  
ち一氣)となるをいふ。水の潤ひ、火の燃ゆる如きをいふ。管子に虚無無形  
之謂道、化育萬物、之謂德とあり。○物形之 物物にして之に與ふるに  
定形を以てする也。

【直解】第一節、萬物は道と德とを尊重するを言ふ。道は虚無自然の理にし  
て形なし、而も能く萬物を生じ始むるの祖となる。首章に無名、天地之始  
とあるは是れ也。さて萬物は道を得て各の性と爲す、これを德といふ。德

○第四十章、天  
下之物、生於有、  
有生於無。

は能く萬物を化育するの用あり、故に徳畜之といふ。首章に有名萬物之母とあるは是れ也。以上の二句は萬物の生ずる先をいふ。かくして森羅萬象は天地の氣を稟け物物にして形を具し潤ふ徳ある者は水の形となり、燃ゆる徳ある者は火の形となり、飛ぶ徳ある者は鳥の形となり、遊ぶ徳ある者は魚の形となる也。故に物形之といふ。萬物の初めて生ずるや、其の形極めて微小なれども、陰陽雨露、四時の運行など、すべて自然の勢即ち力によりて次第に長成することを得る也。これを勢成之といふ。勢とは例へば筍の春の陽氣に乗じて僅の間に五尺も一丈も伸びゆくが如きをいふ。之に反して其の伸びんとする筍の頭を壓へつけ、時を過ぐれば、勢ぬけて枯死するに至るは、勢に逆ふが故に然る也。この二句は即ち萬物の生せし後をいふ。夫れ此の如くなるが故に、萬物の始は、道と徳とに本づかざるはなし、これを以て萬物は道を崇び、徳を貴び重んぜざるはなき也。

道之尊、徳之貴、夫莫之爵、而常自然。故道生之、徳畜之、

○爵、河上弼、位作命。

長之育之、亭之毒之、養之覆之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

○河上、亭作成、毒作熱、突、養作養。

【譯讀】道の尊く、徳の貴き、夫れ之を爵すること莫くして、而して常に自ら然り。故に道之を生じ、徳之を畜ひ、之を長じ、之を育し、之を亭し、之を毒し、之を養ひ、之を覆ふ。生じて而して有せず。爲して而して恃まず。長として而して宰らず。之を玄德と謂ふ。

【字義】○莫之爵常自然 道德の尊貴なるは天地自然の理にて、人爲的の爵位を假らずして自ら尊貴なるをいふ、一本爵を命に作る、爵位を命する義にて意は同じ。○亭 平なり、之を平かにして危からざらしむる也。○毒 篤の借字なり、之を篤くして耗ざらしむる也。○覆 音フ 牝雞が卵を覆ひあたたむるが如くする也。

【直解】第二節、道德の貴ぶべきは幽玄にして知るべからざる中に在るを言ふ。さて公卿大夫の如き爵位によりて貴き者は、若し罪過ありて其の爵位を褫れたる時は、本の木阿彌となる也。然るに萬物を生ずる道と徳

との尊貴なる所以は、誰からも爵位などを受くることなけれども、常に變ることなく、自然にして良に貴き也。其の眞に貴き道は萬物の本となりて之を生じ、徳は之を畜ふ、即ち始めて生じて與ふるにそれぞれの性を以てし、之を長じ之を育てて漸くに其の形を成さしめ、之を亭即ち平かにして危からざらしめ、之を毒即ち篤くして耗ることなからしめ、之を養ひ之を覆ひ、愛養保護して十分に其の生を遂げしむ。右の如く萬物の初めて生せしより、全く成るに至るまで、すべて道の力にあらざるはなし。然るに道は萬物を生じたればとて、以て己の力なりとして之を有することなく、萬事を爲したればとて、以て己の功なりとして之を恃みて誇ることなく、萬物の長として而かも之をきりもりする心もなく、萬物の自然の儘に任せ置く也。此の如く道の妙用たる幽遠にして知り難く、名づけ難き者なるが故に、之を奥深き徳、即ち玄德といふ也。玄とは首章の玄之又玄の玄に同じ、第六十五章にも能知、楷式、是謂、玄德、玄德、深矣、遠矣とあり。生而不有以下はすでに第二章にて説明せり、并せて考ふべき也。蘇轍曰ふ「道ハ萬物ノ母、故ニ萬物ヲ生ズル者ハ道ナリ、其ノ運シテ

徳ト爲ルニ及ビテ、羣衆ヲ牧養シテ而シテ辭セズ、故ニ萬物ヲ畜フ者ハ徳ナリ、然リ而シテ道德ハ即チ自ラ形スルコト能ハズ、物ニ因リテ而シテ後ニ形見ハル、物ハ則チ自ラ成ルコト能ハズ、遠近相取り、剛柔相交リ、積ミテ而シテ勢ト爲ル、而シテ後ニ興亡治亂ノ變成ル矣、形ハ物ニ由ルト雖モ、成ルハ勢ニ由ルト雖モ、而カモ道ニ非ザレバ生ゼズ、徳ニ非ザレバ畜ハズ、是ヲ以テ道ヲ尊ビテ徳ヲ貴ブ、尊ブコトハ父兄ノ如ク、貴ブコトハ侯王ノ如クス、道ハ位ナクシテ、而シテ徳ハ名アルガ故ナリ、爵ヲ恃ミテ而シテ後ニ尊貴ナル者ハ、實ノ尊貴ニハアラザル也」と。

○河上公、以此爲歸元章。  
○沈曰、此章貴守母。

○突以爲天下母上、有可字。  
○河上得作知、以知作復知。

天下有始章第五十一 七十二言

【章旨】此章、人は當に其の生ずる所の本を知り、言行を慎み、私欲を去り、受くる所の性を損せざるやうに爲すべきことを言ふ。

天下有始。以爲天下母。既得其母。以知其子。既知其子。復守其母。沒身不殆。

【譯讀】天下始あり、以て天下の母たり、既に其の母を得て、以て其の子を知る。既に其の子を知りて、復其の母を守れば、身を没するまで殆からず。

【字義】○天下有始 始は首章の天地之始の始と同じ。○母 養ひ育つる意に取る、主宰即ち道をいふ。○子 天地間の萬物を斥す。○沒身 身を終るまで也。弼本身を其に作る。

【直解】第一節、一章の大意を總説す。抑も天地の間に始といふものあり、それは首章に無名、天地始とある始と同じく、無名即ち虚無自然の道にいふ。この道が天地萬物を生出する一番の本なるが故に、以て天下の母たりといふ。さて虚無の道とは、換言すれば太極の元氣を斥していふ、この元氣が萬古に互りて變ることなく、常に萬物を生成して已むことなし、故に天下の母たりといふ也。されば若し人類竝にすべての萬物がこの元氣に離るれば、須臾も生存すること能はざるもの也。すでに太極の元氣即ち虚無自然の道を十分に知り得て而る後に、其の子即ち萬物が其の道に由りて生じ出でたる所以の理を明かに知りたる上にて、更にまた其の生れ出でたる母即ち虚無の道を何處までも守りて失はざるやうにすれば、己が身を終るまで危きことなき也。例へば莊子遊知北に精神遊生於道とあるが如く、人の心は他の萬物と同じくもと道より出でたるものなれば、道に對して子と謂ふべし。されば心は常に其の母たる虚無の道を體して、清靜にして無爲、恬澹にして無欲なるべき筈なれども、凡人は免角私欲多きが爲めに、無爲なること能はず、有爲を好み、常に營營として萬事に手を出すが故に、種種の事故を生じ、失敗を招きて危地に陥るに至る也。然るに其の母即ち無爲自然の道を辨へ知ることを得て、而る後に其の子たる心の由りて出づる所も、この道に外ならざるを知

天地之根、第二十五章、有物混成、先天地生。

○第六章、谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂

○河上、兌作鏡。

り得、以て周く萬事萬物の理をも明かに辨へ知ることを得る也。易繫辭上傳に知周乎萬物とあるは是れ也。かくしてすでにわが心の由りて出づる所を知り得、萬事萬物の理をも辨へ知りて居れども、妄に手を出すことなく、末に在りて其の本を忘れず、流に當りて其の源を忘れず、退きて其の本源たる清静無爲の道を守りて、此と離ることなく、心常に恬澹無爲なれば、其の身を終るまで安泰にして、危殆の災害に値ふことなき也。

塞其兌、閉其門、終身不勤、開其兌、濟其事、終身不救。

【譯讀】其の兌を塞ぎ、其門を閉れば、身を終ふるまで勤れず、其の兌を開き、其の事を濟さば、身を終ふるまで救はれず。

【字義】○兌 竅なり、耳目鼻口をいふ。○門 第十章の天門、開闔の天門に同じ、心に喩ふ。老子通義には門意也とあり、亦通す。○勤 勉に通ず、勞なり。○濟 益なり、左傳桓公十一年に盍請濟、師於王之濟に同じ。

【直解】第二節、母即ち道を守るの工夫を言ふ。さて道を守りて須臾もそれと離れざるやうにする工夫は他なし、先づ其の私欲邪知を除き去りて

心を清静無欲にするに在り、それを爲すには、兌即ち耳目鼻口の欲を塞ぎ、聲色香味などの誘惑に制せられず、所謂六根清静ならしめ、門即ち心の聰明を閉ちて、妄に動かすことなく、第二十六章に雖有榮觀、燕處超然とあるが如く、常に恬澹無爲にして、外界の物欲の爲めに心を擾さるることなからしめば、身を終ふるまで常に危殆の患なきのみならず、常に優游として、少しも勞苦することなき也。之に反して、耳目鼻口を開きて、邪欲を肆にし、心を閉ちて恬澹無爲なること能はず、好みて種種の事端を増す時は、身を終ふるまで勞苦して救ふべからざる也。例へば、豊太閤が匹夫より起りて天下を掌握し、位闢白に陸るに至りても、猶ほ止足することを知らず、寵を得て蜀を望み、終に征韓の師を興し、中道にして身死し、未だ幾何ならずして家亡びし如きは是れ也。

見小曰明、守柔曰強、用其光、復歸其明、無遺身殃、是謂襲常。

【譯讀】小を見るを明と曰ひ、柔を守るを強と曰ふ、其の光を用ひて其の明

○兩曰、河上本作曰、淮南子作曰、○襲、河上弱竝作習。

に復歸すれば、身の殃を遺すことなし。之を襲常と謂ふ。

【字義】○小 かすかにして窺ひ見るべからざるをいふ、事の幾の微なるをいふ。○明 心の本体の明かにして、能く自ら知るをいふ。○光

聰明にして人を知るの智なり。上の明は其の裏面を照すをいふ、第十六章の復命曰常、知常曰明、また第三十三章の知人者智、自知者明の明は皆是れ也。光は外面を照すを以て名づく。第四章の和其光、また第五十八章の光而不耀の光は皆是れ也。明は光の體にして、光は明の用なり。○襲 常 襲は藏なり、第二十七章の襲明の襲に同じ、密にして露はさざる也。常は眞常の道なり。

【直解】 第三節、母を守るの工夫を申ねて言ふ。第六十三章に天下難事、必作於易、天下大事、必作於細とあり、韓非子老論にも千丈之隄、以蟻蟻之穴潰、百尺之室、以突隙之烟焚とあり、箕子は紂王が始めて象箸玉杯を造りしを見て、やがて其の驕奢が次第に増長して遂に亡ぶるに至らんことを豫言せり。されば事の極めて微小なる時に於て、早く其の兆を察し見て、之を未然に防ぎ、大事に至らざるやうにするは、心の本体の明かなりとい

○第十六章 歸  
根曰靜、靜曰復  
命、復命曰常、知  
常曰明、云云、第  
二十八章、知其  
白守其黑、爲天  
下式、爲天下式

ふ也。又太公が葛の欲する所を見て、敢て争はず、國を岐山の下に成したるが如き、或は韓信が屠中の惡少年の胯をくぐりしが如く、何事も堪忍を第一とし、人より無理を仕掛けられたりとも、怒ることなく、始終柔順の道を守りて争ふことなければ、何事も起ることなく、危殆に陥る患なし、其の堪忍強き所が眞の強といふもの也。第三十六章に柔勝剛、弱勝強といひ、第四十三章に天下之至柔、馳騁天下之至堅、といひ、第七十六章に柔弱、者生之徒、といへるは、皆反復して此義を言ふ也。光は心の本体たる明の發する所、即ち明の用なり。さて人は私欲の爲めに心が昏く亂るるが故に、人物の正邪賢愚、事の利害得失を辨へ明かにすること能はざる者なるが、若し私欲の爲めに心の明を失ふことなく、能く智慧の光を用ひて正邪得失を見損することなきと同時に、餘りに其の光を耀し過ごすことなく、程能く之を用ひ、所謂和光同塵の教を守り、光を韜みて本体の明に復歸すれば、能く人を知り、又能く己を知るを以て、身の禍殃を遺すことなき也。換言すれば、餘りに己の聰明を働かせて鼻先へ見はし、利口ぶる時は、人に惡まれ排斥せらるれども、深く己の聰明を包み藏して、



常德不忒、又曰、常德乃足、復歸於樸。

昭昭靈靈たる心の本体の明に復歸し、虚無自然の道を守れば、禍に罹る患もなく、身は常に安泰なるを得る也。これを心に眞常の道を韜み藏して窮まること無しといふ也。

【辨正】 襲常の襲を河上本、弼本竝に習に作る。習は重ねてならふ義なれば、今日も明日も復明日も重ねて常道に歸りて恆久に之を守るの義とす。按ずるに襲の字にも重ねるといふ義あれば襲常を習常と同義に解するも亦通すれども、上に述べたるが如く、襲明の襲と同義に解するを安當とす。

○河上公、以此爲益證章。  
○沈曰、此章論施之害。

使我介然章第五十三 五十一言

【章旨】 此章、無爲の道を行はず、妄に施爲を事とするの害を言ふ。  
使我介然有知行於大道、唯施是畏。大道甚夷、而民好徑。

【譯讀】 我をして介然として知ること有りて大道を行はしめば、唯施すことを是れ畏る。大道は甚だ夷かにして、而して民徑を好む。

【字義】 ○介然 分辨ある貌。孟子盡心下 山徑之蹊間、介然用之而成路の介然に同じ。○施 施設施爲の義、一解に音イ池の假借字、淮南子主術 直ナナナルヲム施、矯邪とある施にて、邪施は即ち下文の徑是れなり、大道と違ひて動輒れば邪池の徑蹊に入るの義とす、亦通す。○徑 小にして捷き路なり、論語雍也 行不由徑の徑なり、轉じて邪シヨマコなる喩とす。

【直解】 第一節、此章の大綱を説く。我をして是非善惡を分辨する所ありて、虚無の大道を行はしめば、所謂不言の教、無爲の化を貴び、以て天下の太

平を致すやうに務め、彼の法度禁令其の他一切の煩はしき施設を事とすることを畏るる也。抑も大道は甚だ夷即ち平平坦坦として天下の人の安心して由るべき道なるを、民は免角己の私知私欲に迷はされて心昏く、却つて大道をば迂遠なりとし、棄てて由ることなく、徒に崎嶇險難なる邪徑を辿り行くことを好み、動もすれば危地に陥るは眞に欺すべき至なり。然るに若し其の上に、我よりも法令などを頻發して、彼此と施爲することを敢てせば、天下は紛然として亂るるに至らん。秦の時、法令益、煩苛にして民益、奸惡となりたるを、沛公關中に入りて、悉く秦の苛法を除き、法を三章に約して、秦の民大に悦服せしは、是れ其の明證なり。

朝甚除、田甚蕪、倉甚虛。服文采、帶利劍、厭飲食、財貨有餘。是謂盜夸。非道哉。

○夸、河上作誇、通奕本盜夸下、更多盜夸二字、道下、彌、奕、竝有也字。

【譯讀】朝甚だ除まり、田甚だ蕪れ、倉甚だ虚し。文采を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、財貨餘ある、是を盜夸と謂ふ、道に非ざるかな。

【字義】○朝 朝廷なり、韓非は聽訟の役所と説けども、廣く朝廷の義とす

べし。○除 治なり。○文采 文は青赤色なり、采は色絲なり、美服をいふ。○厭 壓に通ず。○財貨 一本に資財また資貨に作る。○盜夸 盜みて得る所なるが故にいふ、夸は誇に通ず、衣食などの華美なるに誇る義、韓非子老解に盜竽に作る、竽は五聲の長なれば、盜魁の義に用ひたれども非なり。

【直解】第二節は、前節の細目を言ふ。朝廷の宮室臺榭は甚だ立派に整ひ治まれりと雖も、百姓は上の施設を好むことを見習ひて、己の本業を怠り、徒に眼前の小利を争ふが故に、田畑は甚だ荒蕪し、随つて米麥の收穫も年年に減少し、倉廩はあれども、其の中は空しくして、壹俵の穀物さへ無しかかる國は益、貧窮に陥りて、風俗も益、惡しくなり、訟獄も益、繁くなる也。其の上に在朝の官長諸有司どもは、誅求苛斂ほじまに生民の膏血を竭して、己が不義の富貴に驕り、錦繡の衣を服し、銳利なる名劍を帶はき、醇厚なる飲食に酔飽して、尙ほ且つ財産は餘りある也。是れ盜人が盜み得たる金品にて贅澤なる生活を爲し、人に向つて其の榮華を誇り示すに同じといふべし、吁道にあらざる不都合千萬の事なるかな。此一節は淮南子

主術の朝廷、燕而無迹、田野辟而無草、故太上、下知有之、とあると其の義正に相表裏せり。また韓非子五には堯之王天下也、茅茨不翦、采椽不斲、糲粢之食、藜藿之羹、冬日麕裘、夏日葛衣、雖監門服養、不虧於此矣。とあり、この故に下民帝堯の徳に化して、皆善良となり、無爲にして大いに治まりたる也。新語に堯舜之民、可比屋而封、桀紂之民、可比屋而誅、といふ語あるも、畢竟上の好む所は、下は必ず焉より甚だしきものあるに由る也。盜夸の二字は稍過激に失するが如しと雖も、老子深く當時の政府が、無暗に重税を民に課して、政廳法廷などを壯麗にし、官吏の給料を過分に與へて、衣服飲食器物等に至るまで贅澤を盡さしむるが爲めに、民間の衰弊甚だしきを憤りて發せし言葉にして、眞理は則ち此に外ならざる也。されば聖人の孔夫子さへ論語顔に季康子患盜、問於孔子、孔子對曰、苟子不欲、雖賞之不竊、とのたまへり、不欲とは己の私欲を制して敢て肆にせざる義にて、孔子の此語、歸する所は此章の盜夸の義と同じ。實に今古爲政者の金箴と爲すべき也。

善建者不拔章第五十四 八十七言

【章旨】 此章、善く自然の徳を執り守る者は、誠に長久安全にして、子孫祭祀を絶つことなきを言ふ。

善建者不拔。善抱者不脱。子孫以祭祀不輟。

【譯讀】 善く建つる者は、抜けず。善く抱く者は、脱せず。子孫以て祭祀して輟まず。

【字義】 ○善建 老子好みて善字を用ふ。善地、善淵、善行、善計、善結、善貸の類、皆自然の道に従ひて、仕方カチの上手なるをいふ。建は建徳第四十の建に同じ、しつかりと強く立ちて動かざる義。善建は即ち善く己の徳を建つる也。○善抱 抱は抱第十の抱にて、守る義、一も亦徳なり、即ち善く己の徳を抱き守るをいふ。

【直解】 第一節、善く自然の徳を守る者は、家運長久に子孫繁昌すること可言ふ。さて一寸建てたる杙キなどは、抜けざることなけれども、善く自然に

○河上公、以此作「修觀章」。

○沈曰、此章頌

○奕子孫下無以字。

○第二十七章、善結無繩約而不可解。

建ちたる者は、容易に抜けることなし。彼の天に參する大木が、數百年を経て其の根が自然に深く地中に入る者は、如何なる暴風又は大地震に遇ひても抜けることなきが如し。それと同じく、眞に善く自然の道をしつかりと建て守る者は、是亦長久に抜けること無き也。又一寸抱きたる者は、脱け失せぬ者とはなれども、善く自然に抱き守る者は、容易に脱け失することなし。彼の藤羅などが、しつかりと木石をからみて抱きたるが如きは、斧斤を用ひて切斷するにあらざれば、容易に脱せざるが如し。それと同じく眞に善く一即ち自然の道を抱き守る者は、是亦何時までも脱けること無き也。すでに第十章に抱一能無離乎とあるによりて、ここには單に抱の一字にて道を抱くの意たることを知る也。右の如く人人善く眞に自然の徳を建てて固く之を抱き守り、士は士、農は農、工は工、商は商と、それぞれ己の職分を勵みて怠らざれば、己一身の安泰なるのみならず、家運長久、子孫連綿として祖先の祭祀を奉じて絶ゆることなかるべし。これ不拔不脱の明證なり。豈目出度き極みならずや。然るに之に反して善く自然の道を建てて、固く之を抱き守ること能はざ

る者は、私欲の爲めに心迷ひ、徒に他人の成功を羨みて、己の職分に安んずること能はず。農夫にして祖先傳來の田畑を典賣して、慣れぬ商業に手を出し、或は同じ商人にしても、多年營み來りし瀬戸物屋を廢業して、吳服屋となり、本屋を止めて紙屋となるが如きは、忽ち失敗して破産するに至るは、世の常なり。豈戒むべき事ならずや。

修之身、其徳乃眞。修之家、其徳乃餘。修之郷、其徳乃長。修之邦、其徳乃豊。修之天下、其徳乃普。

【譯讀】之を身に修むれば、其の徳乃ち眞なり。之を家に修むれば、其の徳乃ち餘あり。之を郷に修むれば、其の徳乃ち長し。之を邦に修むれば、其の徳乃ち豊なり。之を天下に修むれば、其の徳乃ち普し。

【字義】○之 五の修之の之の字は皆前節の善建善抱の道を斥して言ふ。○眞 偽の反對にて誠なる也。眞實無妄の謂。莊子父漁に眞者精誠之至也とあるは是れ也。○餘 餘慶の子孫に及ぶをいふ。易坤文に積善之家、必有餘慶とあるは是れ也。○長 長大の義。林註に尊長の義とするは

○河上弼五修之下並有於字。邦一作國。漢人避高帝諱改也。

非なり。○邦 豊と叶韻、一本國に作るは、漢人高帝邦劉の諱を避けて改めたる也。○豊 大なり、厚なり。○普 徧なり、一本溥に作るは、古字通用する也。

【直解】第二節、自然の徳の效驗を言ふ。之即ち抜けず脱せざる自然の道を吾が身に修め保つ人にてあれば、其の徳は一點の私欲を雜へず、聊の偽もなく、極めて純一にして眞誠なる也。又吾が身に眞の道德あれば、一家の人人悉くそれに化して道德を修め、其の天性を全うし、父母に孝に、兄弟に友に夫婦相和し、其の徳の餘慶は子孫にまでも及ぶ也。前節に祖先の徳を思慕し、祭祀して輟まずとあるは是れ也。又一家悉く道德を修むれば、一郷の人も悉くそれに化して道德を修め、其の天性を全うし、長幼序あり、朋友相信じ、子弟頼多く、其の徳は長く大いなる也。更に其の徳を廣く推し及ぼして、一國の人悉く之を修むれば、人人己の本分を守り、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を樂み、其の徳極めて厚く大いなる也。終に其の徳を天下に及ぼし、天下の人悉く之を修むれば、人人皆其の天性を全うし、各其の業に安んじ、君臣上下各其所を得て、其の道德は徧く四表に光被し、上下に格りて、至治太平の世となる也。蘇轍曰ふ、身既ニ修マレバ、其ノ餘ヲ推シテ以テ外ニ及ボス、天下ヲ治ムルニ至ルト雖モ可ナリ」と。大學に古之欲明明徳於天下者、先治其國、欲治其國者、先齊其家、欲齊其家者、先修其身、欲修其身者、先正其心とあるも、歸する所は、其の義相同じき也。

故以身觀身、以家觀家、以郷觀郷、以邦觀邦、以天下觀天下。吾何以知天下之然哉、以此。

【譯讀】故に身を以て身を觀家を以て家を觀郷を以て郷を觀邦を以て邦を觀天下を以て天下を觀る。吾何を以て天下の然ることを知るや、此を以てなり。

【字義】○以身觀身 上の身は己の身なり、下の身は人の身なり、下文の家郷邦天下の句も之に倣ひて知るべし。○以此 此とは不拔不脱の自然の徳を斥す。

【直解】第三節、己を以て他を觀察することを言ふ、抑も一人の心は即ち千

○兩邦、竊竝作國、何以、突作矣、以天下下、竊無之字。

萬人の心なり、千萬人の理は即ち一人の理なり。されば天下は己一人を大きく推し擴げたるが如き者なれば、己の身を矩<sup>つち</sup>として他人の身竝に一郷一國一天下の事をもすべて觀察することを得る也。孟子が萬物皆備<sup>ひ</sup>於我<sup>上</sup>、盡心<sup>上</sup>といひしも此意なり。この故に吾が身を矩として以て他人の身を觀ることを得べし、即ち前節に述べたるが如く、自然の道を身に修むれば、其の徳眞誠にして偽なく、立派なる人格を保つことを得るなれば、人も亦自然の道を修むれば、其の徳眞誠にして偽なく、立派なる人格を保つことを得る也。又自然の道を吾が家に修むれば、家運長久にして餘慶子孫に及ぶことを觀れば、他人の家に在りても亦同じく、然ることを知るべし、更に之を推し擴めて一郷を以て萬郷を觀、一邦を以て萬邦を觀、一天下を以て今古迭に興りて迭に亡びし萬天下を觀るに、悉く皆然らざるはなし。吾何を以てか天下の大と雖も、亦自然の道を修めて、人人其の天性を全うせば、其の徳徧く行はれて太平至治の世となることを知るか、他なし、此即ち上に述べたる善く自然の道をつる者は拔けず、善く自然の徳を抱き守る者は脱けざるの理は、上下貴

賤の別なく共通にして、萬人皆一なれば也。按ずるに章首の善建善抱の二句は、未だ事物に著きて明かに言はずと雖も、其の意は實に君子の業を立つるに在るなり、孟子曰はく、君子創業垂統<sup>ウレテ</sup>、爲可繼也<sup>ウキ</sup>、……彊爲善而已矣<sup>王</sup>、<sup>梁</sup>、<sup>下</sup>、<sup>惠</sup>と、それ人の建立する所の者、唯善を務むれば、則ち其の機、我に在り、故に人得て之を抜かず、捧持する所ある者も、亦唯善を務むれば、則ち善なる者は、我の固有にして、又何に由りて脱するあらんや、即ち人の祖父の業を立つること、善に在る者を觀れば、以て世を傳ふべく、而して子而して孫、良心思慕して祭祀輟まず、これ不拔不脱<sup>ウレ</sup>の證にあらずや。

○河上公、以此爲元符章。  
○沈曰、此章貴和。

○奕、厚下、有者字、比下、有之字、子下、有也、字、毒蟲、作、蜂、蟄、彌、彌、作、蜂、蟄、虺、蛇、蛟、奕、作、股、彌、作、全。

### 含德之厚章第五十五 八十言

【章旨】 此章、和を貴ぶことを主とす、至和の道以て常久なる所以を言ふ。

含德之厚、比於赤子。毒蟲不螫、猛獸不據、攫鳥不搏、骨弱、筋柔而握固、未<sub>レ</sub>知牝牡之合、而<sub>レ</sub>蛟作、精之至也。終日號而唼、不<sub>レ</sub>噎、和之至也。知<sub>レ</sub>和曰常、知<sub>レ</sub>常曰明。

【譯讀】 含德の厚きは、赤子に比す。毒蟲も螫さず。猛獸も據らず。攫鳥も搏たず。骨弱く筋柔かにして、而して握ること固し。未だ牝牡の合を知らずして、而して蛟作るは、精の至なり。終日號べども、而かも唼噎れざるは、和の至なり。和を知るを常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。

【字義】 ○含德 含とは徳を内に含み藏して散らし洩らさざる也。第十章の專氣致柔、能嬰兒乎の意なり。含蓄して露はさずと解くは非なり。○厚 至なり。○比 同じき也。○赤子 空盡して一物もなきを赤と

いふ、赤地赤貧、赤手皆同じ、嬰兒は其の心純一にして欲もなく求もなし、故に赤子といふ。○毒蟲 蜂蟄の類なり。○螫 尾端を以て毒を肆まにする也。○猛獸 虎豹の類。○據 其の手足を以て之に據りて其の爪をひつかける也。○攫鳥 鷲鷹の類。禮記行儀の疏に「脚ヲ以テ之ヲ取ル、之ヲ攫トイヒ、翼ヲ以テ之ヲ擊ツ、之ヲ搏トイフ」と。○蛟 赤子の陰(命原)なり。○作 起なり。○唼 咽喉なり。古本には唼字なし。蓋し後人莊子の文によりて増入せし也。○噎 啼き極まりて聲の枯れる也。○和 和氣なり、心氣恬靜にして喜怒妄に發せざるをいふ。第四十二章に沖氣以爲和とあり。

【直解】 第一節、精和の徳の貴き所以を言ふ。徳を内に含み藏めて、散じ洩らさざること至りて厚ければ、天真自然の儘にて、私心もなく、私欲もなく、宛も嬰兒の欲もなく、求もなきに比すべき也。抑も人の災害に遇ふは、多くは我より物を犯せば也。嘗て聞く山中を行きて、野猪に遇ひても、平氣にして知らぬ顔して過ぎ行けば、野猪の方にて、安心して來り犯さざれども、或は銃先を擬したり、或は石を投げたりすれば、野猪は忽ち怒り

て飛びかかり来る也。今それ含徳の人、は嬰兒に同じくして心に求め欲することもなく、物と争ひて之を犯す念もなく、無我無心なるが故に、外物も之を害することなし。されば蜂蟻の如き毒ある蟲も我を螫すことなく、虎豹の如き猛き獸も爪牙にて我をひっかけず、鷺鷥の如き鷺鳥も羽距にて我を撃たず、往く處として害に遇ふことなくして、身は常に安泰なることを得る也。第五十章に「兕無所投、其角、虎無所措、其爪、兵無所容、其刃、夫何故、以其無死地」とあるも同じ義なり。すべて剛強なる者は、其の身の屈伸すら自由ならざるに、嬰兒は其の骨至りて弱く、其の筋至りて柔かなるによりて、物を握ることも、しつかりと固きことを得る也。又嬰兒は性慾未だ生せず、男女交合の事を知らずと雖も、其の陰即ち生殖器が興り作つは、其の中に含める精氣が専らにして、散じ洩れざるの至極せる徴なり。即ち上の含徳の至りて厚きが爲め也。又嬰兒は終日啼き號べども、其の咽喉より出づる聲の暖れざるは、其の心恬靜にして好惡喜怒の念なく、其の氣の至りて和げるが故なり。この至精至和の理を知るを常といふ、和する者は常久にして易はらざれば也、この常久の理を

○曰強、奕、奕、則、張、是、謂、強、奕、並、作、謂、之。

益、生、曰、祥、心、使、氣、曰、強、物、壯、則、老、是、謂、不、道、不、道、早、已。

【譯讀】 生を益すを祥と曰ひ、心氣を使ふを強と曰ふ。物壯なれば則ち老ゆ。是を不道と謂ふ、不道は早く已む。

【字義】 ○益生 生は生けるはたらき也。莊子の養生主の生に同じ。益生とは長命せんが爲めに、養生に意を用ひ過ぎ、或は生活を厚くせんとて富貴を貪り求むるが爲めに、日夜己が智能を働かすが如きをいふ。第五十章の生、生之厚に同じ、皆無爲自然の道に反する者なり。○祥 吉凶の先づ兆すをいふ、故に吉凶に通じて用ふ、ここは凶兆の義に用ふ、妖なり。書經の序に「毫有祥、桑穀共生于朝」とある祥に同じ。○使氣 氣は形氣



ともいふ形に屬する者なり。使は驅使するを謂ふ、史記季布の使、酒の使に同じ。○強 剛強にして無理なる事を爲すを謂ふ、上の弱柔の字に對して見るべし。

【直解】第二節前節の義を反説す。すべて嬰兒の無我無心なるが如く、何事も自然に任せて無爲なるを貴ぶ、然るに強ひて無理なる事を爲すは、最も戒むべき事なり。夫れ人の生には限りあり、強ひて之を益すべきにあらず。然るを徒に己が智能を働かし盡して、長命富貴を貪り求めんとし、身に稱かなはざる無理をするは、これ生を益さんとして、却つて生を傷ふ者なり。故に之を妖即ち禍といふ也。又嬰兒は私知私欲なし、故に天より稟け得たる自然の元氣が専らに全くして、其の筋骨も柔弱なること柳の枝の如くにして、折れ摧くる禍なし。第十章に專氣致柔、能嬰兒乎とあるは是れ也。然るに年漸く長するに及びては、己が私知私欲を以て無理に形氣を使ひ役するが故に、元氣次第に衰へ散じて、身體も枯枝の如く強ばるやうになる也。故に之を強といふ。強とは柔弱の反對にして、無爲自然の道に背きて、無理をすることなれば、老子の深く戒むる所なり。され

ば第四十二章にも強梁者不得其死、といへり、并せて考ふべき也。日も中すれば昃き、月も盈つれば虧け、花も開き過ぐれば散るが如く、すべて物の餘りに強く壯んなるは、則ちやがて老衰するもの也。これ易の雷天大壯の卦に、愆の至りて強く壯んなるを戒めたる如く、老子が深く盈滿を嫌ひて謙下を貴ぶ所以なり。益生曰祥以下の三句は皆虚無自然の道に背き、強ひて無理を行ふことなれば、これを不道即ち道にあらずといふ、不道なる事は必ず早く已み滅ぶるに至るもの也。猶ほ彼の飄風驟雨の如く、自然の道に背く者は、豈能く久しからんや、最も戒慎すべき也。末の二句はすでに第三十章にも出づ、并せて考ふべし。朱得之曰、生ハ本自然ナリ、之ヲ委ヌルニ無爲ヲ以テシテ可ナリ、生ヲ益ス者ハ、天ヲ以テ足ラズト爲シ、人ヲ以テ之ヲ助ク、是ヲ妖孽ト謂フ、而シテ禍生ズ矣、氣ハ本沖和ナリ、惟之ヲ守ルニ柔弱ヲ以テシテ可ナリ、心、氣ヲ使フ者、心ヲ以テ氣ヲ動かス、是レ乃チ剛強ニシテ其ノ氣ヲ暴スルナリ矣、凡ソ此レ壯ヲ恃ミテ以テ老ニ趨クナリ、知常曰明、モノト相反ス、是ヲ不道ト謂フ、不道ノ者ハ氣ヲ以テスレバ、則チ耗散シテ而シテ日ニ消シ、神ヲ以テスレバ、

則チ昏擾シテ而シテ日ニ微ナリ、豈能ク世ニ久シカラシヤト。

【辨正】○毒蟲 弼本、蜂蟄虺蛇に作るは非なり、蓋し此四字は河上公が毒蟲に注せしを誤りて本文とせしならん。○峻作 王本、峻を全に作るは非なり、河上本に峻に作り、赤子未知、男女之合會、而陰作怒者、由精氣多之所致也とあり、これ陰の字を以て峻の字を釋す、王弼の據りし所の河上本全に作りし者は、蓋し全字の誤なり、全は陰の本字、全字闕壞して上半を存すれば、全字と相似る、故に誤りたるか、兪樾の諸子平議に詳しく考證せり、從ふべし。

○河上公、以此爲「玄德章」。

○突本、不言下、不知下、並有「也」字。

知者不言章第五十六 六十五言

【章旨】 此章、玄同の徳の天下に貴き所以を言ふ。

知者不言、言者不知、塞其兌、閉其門、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、是謂玄同。

【譯讀】 知る者は言はず、言ふ者は知らず、其の兌を塞ぎ、其の門を閉ぢ、其の銳を挫き、其の紛を解き、其の光を和げ、其の塵に同くす、是を玄同と謂ふ。  
【字義】 ○知者 眞に自然の道を悟りて知れる者なり。 ○挫其銳 勇銳の念を挫きて之を抑ふる也。 ○解其紛 紛は絲の亂れたる也、紛紜たる思慮を解きて之を去る也。 ○玄同 其の光を縮み晦まし、世の俗塵に混じて其の異を見はさざる也。

【直解】 第一節、玄同の徳を釋す、眞に虛無自然の道を心に悟りて知る者は、滅多に口に出して言説せず、之を實踐躬行することを貴び、常に不言之教第二を行ふ事を旨とす。論語陽に孔子が予欲無言とのたまひしも

是れ也。彼の喋喋と言説する者の如きは、皆一知半解の徒にして、眞に道を知る者にあらざる也。此句は實に老子の名言にして、玄妙不可思議なる無形の道は、言を容れざるは勿論の事なれども、之を推し及ばせば、一技一藝の末にも善く適用せらるる眞理なり、諺にも能ある鷹は爪を隠すといへるが如く、眞に技藝の奥義を極めたる名人は、容易に口に出して語ることを爲さざる者なり。之に反して彼の宴會などにて稠人廣衆の前に立ちて嘔吐しくつまらぬ事を辯じて、杯酒の清興を敗る演説使の如きは、多くは輕佻浮薄淺見無學の徒たる也。又謠曲俗歌などにて、他人の迷惑をも顧みず、自ら好みて人に聴かさんとする病的藝人に限りて、生半熟の青冬瓜のみにて、決して名人はなき也。古き川柳に、河東節親類だけに二段聞きとあり、さても五月蠅き蛙鳴蟬噪の徒の絶ゆることなきぞ浮世なる。塞其兌、閉其門の二句は、すでに第五十二章に於て解せしが如く、眞に道を修むる人は、耳目鼻口の私欲を塞ぎ、心の門を閉ぢて、外物の欲の爲めに己の心を擾さざるやうにし、又第九章に揣而鋭之、不可長保とあるが如く、餘りに氣象の鋭くして圭角あるは、身の害と

○第二十章、俗人昭昭、我獨若昏、第七十章、被褐懷玉。

○不可上、河上弼有故字。

なる者なれば、己が銳進せんとする念を挫きて之を抑へ、常に心をして恬退安靜ならしめ、又紛紛として絲の紊れたるが如き煩雜なる思慮を解きて之を除き去り、又第五十八章に光而不耀とあるが如く、己が聰明の光を韜み和げて、外に眩かし露はさず、世俗の塵埃に混同して、獨り自ら異なることを爲さず、至玄至妙にして物我の間なく、一切の色相を離れて、虛無自然の道と默契ヲアツカするを玄同の徳といふ也。挫其銳、以下の四句は、已に第四章にて講述したれば、就きて見るべし。

不可得而親、不可得而疎、不可得而利、不可得而害、不可得而貴、不可得而賤、故爲天下貴。

【譯讀】 得て而して親むべからず。得て而して疎んずべからず。得て而して利すべからず。得て而して害すべからず。得て而して貴くすべからず。得て而して賤くすべからず。故に天下の貴たり。

【直解】 第二節、玄同の徳ある人は、親疎利害貴賤の六者を以て其の守を易へざるを言ふ。さて玄同の徳ある人は、世の俗塵に混同して獨り異なるこ

とを爲さずと雖も、其の心は太虚と同じくして、一點の塵にも染まらず、故に之を望めば儼然として得て親むべからず、之に即けば温和にして得て疎んずべからず、私欲私心なければ誘ふに利を以てすることを得ず、善く生を攝して身に少しの間隙なければ、得て之を害すべからず、世間の寵榮爵位などを羨まざれば、得て之を貴くすべからず、謙下卑汚の地に居ることを嫌はざれば、得て之を賤くすべからず、蓋し玄同の徳ある人は、莊子の所謂物物而不物<sup>トシテラレ</sup>於物の義にして、假令王侯の權威を以てすと雖も、得て之を左右すべからず、人の形あれども人の情なく、一切の相を離れて、萬物の上に超然として獨り天下最上の貴となり、所謂天上天下唯我獨尊たることを得る也、孟子<sup>告子</sup>にも人之所貴者、非良貴也、趙孟之所貴、趙孟賤之、また有天爵者、有人爵者、仁義忠信、樂善不倦、此天爵也、公卿大夫、此人爵也とあり、吁つまらぬ人爵の爲めに身を没するまで束縛せられ、日夜營營として心を以て形の役となすの非なることを知らざる輩は、憐むべき天下の賤丈夫たるのみ。

以正治國章第五十七 八十八言

【章旨】 此章、天下を治むるには清靜無事を以てすべく、法度技巧を以てすべからざることを言ふ。

以正治國、以奇用兵、以無事取天下、吾奚以其然哉

【譯讀】 正を以て國を治め、奇を以て兵を用ふ、無事を以て天下を取らば、吾奚を以て其の然ることを知るや、此を以てなり。

【字義】 ○正 道の常なり。○奇 道の變なり、孫子<sup>計始</sup>に兵者詭道也、故能而示之、不能用而示之、不用とあるは、是れ也、兵を用ふるには必ずしも兵家の常法に拘泥せず、韓信の背水の陣の如きは是れ也。○無事 無爲に同じ、道の眞なり。○取天下 取とは攻め取り、奪ひ取るの義にあらず、自然に天下の人心が我に服従し來るをいふ。

【直解】 第一節、先づ主意を掲ぐ、法令規則などの常の道を以て國を治め、社

○河上公、以此爲淳風章。  
○沈曰、此章貴無事。

○正、奕、作、政、古字通矣、河上彌作、何其然上、奕有天下二字。

會の安寧秩序を維持し、又奇策詐術を運らして兵を用ひ、敵の不意に出でて勝を取る。此二者は皆有心有爲を免れず、故に天下の人心を服せしむるに足らず。只無爲自然の道に従ひて、何事も施設する所なければ、天下の人心は自ら我に歸服するやうになる也。易下傳に黃帝堯舜垂衣裳、而天下治とあるは、是れ其の明證なり。吾何を以て有心有爲の不可にして、無事の以て天下の人心を取るべきことを知るや、上述の如く只此虛無自然の道を體し、無爲にして化すれば、天下の人心自ら歸服し、之に反して徒に事端を多くして民益困窮に陥れば、天下の人心離散するに至る所以の理あるを以て之を知る也。第二十九章に天下神器不可爲也、爲者敗之、執者失之といひ、第四十八章に取天下者常以無事、及其有事、不足以取天下といひ、第七十五章に民之難治、以其有爲、是以難治といふが如き、皆此義を反復して説きたる也。

天下多忌諱、而民彌貧。民多利器、國家滋昏。人多技巧、奇物滋起。法令滋彰、盜賊多有。

○天下上、突有夫字、民多利器、突無民字、人多技巧、突作民多知慧、奇物滋起。

作而表事滋起。○彰、突作章。

【譯讀】天下忌諱多くして、而して民彌貧し、民利器多くして、國家滋昏し。民技巧多くして、奇物滋起る。法令滋彰かにして、盜賊多く有り。

【字義】○忌諱 防禁をいふ。山澤に厲禁あるの類。○利器 便利なる道具なり。○昏 昏亂なり。○技巧 巧者なる百工の技をいふ。

【直解】第二節、前を承けて多事の害を反説す。夫れ天下に忌諱即ち防禁多ければ、山にも海にも厳しき禁合法度を設け、落葉枯枝の如きも勝手に拾ふこと出来ず、魚介海藻の類も、税を納めずしては採ること出来ずといふが如くに、些細の事までにも立入りて、一一禁令を設けて束縛するやうになりては、人民は自由に生計を營むこと能はずして益、貧乏に陥るなり。一説に忌諱とは忌み嫌ひ也、方角時日などの吉凶を詳かにするをいふ、不吉を忌み嫌ひて之を避くるは福を得んが爲めなるに、却つて貧乏になる也。一事を舉げて言へば、家相を論ずる者は、在り來りの家をうち崩して、新に建て換ふる事あり、其の物入り多くして、身代に障るに至る、是れ福を求めんとして、却つて財を損する也と、亦通ず。又世の中に色色便利なる道具が多くなるに隨ひて、人人小智を馳せて、更に一層便

利なる道具を創作せんとし、徒に私知私欲を逞うして末利を逐ひ、浮華遊惰の弊習漸くに長じ、國家は益昏亂するに至る也。例へば昔時轎といふ便利なる者出來て、武士なども馬に乗ることを止めて、馬術次第に衰へ、それが爲めに國家の武備が昏くなり、近來電車が敷かれて、下女下男までも、僅に五六町の處へ使に行くにも、之に乗るやうになりたるが爲めに、脚力次第に弱くなるのみならず、精神もそれに隨つて衰へ、勤勉忍耐などの美風は漸く廢れて、風俗は益昏亂するに至るの類なり。昔上杉應山が領内の百姓に水車を用ふることを禁せしは、かかる人力を省く所の便利の器械を用ふる時は、百姓はそれを頼みて、朝寢をするやうになり、安逸遊惰の風を長せんことを慮りて也。名賢の治法、用意深遠なりと謂ふべき也。民が智巧慧敏を喜び、競うて便利なる道具を好むやうになれば、隨つて細工に巧者なる者多く出で來るのみならず、政府にても特許局などを設けて、之を獎勵するが故に、新奇なる發明品など益多くなるのみならず、珠玉珍玩の奇異にして得難き物も益多く出で來り、民は争うて高價なる器物並に裝飾品などを買ひ求めんとして、奢侈の風

漸く長じ、益困窮して奸僞日に生ずるに至り、甚だしきは賈金賈札なども自由に製造するに至る也。不貴異物、賤用物、財乃足とは周の太保、武王を戒めたる名言なり。地を掘りて臼と爲し、木を揉めて末と爲したる上古の世は、用物のみにて珍奇なる異物とては一切なく、隨つて民の財用常に足りて、風俗も極めて淳朴なりしかば、刑措きて用ひざりし也。後世物質的文明が進歩すれば進歩する程、精神上の文明はそれに逆比例して益退歩する傾向あるは、眞に歎すべき至ならずや。細工を巧にする者多く、新奇なる物が益起りて、風俗漸く奢侈に流れ、人人困窮して罪を犯す者次第に多くなるに及びて、之を防ぎ禁する爲めに法令を制定するは已むことを得ざる趨勢なれども、其の法令が益彰かにして繁くなれば繁くなる程、却つて盜賊は多くなる也。秦の世、法律甚だ嚴密にして盜賊天下に蜂起せしは、是れ其の明證なり。司馬遷曰く、法令者治之具、而非制治清濁之源也。昔天下之網嘗密矣、然姦僞萌起。史記酷吏傳序と、善く老子の意を知る者と謂ふべし。以上四ヶ條は多事の却つて害となるもの也。以て無事にあらざれば、天下の民心をして歸服せしむること能はざる所

○靜、奕作靖通。  
民自正、奕民作  
天下。

以の理を知るべき也。

故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事  
而民自富、我無欲而民自樸。

【譯讀】故に聖人云ふ、我爲すことなくして而して民自ら化し、我靜を好みて而して民自ら正しく、我無事にして而して民自ら富み、我無欲にして而して民自ら樸なりと。

【直解】第三節、古の聖人の語を引きて主意を收結す、無事の貴ぶべく、有事の害ある所以はすでに上に述べたるが如くなるが故に、古の聖人の教に曰ふ、我小智小巧を出さず、徳を修めて無爲なれば、民も亦自然に化して惡を去り善に遷り、風俗も善良となる也。我妄りに躁ぎ動くことなく、虚無の道を守りて恬靜なれば、民も亦觀感する所ありて、心自然に正しくなる也。我無事を好みて種種の施設を爲し、土木を興作するなどの事を爲さざれば、法令も寛簡にして、租税も輕減せられ、民は自然に其の業に安んじ、其の財常に富み足る也。我欲なくして自ら奉ずること薄けれ

○第四十五章、  
清靜爲天下正。

○第七十五章、  
民之難治、以其  
有爲、是以難治。

ば、民も亦自然に化して質朴となる也。是れ實に天下を治むるの要道なりと。此四句は大抵同じやうなる意味の事を、爲化靜正事富欲樸と韻を押し、少しづつ辭を異にして述べたるもの也。之を要するに上たる人は虚無自然の道を體し、只無事にして不言の教を行ひ、無爲の政を施さば、民は自然に感化せられて、純良質朴となる所以を説きたるなり。孔子が爲政以德、譬如北辰、居其所而衆星共之の論語とのたまひしも亦是れの謂か。

【辨正】吾奚以知其然哉、以此の此の字は先儒多く下の忌諱以下の四ヶ條の事を斥すと爲せども、以此の句は老子は常に章末の結句に用ふること、第二十一章に吾何以知衆甫之然、以此とあり、第五十四章に吾何以知天下之然哉、以此とある例にても知るべし、されば先儒の解は謬の甚だしきもの也。或は天下多忌諱以下は、もと別に一章を爲したるものなるを、誤りて之を合せたるならんか。

○河上公、以此爲順化章。

○悶悶、奕作悶悶。醇醇、弱作淳淳。奕作僭僭、說文解字、僭富也。察察、奕作查查、同。

○第二十章、我無欲而民自樸、俗人察察、我獨悶悶。

其政悶悶章第五十八 七十一言

【章旨】此章前章を承けて、有事の害を言ひて之に示すに無爲悶悶の政の貴ぶべきことを以てする也。

其政悶悶、其民醇醇、其政察察、其民缺缺。

【譯讀】其の政悶悶たれば、其の民醇醇たり。其の政察察たれば、其の民缺缺たり。

【字義】○悶悶 無知の貌、昏き也。猶ほ昏昏といふが如し、察察の反對なり。○醇醇 醇は濃き酒なり、厚きをいふ、一本淳に作る、古字相通す、淳厚にして樸の失せざる也。○察察 明かなる貌、煩碎なる事にまで、立ち入りて明かにしらべる義。○缺缺 不足の貌、心に満足せずして缺くる所あるが如き也。

【直解】第一節、悶悶の政の貴きを言ふ。夫れ國を治むるに己の智慧聰明を用ひず、只自然の儘に任せ、無爲にして渾沌と暗きが如く、黑白を明かに分つことをせざれば、民情も輕薄ならず、風俗も手厚くして、人人各、其の分に安んじて、貪り求むる心なく、國は善く治まる也。之に反して上たる者、己が聰明を出し、苛察を以て事と爲し、瑣細なる事までも、一一干渉して、黑白を分ち、刑名を立てて賞罰を明かにし、以て姦僞を検すれば、民心も亦こせつきて窮屈になり、不足缺乏の心を生じて上を怨み、人情次第に險薄となり、人人其の分に安んぜず、互に機智を出し、争ひて眼前の小利を逐ひ、終には或は詐僞を働き盜竊を爲すに至る也。されば無爲の治即ち悶悶の政を施すことは、實に治國の要道たるを知るべき也。

禍兮福所倚、福兮禍所伏、孰知其極、其無正耶。正復爲、奇、善復爲、妖、民之迷、其日固已久矣。

【譯讀】禍は福の倚る所、福は禍の伏する所、孰か其の極を知らん、其れ正まることなきか。正復奇と爲り、善復妖と爲る、民の迷、其の日固に已に久し。【字義】○倚 側により掛りて在る也。○伏 中に匿れて在る也。○極 終極なり、歸する所を謂ふ。○正 定なり、常を謂ふ。孟子、公滕文の以順、

○奕本、禍兮福下、福兮禍下、並有之字。○其無正耶、弱無耶字。奕本作其無正、奕、奕作妖。○民之迷、弱民作人。奕作人之迷也。○其日固已久矣、弱無已矣、二字。



爲正者、妾婦之道也。の正に同じ。○奇 正の反對、邪なり。○善 吉なり、祥なり。○妖 妖孽なり、怪しく悪しき也。

【直解】第二節、前を承けて悶問の察察に勝る所以の理を禍福正邪吉凶などの上に就きて論ず。さて人間の萬事は塞翁が馬の故事淮南子の如く、世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬となる古今の和歌の如く、始終移り變りて定まりなく、晝は夜となり、寒は暑となり、生は死となり、榮は枯となり、反復相因りて常ならざるは、天地自然の理なり。されば禍は人の嫌ふ所なれども、福はすでに其の側に倚り掛りてある也。例へば越王句踐が會稽に棲みしは禍なれども、臥薪嘗膽の苦を忍びて憤激し、遂に霸業を成就したるが如し。又福は人の好む所なれども、福の中にすでに禍が伏し隠れてある也。例へば吳王夫差が句踐に勝ちしは福なれども、それよりして驕奢の心を生じ、遂に滅亡するに至りしが如し。禍福の互に倚伏し、循環して窮りなきこと此の如し。嗚呼誰か其の終極する所を知らんや。されば荀子大に慶者在堂、弔者在閭、禍與福鄰、莫知其門とあるが如く、禍福は常なくして得て定むべからざる者なるか。是を

以て彼の悶問として無知なる者は、故らに福を求めず、禍を避けず、何事も自然の運命に任せて心を勞することなく、身も常に安泰なり。察察として聰明を用ふる者は、強ひて禍を避け福を求むることを專一にするが故に、日夜機智を出して作爲を事とし、却つて失敗を招き罪科を犯すに至る也。又世の中の事には正と邪即ち奇との二つあり、正しき事も其の度を失すれば邪となる。例へば法令を正し賞罰を明かにするは正なれども、それが度を過ぐれば、却つて罪人が増すやうになるは邪なり。仁義は固より正なれども、其の度を失すれば邪となる。楊墨の道の如きも、墨子の兼愛は仁に過ぎ、楊子の爲我は義に過ぎて兩ながら邪道に入りたる也。されば孟子滕文公下にも楊氏爲我、是無君也。墨氏兼愛、是無父也といへり。是れ皆中庸を失ひて遣り過ぎたる也。又吉祥善事と思ひし事も、却つて變じて凶惡妖孽となることあり。例へば勤儉にして千金の富を得たるは善事なれども、それが爲めに奢侈の心を生じて費用漸く廣く、遂に産を破り家を亡ぼすに至るは妖にして凶なり。其の他是非得失利害損益などの理は皆然らざるはなし。これ亦上に述べたる禍福の互に

相倚り相伏するの意に同じ、然るに世人は迷ひて此理を知らず、孜孜として福を求めて却つて禍を招き、汲汲として善を欲して却つて妖を得る者の多きは、蓋し今日に始まりたるにあらず、遠き古よりの習にて、日を経ること固に久しき也。彼の悶悶たる者は、心昏きが如くにして、正邪善惡を分明に別つことなきが故に、却つて安心立命を得れども、察察として聰明を出す者は、それを一一分辨して無爲なること能はざるが故に、心常に勞して一日も安泰なること能はざる也。

是以聖人方而不割、廉而不剝、直而不肆、光而不耀。

○劓河上作害、劓、突作耀。

【譯讀】是を以て聖人は方にして而して割かず、廉にして而して剝らず、直にして而して肆ならず、光りて而して耀かさず。

【字義】○方 方正なり。○不割 割は斷割なり、第二十八章の大制、不割の不割に同じ、渾厚なる也。○廉 稜なり、廉隅ある也。○劓 傷なり。○肆 伸なり、十分にのぶる也。

【直解】第三節悶問の細目を説く。さて上に述べたるが如く、世の中の禍福

○第四章、和其光。

吉凶などは常なく定まりなきものなるが故に、聖人之に處するに悶問の政を以てし、聰明を出だして察察たることを爲さず、何事も控目に爲し置く也。されば常に和光同塵の徳を守りて、己方正なれども、刀にて斷割せしが如くきつぱりとすることなく、渾厚にして人の正しからざるを咎めず、又己廉隅ありて守るところ堅けれども、他人の操守なくして貪り求むることを攻めて、斷り傷くることなき也。又己真直なれども、餘りにそれを伸ばし過ぎて、他人の直ならざるを擿きて恥をかかさず。第五章にも大直、若屈とあるが如くにし、又己智徳の光あれども、深く韜み藏すやうにし、外に耀かして他人の隱惡を照しあらはす事をせざること、第四十一章にも明道、若昧とあるが如くする也。是れ皆聖人無爲の貴ぶべくして、有事の害あることを知りて、有を無に藏するの仕方にして、悶問の政の行はるる所以なり。古老の話に寛政の頃、白河の水清ければ魚住まず、濁る田沼の昔戀しきといふ落首ありし由、察察有爲の治を以て能事とする者、宜しく猛省すべき也。廣瀬建曰く、此章ノ趣意ヲ醫事ニ譬ヘテ云ヘバ、上手ノ醫者ハ、痲疾沈痾ナドヲ治スルニハ、餘リ劓劑ヲ用

ヒズ、又疾ヲモ七八分ナホシテ悉クハ治セズ、故ニ白人ヨリ見レバ、療治ガ手ヌルキヤウニ見ユ、然レドモ疾ノ悉クハ除キ難キコトヲ知リテ、左様ニスル、是ガ上手ノ處ナリ、未熟ノ醫者ハ病ノ淺深、體ノ強弱ヲ論ゼズシテ、病トサヘ云ヘバ、一概ニ是ヲ攻メル故、或ハ病愈エテ體盡キ、或ハ病愈エテ、又別ニ一病ヲ生ズル也、是ガ悶悶ト察察トノチガヒ也、老子ノ言ハ誠ニ老功ノ言ナリ、未熟ノ徒ノ知ル所ニアラズと。

○河上公、以此爲守道章。

○如、突作若、是謂早復、突作是、以早服、早復作早服。

治人事天章第五十九 六十四言

【章旨】 此章國を治め生を養ふには、嗇の一字を持し、欲を離れ性に復すべきことを言ふ。

治人事天、莫如嗇。夫惟嗇是謂早復。早復、謂之重積德。

【譯讀】 人を治め天に事ふるには、嗇に如くはなし。夫れ惟嗇なり。是を早く復ると謂ふ。早く復る之を重ねて徳を積むと謂ふ。

【字義】 ○治人 政を施して民を安んずる也。 ○事天 道德を修めて天意に背かざるやうにする也。 ○嗇 費の反對にして、愛惜の義なり、己が精神氣力並に金錢財寶などを惜みて、濫りに消費せざるをいふ。尺牘の語に自愛のことを自嗇といふにても知るべし。王註には嗇を農夫と解して「農人ノ田ヲ治ムルヤ、務メテ其ノ殊類ヲ去リテ、齊一ニ歸ス、其ノ自然ヲ全ウシテ、其ノ荒病ヲ急ニセズ、其ノ荒病スル所以ヲ除キ、上天命ヲ承ケ、下百姓ヲ綏ンズルハ、此ヨリ過グルハ莫シ」と、嗇と穡とは古字相

通じ其の説く所も、治國に切なれども、末段の深根固柢等の語句を味へば、韓非・呂氏などが吝嗇の嗇と解きしに従ふべき也。嗇とは萬事控目にする義にて、前章の聖人方而不割、廉而不剡、直而不肆、光而不耀とあるも亦嗇の道なり。○早復 復は復命第六章の復に同じく、早く其の性命の原に還る義、易卦復の不遠復、無祗悔、吉の意に同じ、早の字最も玩味すべし、人年老い身衰へ、精神氣力乏しくなりて後、心づき悟りたるにてはすでに遅しといふべし。○重積德 積は内に蓄へ聚むる也、德は天より得たる所の沖氣にして即ち無爲の德なり、重は愈、積み重ねる也。

【直解】第一節、人を治め天に事ふるの本を言ふ、夫れ人を治むる所の政事にて、己の道德を修めて天意に背かざるやうにする上にも、嗇の一字を守るより善きはなき也、嗇とは吝嗇即ちシツキ義なり、俗に吝嗇といへば、一種の惡徳として撥斥すれども、ここにては儉約の意に用ひたる也。さてかかる人は、何事にも無用の費を省き、一粒の米も、一尺の生絲も、之を生産せし農夫蠶婦の辛苦を思ひ、決して無駄に費すことなき也、又世には己の家に在りては、深く物惜すれども、役所の紙や茶や薪炭などを浪費し、錢湯に行きては湯水を濫用して何とも思はざる賤丈夫なきにしもあらず、かかる輩は天の冥加にも背き、道家の惜福の道にも悖り、決して立身長命は出来ざる也、若し夫れ人君たる者、能く嗇の道を守れば、國用常に足り、随つて課税も輕減せられ、民も悦び服する也、民の悦び服する所たれば、即ち天に事へて其の意に背かざるを得る所以也、以上は物質上より嗇の道の貴ぶべきことを説明したるものなれども、精神上に於ては、更に一層大切なる者あるなり、即ち天より受けたる虚無の德を外に顯はさずして、内に蓄へ置き、天より受けたる精神元氣を何處までも惜みて妄りに費さず、嗜欲妄念の爲めに攪亂して之を傷けざれば、精神も勞れず、氣力も衰へず、元氣常に充足して餒ゑず、身體も安泰なることを得る也、かくしてすべて何事を爲すにも控目になし、無爲自然の道を以て民を治むれば、民は悦びて自然に己に歸服するやうになるのみならず、天より受けたる虚無の德を全うして失はざるは、即ち天に事へて、天の意を奉行する所以なり、孟子告子上に學問之道、無他、求其放心而已とあり、この放心は嗇の反對にて、意馬心猿の語あるが如く、人の心

を浪費し、錢湯に行きては湯水を濫用して何とも思はざる賤丈夫なきにしもあらず、かかる輩は天の冥加にも背き、道家の惜福の道にも悖り、決して立身長命は出来ざる也、若し夫れ人君たる者、能く嗇の道を守れば、國用常に足り、随つて課税も輕減せられ、民も悦び服する也、民の悦び服する所たれば、即ち天に事へて其の意に背かざるを得る所以也、以上は物質上より嗇の道の貴ぶべきことを説明したるものなれども、精神上に於ては、更に一層大切なる者あるなり、即ち天より受けたる虚無の德を外に顯はさずして、内に蓄へ置き、天より受けたる精神元氣を何處までも惜みて妄りに費さず、嗜欲妄念の爲めに攪亂して之を傷けざれば、精神も勞れず、氣力も衰へず、元氣常に充足して餒ゑず、身體も安泰なることを得る也、かくしてすべて何事を爲すにも控目になし、無爲自然の道を以て民を治むれば、民は悦びて自然に己に歸服するやうになるのみならず、天より受けたる虚無の德を全うして失はざるは、即ち天に事へて、天の意を奉行する所以なり、孟子告子上に學問之道、無他、求其放心而已とあり、この放心は嗇の反對にて、意馬心猿の語あるが如く、人の心

は兎角物欲の爲めに誘はれて、東西南北へ馳せ廻はるもの也。其の放たれたる心を取り戻して引締むるを學問の道と爲すとの意にて、求其放心は即ち齋の道と同じ義なり。それ唯齋の道の貴ぶべきこと此の如し。されば一旦齋の道に背き、迷ひて物欲の爲めに誘はれ、心が狂ひて外へ馳せ行きても、これではならずと、早く悟りて其の本性に復歸するを早く元の道に復るといふ、易卦復に不遠復とあるは是れ也。早く其の本性に復歸し、重ねて日日虚無の徳を積むやうにするを、愈重ねて徳を加へ積むとはいふ也。

○可以有國上、韓非有則字。

重積徳、則無不克。無不克、則莫知其極。莫知其極、可以有國。

【譯讀】重ねて徳を積み、則ち克せずといふことなし。克せずといふこと無ければ、則ち其の極を知ることなし。其の極を知ることなければ、以て國を有つべし。

【字義】○克 能なり。○莫 知其極、極は際限なり、之を用ひて窮まらざる也。

【直解】第二節、身に無爲の徳を積み、之を實地に行へば、長く民を治め國を有つことを得る所以を言ふ。上に述べたるが如く、早く悟りて性命の原に復歸し、日に無爲の徳を積み重ねれば、天下の事は何にても能くせずといふことなき也。すでに何事も能くせざる所なければ、第四十八章に無爲而無不爲とあるが如く、其の作用の廣大なること、窮まり盡くる所を知らざる也。人君若し能く此の如くなれば、實に立派なる明君といふべく、以て民を治めて、長く其の國を安んじ有つべき也。

有國之母、可以長久。是謂深根固柢、長生久視之道。

【譯讀】國を有つる母、以て長久なるべし。是を根を深くし、柢を固くすと謂ふ。長生久視の道なり。

【字義】○母 本の義にて、重積徳をいふ、即ち虚無の徳なり。○深根固柢 根は横にひろがる根なり、柢は豎に深く入る根なり、俗に牛蒡根といふ、樹木はこの二つの根を深く固むるによりて倒ることなく榮ゆる

○韓非作深其根固其柢無是謂二字。道下有也字。

也、第五十四章の善建者不拔、とあるは是れ也、河上本に柢を帶に作る、帶は花<sup>へ</sup>趺なり。○長生久視 長く世に生存して、久しく視息する義、即ち長生するを謂ふ。

【直解】第三節、再び冒頭の莫如、齋の句を承けて國を治め生を養ふの法を言ふ。夫れ齋の道を守りて重ねて虚無の徳を積むことは、實に國を有ち得べきの母即ち本なり。この本だにあらば其の國は以て長久に治まり榮ゆべき也。又之を以て生を養へば、身も健かに長命を保ち得べき也。これを根を深くし、柢を固むるといふ也。夫れ樹木の幾百年を経ても枯れず倒れず、枝葉の益、榮ゆるは、其根柢が深く土中に入りて暴風にも抜けざれば也。それと同じく人よく齋の道を守りて、精神氣力を收斂して濫りに放出することなく、長く之を保全するは、即ち一身の根柢を深く固くする所以にして、これぞ長く此世に生存して久しく人間に視息することを得るの道なる、嗚呼齋の道たる大にしては國を有ちて太平を致し、小にしては身を保ちて長命なることを得べし。豈貴きの至ならずや。江村專齋が年一百に及びても視聽衰へず、後水尾上皇召し見て修養の

術を問ふ、專齋對へて曰ふ、臣平生唯一つの些の字を持す、飲食些く、思慮些く、養生些し、此他に豈術あらんやと、上皇聞きて之を善とし、鳩杖錢帛を賜ひしとぞ、些は即ち齋の義と同じ、專齋の如きは善く老子の齋の道を實踐躬行せし者と謂ふべき也。朱文公曰く、老子ガ治人事天、莫若齋、夫唯齋、是謂、早復、早復、謂之重積徳、トハ他ニ説キ得テ曲ニ盡クサル、重積徳トハ先キニ已ニ積ム所アリ、復養フニ齋ヲ以テス、是又之ヲ加ヘ積ムヲ言フ也、修養者ノ如キハ、此身未ダ損失スル所アラズシテ、而シテ又加フルニ齋養ヲ以テス、是レヲ早ク復シテ重ねテ積ムト謂フ、若シ其レ已ニ損シテ而ル後ニ養フハ、則チ之ヲ養フモ、僅ニ其ノ損スル所ヲ補フベシ、之ヲ重ねテ積ムト謂フベカラズ、某ノ此身ノ如キハ、已ニ自ラ衰耗ス、破屋ノ如ク相似タリ、東ヨリ扶クレバ西ニ倒ル、修養セント欲スト雖モ、亦何ゾ能ク益スルアラシヤ」と、朱子の如き大賢すら、猶ほ遲暮の歎あり、早復の二字最も宜しく玩味すべき也。

### 治大國章第六十 四十八言

【章旨】此章治國の要は、無爲自然の道を以てし、下民を傷害せざるに在ることを言ふ。

#### 治大國若烹小鮮

【譯讀】大國を治むるは、小鮮を烹るが若し。

【字義】○小鮮 小サキ生魚なり。○如烹小鮮 かきまはさざるに喩ふ。王註に「擾サザル也」とあり、從ふべし。

【直解】第一節、主意を喝破す、此章の眼目なり。それ小サキ生魚を烹るに、箸や杓子にて、かきませる時は、皆碎けて形を失ふ。故にかきませず、そつとして烹る也。大國即ち天下を治むるも、それと同じく、躁がしく多事にして、無暗にかき擾せば、碎け傷きて害多く、靜かにそつとして無爲なれば、其の眞を全うす。故に其の國彌大いなれば、人君は彌其の心を靜かにし、無爲の徳を以て大まかにして自然の儘に之を治むれば、民は皆其の徳

○河上公、以此爲居位章。  
○沈曰、此章言治國貴不傷者字。  
○韓非、國下有

○天下下、韓非、突竝有者字。

に化して、各己の分に安んじ、風俗も淳厚となりて、天下は善く治まる也。此一句は實に萬古治道の要訣とすべき也。

○以道蒞天下、其鬼不神、非其鬼不神、其神不傷人、非其神不傷人、聖人亦不傷人、夫兩不相傷、故徳交歸焉。

【譯讀】道を以て天下に蒞めば、其の鬼神ならず、其の鬼神ならざるのみにあらず、其の神も人を傷らず、其の神も人を傷らざるのみにあらず、聖人も亦人を傷らず、夫れ兩ながら相傷らず、故に徳交歸す。

【字義】○道 虚無自然の道にて、易簡安靜を主とする也。○蒞 上より下に臨みて治むる也。○鬼 陰(地)の神、神は陽(天)の神なり。○不神 二つの不神の神は神の靈異にして、祥妖を降すを謂ふ、列子帝に物無疵、癘、鬼無靈響焉の靈響は即ち神の義なり。一説に神の祟と解す、亦通す。○兩 鬼神と人と也。

【直解】第二節は、前に掲げたる主意を申明カサネテアする也。夫れ無爲の道を以て天下に君臨し、易簡安靜を專一として、法令などの施設を事とす

ることなければ、百姓各、其の生を安んじ、各、其の業を治め、人人皆善にして罰すべき者なければ、鬼も其の靈異を顯す所なき也。管に其の鬼の靈異を顯す所なきのみならず、其の神も亦祟を爲し妖厲を降して、人を傷り害する所なき也。何となれば、天下の萬民皆善良なれば、鬼神は善に福すべきも、淫に禍すべき者なければ也。管に其の神が人を傷り害する所なきのみならず、聖人上に在りて、無爲にして天下をかき擾すことなく、天地と其の徳を合すれば、陰陽調和し、風雨時あり、年穀豊穰にして、水旱疫癘の厄なく、天下の萬民、心泰く身安く、老を養ひ、幼を慈み、熙熙皞皞の化行はれ、一人の罪を犯す者もなければ、刑措きて用ふることなきに至る。故に聖人も亦人を傷り害せずといふ也。夫れ鬼神の厲祟を爲すは、則ち鬼神が人を傷り害する也。人之を驅禳するは、則ち人が鬼神を傷り害する也。今それ鬼神と人と相和して兩ながら相傷り害せず、故に其の徳交、歸して全きことを得る也。而して其の之を致すの道は、小鮮を烹るが如く、無事安靜にして、天下をかき擾すことなきに始まる、以て無爲自然の功化の廣大無邊なるを見るべき也。韓非子老解に、凡ソ法令更あらたマレバ、則

チ利害易ハリ、利害易ハレバ、則チ民ノ務變ズ、務變ズレバ之ヲ業ヲ變ズト謂フ、故ニ理ヲ以テ之ヲ觀ルニ、大衆ヲ事トシテ、而シテ數、之ヲ搖カセバ、則チ成功少ク、大器ヲ藏シテ、而シテ數、之ヲ徙セバ、則チ敗傷多ク、小鮮ヲ烹テ、而シテ數、之ヲ撓みだセバ、則チ其ノ澤そとヲ賊こヒ、大國ヲ治メテ、而シテ數、法ヲ變ズレバ、則チ民之ヲ苦ム、是ヲ以テ有道ノ君ハ、靜ヲ貴ビテ、變法ヲ重ンゼズ、故ニ曰フ、大國ヲ治ムルハ、小鮮ヲ烹ルガ若クスとあり。韓非は功利を尙ぶ、未だ老子の大を得ずと雖も、亦參考の資と爲すべき也。



○河上公、以此爲謙德章。

○奕本、大國者下、有天下之三、字、兩靜並作靖、以靜爲下、作以、其靖故爲下也。

大國者下流章第六十一 八十三言

【章旨】此章、大國能く下ることを貴ぶ、故に天下之に歸することを言ふ。

大國者下流、天下之交、天下之牝、牝常以靜勝、牡以靜

爲下

【譯讀】大國は下流なり、天下の交なり、天下の牝なり、牝は常に靜を以て牡に勝つ、靜を以て下ることを爲す。

【字義】○交 交り會する也、江海は天下の百川の交會する所なり。○牝

牝牡は獸のメスとヲスと也、雌雄は鳥のメスとヲスと也、然れども古は互に通用す、故に王註に、牝ハ雌ナリ、雄ハ躁動貪欲ナレドモ、雌ハ常ニ靜ヲ以テス、故ニ雄ニ勝ツ也とあり。

【直解】第一節、主意を言ふ、小國が大國に對して頭を下げるは當然の事にして、何も不思議に思ふことはなけれども、大國が四鄰の小國に對して腰を低くして謙遜すれば、人人其の德に感服して、交、歸服して來る也、之

其善下之也、故能爲百谷王、是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之。

○第二十八章、知其雄、守其雌、爲天下谿云云。

を譬ふれば、江海が大にして卑下に處るが故に、天下の百川悉く之に流れ込むが如き也、其の天下の民が德を慕ひて四方より寄り集る上よりいへば、天下之交といふ、江海は天下の百川の交會する所たるが如き也、又大國が富強を恃みて他國を侵害するなどの事なく、終始靜虛謙下の德を守るが故に、四鄰の民が慕ひ來るは、即ち天下の牝たる也、牝は柔弱靜虛にして能く下り、以て多くの子を生むによりて喩へたる也、夫れ牝は常に靜かにし柔弱なるを以て、却つて能く動き躁ぎて剛強なる所の牡に勝ちて之を制するを得る也、又靜かにして少しも争ふことなく、能く物に下ることを爲すもの也、この爲下の下の字は、首句の下流の下の字を承けて言ふ、吳幼清註に、牝ハ先ダチ動キテ以テ牡ニ求メズ、牡ハ常ニ先ダチ動キテ以テ牝ニ求ム、動キテ求ムル者ハ損ヲ招キ、靜カニ俟ツ者ハ益ヲ受ク、故ニ以靜勝牡トイフ、動キテ求ムル者ハ上ニ居リ、靜カニ俟ツ者ハ下ニ居ル、故ニ以靜爲下ト曰フと、此一節は第六十六章に江海之所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王、是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之とあると并せて考ふべき也。

○突本取小國  
取下有於字取  
大國取下有於  
字或下以取或  
上無故字兩者  
上無夫字

故大國以下小國則取小國小國以下大國則取大國  
故或下以取或下而取大國不過欲兼畜人小國不過  
欲入事人夫兩者各得其所欲故大者宜爲下

【譯讀】故に大國以て小國に下るときは、則ち小國を取る。小國以て大國に下るときは、則ち大國に取らる。故に或は下りて以て取り、或は下りて而して取らる。大國は人を兼ね畜はんと欲するに過ぎず。小國は入りて人に事へんと欲するに過ぎず。夫れ兩者、各其の欲する所を得。故に大なる者は宜しく下ることを爲すべし。

【字義】○取小國 取は得る義、小國の民心をなつげ得るを謂ふ。○取大國 大國の爲めに得らるるをいふ、見棄てられず受け容れらるる義、中庸の獲乎上の獲に同じ、其の心を得るを謂ふ。○兼畜 兼は遺す所なき也、一視同仁を言ふ、畜は養なり。○入 入朝なり。

【直解】第二節、大國小國共に宜しく下るべきを并説して、大國の最も宜しく

下るべきことを言ふ。上述の如くなるが故に、大國が腰を低くし謙遜して四鄰の小國に下れば、小國は其の徳に感服して皆歸往す、則ち小國の民心を此方へ懐け従はしむることを得る也。又小國が頭を下げて大國に下れば、大國に受け容れられて、長く見棄てらるることなく、其の庇蔭を蒙りて安全なることを得る也。かるが故に、或は大國が下りて以て小國の民心を懐け従へ、或は小國が下りて以て大國に受け容れられて安きことを得、兩者各其の望の如くなりて、其の所を得る所以は、皆能く卑下して先方の心を得るに由る也。抑も大國が小國に下る本意は、廣く天下の民を兼ね養はんと欲するに過ぎず。又小國が大國に下る本意は、大國の心を得、入朝して之に事へ、長く其の庇蔭を蒙らんと欲するに過ぎず。夫れ大國小國の兩者各其の欲する所の望を遂げ得ると雖も、小國はそれによりて侵伐の患を免れ、僅に己の領土を保全するを得るのみ、天下をして之に歸せしむること能はず、而るに大國能く下れば、則ち廣く天下の民を兼ね養ひて遺す所なく、長く天下に君臨することを得べし。其の欲する所を得ること極めて大なり。されば大國は最も宜しく人

に下るべき也。老子の此論は、姑く利を以て人を誘ひて道に入らしむるのみ、林註に「此章ハ大國小國ノ欲スル所ヲ得ルコトヲ借リテ、以テ道ヲ知ルノ人ハ宜シク謙ナルベク、宜シク静ナルベキヲ論ス、人ヲ教フルニ自ラ下リテ以テ勝ヲ取ルコトヲ教フルニ非ズ」と、此説これを得たり。孟子王下に齊宣王問曰、交鄰國有道乎、孟子對曰、有、惟仁者爲能以大事小、是故湯事葛文王、事昆夷、惟智者爲能以小事大、故太王事獯鬻、勾踐事吳、以大事小者、樂天也、以小事大者、畏天者也、樂天者、保天下、畏天者、保其國とあるは、此章の義と略同じ。

道者萬物之奧章第六十一 八十言

【章旨】 此章、道は善人の爲めにもなり、不善人の爲めにも爲る、故に貴きこと天下に比なきを言ふ。

道者萬物之奧、善人之寶、不善人之所保、美言可以市、尊行可以加人、人之不善、何棄之有。

【譯讀】 道は萬物の奧なり、善人の寶なり、不善人の保せらるる所なり、美言以て市るべく、尊行以て人に加ふべし、人の不善なる、何の棄つることか之れあらん。

【字義】 ○奧 室の西南隅、最も深隱と爲す、祭祀及び尊者の常に處る所、故に奧は深邃と尊貴との二義を兼ね、論語八の其媚於奧の奧に同じ。 ○保 保聚の義、之に依りて安を求むる也。 ○美言 格言なり、第八十一章の美言不信の美言とは異り。 ○市 賣なり、可以市は以て人に説き與ふべきを謂ふ、市の下に人の字を補ひて看るべし。 ○尊行 行の尊

○河上公、以此爲道章。  
○沈曰、此章言不善人不宜棄。

○奕本、奧下、有也、字寶上、有所字。  
○尊行可以加人、奕作尊言可以加於人。

ぶべき者をいふ。動靜法あり、舉止苟もせざる也。○加 上なり、以て人の上に加ふべき義。

【直解】第一節、道は善人の爲めにも、不善人の爲めにも最も尊ぶべき者なることを言ふ。抑も道は天地萬物を生成する所の本源にして、人家の奥の如く、最も深くして且つ尊きもの也。先づ此一句を提起して深く道の尊きことを贊美し置き、以下に之を説明して曰ふ、それが故に、善人此道を得て以て己の有と爲せば、則ち安富尊榮なることを得、其の眞の寶たること、珊瑚球琅などの以て比すべきに非ざる也。不善人即ち愚不肖者は此道を得て以て己の有と爲すこと能はずと雖も、亦此道を保ち守り、以て禍を轉じて福と爲し、之に頼りて身の安きことを得る也。豈萬物の奥にあらずや。されば道に合する善き格言は、其の價高くして以て人に賣り與ふべし、即ち人に説き與へて善に導くべく、道に合する尊き行は、以て人をして自然に敬服せしめ、推されて人の上となることを得べき也。是に由りて之を觀れば、天下に生れながらにして不善なる者なし、其の不善なる者は、皆此道を知らず、物欲の爲めに心迷ひて非違を爲すに

○第三十二章、道常無名、樸雖小、天下不敢臣、王侯若能守萬物將自賓。

○第三十五章、道之出口、淡乎其無味。

○第二十一章、聖人抱一爲天下式。

由るのみ。若し此道を悟り知りて、無爲無欲なることを得ば、これ迄の不善は忽ち消えて善となるべき也。されば不善なる者と雖も、感化善導すべからざる者なし、唯美言尊行之之を化し導く者なきのみ。苟も之を化導せば、天下の人皆善人となるべし、故に人は不善なりとて、何の棄つることかあらん、唯この道を知らしむべきのみ。

故立天子置三公。雖有拱璧以先駟馬、不如坐進此道。古之所以貴此道者、何不曰求以得、有罪以免耶。故爲天下貴。

○奕、無坐字。道下有也字。何下有也字。

【譯讀】故に天子を立て三公を置く。拱璧以て駟馬に先だつこと有り、雖も坐して此の道を進むるに如かず。古の此の道を進むる者は何ぞや。求むれば以て得罪あるも以て免ると曰はずや。故に天下の貴たり。

【字義】○拱璧 合拱の大璧なり。○駟馬 四匹の馬。即ち一乘の馬なり。古は進物を出すに、先づ一品を進め、次ぎて又一品を進むる也。駟馬をば

外に陳ね、拱壁を執りて命を將ふ、故に拱壁先駟馬といふ、蓋し進物の極めて重き者なり、左傳襄公十年の公賄、荀偃、束錦、加壁、乘馬、先吳壽夢之鼎の註に「四馬ヲ乗ト爲ス(中略)古ノ物ヲ獻ズルニハ、必ズ以テ先ンズルアリ、今壁馬ヲ以テ鼎ノ先ト爲ス」とあるは以て證とすべし。○坐 跪坐なり。○進 猶ほ獻といふが如し、先儒多くは進を解して進徳修業易文傳の進と爲すは誤れり、莊子在宥の齋戒以言之、跪坐以進之の之は聰明仁義禮樂聖智の八つの者を指して言ふ、所謂道なり。○罪 過惡を謂ふ。

【直解】第二節、前を承けて道の天下に貴きことを言ふ、夫れ天下の億兆は均しく是れ人なり、而るに一人を立てて天子と爲し、又天下の賢人君子を求めて之を三公の位に置き、相與に賦税を出して之を養ひ、鞠躬して之に事ふる所以は、是れ何の爲めかといへば、他なし、天下の人をして皆悉く善人たらしめば、別に天子を立て三公を置かずとも可なり、然るに天下は皆善人のみにあらず、不善の人亦少からず、故に天子を立て三公を置きて、萬民の師表となし、教へ導くに此道を以てし、それをして悉く善に化せしむる也、されば合拱の大いなる璧玉を駟馬に先き立てて

○第十章、愛民治國、能無爲乎。

進物とするありと雖も、此無比の寶たる尊き道を進物として、跪き坐して之を献上するには若かざる也、さて古の人が此道を貴びたる所以は何故ぞや、他なし、何事にても此道に由りて求むるあれば、其の求むる所得べく、又過惡ある者も、一旦此道に反りて悔い改むれば、則ち身を全うし禍を免ると曰ふにあらずや、此道は實に此の如き大いなる利益のある者なり、故に萬物の奥として天下に比なき貴き者とせらるる也、求以得とは凡そ事を爲すに有心有爲にして、權謀術數を用ふる時は、必ず何處かに差支を生じて、失敗を招くに至ると雖も、此無爲自然の道に由りて之を求むれば、必ず安全に其の功を成就することを得るをいふ、蓋し此道は吾人人類が生れし時に、天より稟けて吾人の身に在る者なるが故に、此道に従つて求むれば、往く處として差支を生ずることなく、圓滿にすらすと成就することを得る也、書經堯典に克明俊德、以親九族、九族既睦、平章百姓、百姓昭明、協和萬邦、黎民於變時雍とあるが如き、又舜が親に事ふるの道を盡して、頑父も豫を底すに至りしが如きは、是れ皆求以得の明證と爲すべき也、先儒多くは孟子盡心上の求則得之、舍則失、

レ之を以て此章の求以得を解釋するは誤れり。

【辨正】王本求以得を以求得に作るは非なり。俞樾曰く「唐景龍碑及ビ傳奕本竝ニ求以得に作ル、正ニ有罪以免ト相對シテ、文ヲ成ス、當ニ之ニ從フベシ、古之所以貴此道者、何ノ九字ヲ句ト爲ス、乃チ問辭ヲ設ケ爲シテ、以テ人ヲ曉ス也、不曰求以得、有罪以免耶トハ人能ク道ヲ修ムレバ則チ求ムル所ノ者以テ得ベク、罪アル者モ以テ免ルベキヲ言フ也、不曰ノ字ト耶字ト相應ズ、猶ホ豈不以レ此邪ト言フガ如シ、謙シテ敢テ質言セザル也、下ニ故爲天下貴ト云フハ、則チ自ラ問ヒテ還自ラ答フル也」と、此說妥當從ふべき也。

爲無爲章第六十三 七十八言

【章旨】此章、聖人敬慎にして事を易らず、故に能く大を成して後難なし、而して其の本は無爲に在ることを言ふ。徳清曰く「此ハ聖人道ニ入ルノ要妙ヲ曰ヒ、人ニ示スニ真切ノ工夫ヲ以テスル也、凡ソ有爲ハ智巧ヲ謂ヒ、有事ハ功業ヲ謂ヒ、有味ハ功名利欲ヲ謂フ」と。

爲無爲、事無事、味無味、大小多少、報怨以德、圖難於其易、爲大於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、是以聖人終不爲大、故能成其大、夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人猶難之、故終無難。

【譯讀】無爲を爲し、無事を事とし、無味を味ふ、小を大とし、少を多とす、怨に報ゆるに徳を以てす、難を其の易に圖り、大を其の細に爲す、天下の難事は、必ず易に作り、天下の大事は必ず細に作る、是を以て聖人は終に大を

○河上公、以此爲「恩始章」。  
○沈曰、此章及次章、言敬慎不敗、皆無爲之事。

○奕本、難下、天下、竝有乎字。兩天下下、竝有之字。諸下、易下、竝有者字、無難下、有矣字。

爲さず故に能く其の大を成す。夫れ輕諾は必ず信寡く、多易は必ず難多し。是を以て聖人すら猶ほ之を難んず。故に終に難きことなし。

20  
47  
196  
28 112  
1316  
33  
41 1316  
12  
11

【字義】○無味 淡泊なり、聖人の言は何の奇もなく、何の甘き所もなき也。第三十五章に道之出口、淡乎其無味とあるは、是れ也。○大小多少 敬慎にして小を以て大と爲せば、物自ら難きことなく、少を以て多と爲せば、事自ら殆きことなし。能く始に慎めば也。先儒多くは此四字を下の怨の字に繋けて、大怨小怨多怨少怨と説けども、慣慣たる牽強の説なり。

【直解】此章は聖人は敬慎にして本を務むることを主として言ふ、本を務むれば末は必ず治まるが故なり。本とは太極即ち虚無の道を斥していふ。無爲無事無味は皆虚無自然の道をいふ。爲無爲とは何事も物の自然に任せて之を爲し、一切智巧などを用ひざれども、爲さずといふこと無き也。舜の南面垂拱して天下大いに治まりしが如し。第三十七章に道常無爲、而無不爲とあるは是れ也。事無事とは自ら求めて事業を企て起さんとする心なく、何事も自然に任せて爲さずといふこと無き也。例へば水の性は低きに流るる者なり、故に禹の水を治むるや、自然の道に従ひ

○第五十七章、  
我無事而民自  
富。

○第七十九章、  
和大怨必有餘  
怨。

高き處より低き處に導き行りて之を治めたるが如し。孟子下告子に禹之治水、水之道也とあるは是れ也。又虚無自然の道は、功名利欲などの如き濃かなる甘き味あるものにあらず、如何にも淡泊にして何の味もなきもの也。其の味のなき處が、却つて眞の味のあるもの也。それを能く玩味すれば、心身の養となるを味、無味といふ也。聖人は能く事の幾を見て微を慎む、故に小なりとて輕んずることなく、小を以て大と爲して慎むが故に、物自ら難きことなく、又少なりとて輕んずることなく、少を以て多と爲して慎むが故に、事自ら殆きことなき也。凡そ衆人の忘れ難きは怨なり、故に古來身を棄てて之に報ゆるもあり、家を亡ぼして之に報ゆるもある也。然れども怨に報ゆるに怨を以てし、互に報い報いて已む時なく、心安からざる一生を送ることは、愚の至といふべき也。唯聖人は無心に物我の閒なく、怨に報ゆるに恩を以てするが故に、先方もそれに感じて怨を消し、心安く世を過すことを得る也。これを以て常に無爲無事なるを得る也。昔、鄰人の我が畑の瓜を掻きて害する者あり、それに對して却つて、鄰人の瓜畑に水を灌ぎて其の生長を助けやりたる者あり

り賈誼新書退讓篇是れ怨を息めて亂を防ぐ所以の道なり。聖人は先見の明あるが故に、能く後日困難となるべき事も、最初の平易なる時に圖りて之を處置し、後日大事となるべき事も、最初の細小なる時にうまく之を處置する也。天下の難事は必ず其の始の平易なりとして輕んずる所より起り、天下の大事は必ず其の始の細事なりとして輕んずる所より起る者なり。六韜土守に涓涓不塞將成、江河熒熒不救、炎炎奈何、兩葉不去、將用斧柯、とあるも、亦これを戒めたる也。是を以て聖人は終に大事に手を下すことなく、小を以て大と爲し、少を以て多と爲し、事の少小なる時に、慎みてそれぞれの處置を爲す、故に能く其の盛徳大業を成就し、天下萬民の矜式する所となりたまふ也。されば何事を爲すにも敬慎を專一とし、人より依頼を受けても、先づ第一に己の力にて實行し得らるるや否やを篤と考慮し、確かに實行し得らるる事ならば之を承諾すべく、到底實行し得らるる自信なくして、輕輕しく之を承諾すべからず。一時は氣の毒のやうなれども、斷然謝絶すべき也。彼の輕諾即ち易受合易受合を爲す者は必ず信少くして、其の事を果さざる者なり、それが爲めに却つて人に迷惑を

○第八十一章  
美言不信

かけて人の怨を招くは、世間に其の例少しとせず、これ古人の然諾を重んじ、黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず史記季布傳といふ所以なり。それと同じく、易即ち物事を侮り輕んずること多き者は、必ず後日困難なる事の多く出で來るもの也。それ故に事を爲すには宜しく慎重なるべく、輕忽なるべからず、是を以て才徳のすぐれたる聖人すら、猶ほ事を易しとせず、難しとして始を慎み、注意に注意を加へたまふ、故に終に難事といふものなき也。況や衆人に在りては、事を爲すに最も敬慎にすべく、輕易にすべからざる也。書經蔡仲之命に慎厥初、惟厥終、終以不困、不惟厥終、終以困窮とあるは、即ち此と其の義を同うす。

【辨正】世を御し物を遇するには、寧ろ厚きに過ぐるも、薄きに失すること無きを要す、此章の報怨報怨以徳は、第四十九章に善者吾亦善之、不善者吾亦善之、徳善とあると同意にして、怨も亦之に報するに徳を以てすれば、則ち其の餘は徳を以てせざることなき也。乃ち聖人天下の爲めに其の心を渾して皆之を孩にする所以章同なり。漢の文帝の南越王尉佗の兄弟を貴くし、吳王に几杖を賜ひしが如きは、稍之に近しと爲す、而るに論語問憲



に或曰、以德報怨、何如？子曰、何以報德？以直報怨、以德報德とありて、朱註に「或人ノ稱スル所ハ、今老子ノ書ニ見ユ、徳ハ恩惠ヲ謂フ也」とあるを以て、儒家の見解によりて老子を批難する者あるは當らず、況や禮記表に孔子の語なりとして、以德報怨、寬身之仁也、以怨報徳、刑戮之民也とあるをや。

○河上公、以此爲守微章。

○突本、破作列、獨作淨、未有上、未亂上、並有其字。  
○毫本作豪。

其安易持章第六十四

一百二十三言

【章旨】 此章前章を承けて敬慎なれば敗事なし、而して其の本は無爲自然に在ることを言ふ。

其安易持、其未兆易謀、其脆易破、其微易散。爲之於未  
有、治之於未亂、合抱之木生於毫末、九層之臺起於累  
土、千里之行始於足下。

【譯讀】 其の安きは持し易く、其の未だ兆さざるは謀り易く、其の脆きは破り易く、其の微なるは散じ易し。之を未だ有らざるに爲し、之を未だ亂れざるに治む。合抱の木も毫末より生じ、九層の臺も累土より起り、千里の行も足下より始まる。

【字義】 ○其安 其は國家を斥す、安は危難の反對なり。 ○持 猶ほ守といふが如し、持盈持滿の持と同じ。 ○其未兆其脆其微 三つの其の字

は禍亂を斥して言ふ。○未有 上文に未兆とあるは是れ也。○未亂 上文に其安とあるは是れ也。○合抱 兩手にて抱く所をいふ。○毫末 毫毛の末なり、以て萌芽の微細なるに喩ふ。孟子王梁惠に明足以察秋毫之末とあるは是れ也。○九層 傳奕本層を成に作り、焦弱侯も亦之に従ふ、爾雅に丘の一重再重なるを一成再成と爲す、呂覽初音に有城氏有二佚女爲之九成之臺とあり、成に作るを是と爲す。○累土 極めて少しの分量の土なり、一簣の土といふが如し、土を累積する義と解するは非なり。

【直解】 第一節終を始に慎むべきことを説く。國家の勢已に危難に迫りては、之を保ち守ること難けれども、其の安く平かなる時に及びて、之を守すれば、保ち守ること易き也。書經周に制治於未亂、保邦於未危とあるも此義を言ふ也。蓋し國家無事にして閒暇ある日には、以て功を興し易きなり。それと同じく人も少壯にして未だ情欲などの兆さざる時に、身を修むれば、品行を持守し易き也。禍亂の已に生じたるは、之を謀ること難けれども、其の未だ兆さざる時に及びて、豫め之が謀を爲せば、容易に

○第九章、持而盈之、不如其已也。

禍亂を未だ生ぜざるに銷すことを得べし。又假令禍亂を未だ兆さざる前に銷すこと能はずと雖も、禍亂の萌芽纔かに成りて、猶ほ其の脆く弱き時に及びて、早く之を破らば、破ること易く、禍亂の胚胎纔かに聚りて、猶ほ微小なる時に及びて、早く之を散すれば、散すること易き也。これ前章に所謂圖難於其易と其の義を同うす。されば易繫辭下傳に子曰、知幾其神乎とあるが如く、何事も幾先を制して早く事を處置するを貴ぶ、されば禍亂は未だ有らざる時に及びて、早く之を處置して終に有らしめざるやうにし、國家は未だ亂れざるに及びて、早く之を治めて、終に亂れざらしむるやうに心掛くべき也。凡そ天下の事物、其の始は皆微細なる者なり、其の微細なる時に及びて、早く之を處置すれば、大事に至らずして容易に事を濟すを得る也。譬へば兩手にて抱き廻はす程の大木も、其の始は毛の末端の如き微細なる萌芽より生じたる者にて、其の萌芽の時なれば、爪先にても摘み取るべきも、かかる大木となりては、斧を用ひざれば、伐り倒すことは出来ざる也。六韜守に兩葉不去、將用斧柯とあるも此意を言ふ也。それと同じく九重の高き臺も、其の築きし始は僅に一簣の

少量の土より起り、又千里の遠き旅行も其の始は足下の一步より始まる也。されば何事もすべて微細を積みて漸くに鉅大となること此の如し、以て始を慎むことの最も大切なる所以を知るべき也。前章に天下難事、必作於易、天下大事、必作於細とあるも、亦此意をいへる也。

爲者敗之、執者失之。聖人無爲、故無敗、無執、故無失。民之從事、常於幾成、而敗之。慎終如始、則無敗事。是以聖人欲不欲、不貴難得之貨、學不學、復衆人之所過、以輔萬物之自然、而不敢爲。

○突本、聖人上、有是以二字、幾上有其字、事下有矣字、復上有有字、爲下、有也。

【譯讀】爲す者は之を敗り、執る者は之を失ふ。聖人は爲すことなし、故に敗ることなし。執ることなし、故に失ふことなし。民の事に従ふ、常に幾ど成らんとするに於て而して之を敗る。終を慎むこと始の如くなれば、則ち敗事なし。是を以て聖人は欲せざるを欲す、得難きの貨を貴ばず。學ばざるを學び、衆人の過ぐる所に復す。以て萬物の自然を輔けて而して敢て爲さず。

【字義】○爲 心を用ひ力を入れて作爲する也。○執 固く我意を執りて變通すること能はざる也。爲者敗之、執者失之の二句は、第二十九章にも出づ。

【直解】第二節、終を慎むの道、無爲自然に在ることを説く。すべて世の中の事は無爲自然の儘に任すべき也。然るに之に反して自ら求めて事を作爲する者は、屹度失敗し、固く我意を執り、強ひて事を成し、遂げんとする者は、必ず仕損ずるもの也。是を以て聖人は、虛無自然の道を體して、自ら求めて事を作爲すること無きが故に、失敗することもなく、又我意を固く執りて是非とも事を成し、遂げんとする心なきが故に、決して仕損ずるといふこと無き也。而るに衆人は、此理を知らず、爲すことあるの心を忘るること能はざるが故に、其の事に従ふを見るに、幾んと成る、即ち九分九厘まで出来あがりたる處にて、心弛みて終を慎むこと能はざるが故に、惜むべし。其の事敗れて成就せざる也。されば諺に、油斷大敵といひ、書經旅に爲山九仞、功虧一簣といひ、說苑慎に曾子曰、官怠於宦成、病加於

○第二十九章、將欲取天下而爲之、吾見其不可得也。天下神器、不可爲也。○第三十八章、無爲而無不爲。

○第三十七章、無名之樸亦將不欲、不欲以靜、天下將自定。  
○第三章、不貴難得之貨、使民不爲盜。

小愈禍生於懈惰、孝衰於妻子、察此四者、慎終如始、とある類は、皆この慎終の箴言ならざるなし。されば爲すことあるの心なく、無爲自然の道に循ひて、始より終に至るまで、戰戰兢兢、日に慎みて敢て荒怠することなれば、則ち決して事を敗ることなき也。是を以て聖人は欲することなきにあらずと雖も、衆人の欲する外物をば、却つて欲せざることを欲する也。故に衆人の貴びて欲する所は、却つて聖人の賤む所なり。得難きの貨即ち金銀珠玉の類は、衆人の貴ぶ所にして、聖人は之を貴ばざる也。又聖人は學ぶ所なきにあらずと雖も、衆人の學ばざる所を學ぶ也。故に衆人が無暗に學問學問といひて競うて才智を増し、技巧を争ふが如き奇妄の學を爲すことを好まざる也。第二十章に絶學無憂とあるも亦此義をいふ也。故に衆人が才智に任せ作爲を好み、自然の常道に反して行き過ぎたる所あるを引き返して、本來の天性に復歸せしむる也。かくして何事も無爲を專一とし、以て萬物の自然に因り順ひて其の發達を輔け導き、敢て故らに手を出して無理に事を爲すことを爲さざる也。例へば桃李の如きも、春暖の候に至れば、自然に美花を開き、やがて良き實を結ぶものなれば、園丁は只雜草惡竹などの害を爲す者を芟鋤して之が培養を加へ、以て其の木の天性を全うせしむるまでにて、敢て無理なる事を爲さざる也。而るに自然に背きて強ひて早く花を賞せんとして、故らに人工を加へ、温室などにて咲かしめたる花は、何とはなく生氣乏しく、色も香も劣るのみならず、實も結ばざる也。故にすべて物事は自然を本とし、其の自然を輔くるやうにすれば、勞せずし功成ると雖も、自然を待たず強ひて無理なることを爲せば、勞して功なきもの也。この輔萬物之自然、而不敢爲の十字は實に老子の學說の大綱本領にして、所謂無爲無事不言不欲等の義も、即ち此十字の意に外ならず、凡そ天地萬物各自然の才性あり、聖人は其の自然の才性に順ひて之を輔導するのみ、例へば火の性は然え、水の性は濡す、因りて烹飪の利を制す、馬の性は善く走る、則ち之をして輕車に駕せしむ、牛の力は強し、則ち之をして重荷を挽かしむ、皆其の自然の才性に順はざるはなき也。而るに彼の爲者執者の如きは、則ち然ること能はず、徒に私智を用ひて自然に背き、物の才性に乖戾すること、猶ほ鐵を以て舟車を作り、皮を以て宮室を作るが如し、其の

其安易持章第六十四

失敗して救止すべからざるは怪むに足らざる也。讀者善く此十字の意を解せば、則ち通篇無爲無事等の義に於て、思半に過ぎん。

○河上公、以此爲淳德章。  
○沈曰、此章言爲國不貴智。

○以其智多、突作以其多知也。以智作故以知。突賊下有也。字不以智治國、智作知、福下有也。字。

古之善爲道章第六十五 六十七言

【章旨】 此章前章を承けて治國の道は、自然に順ひ朴實を以て本と爲すに在りて、智術を貴ばざるを言ふ。

古之善爲道者、非以明民、將以愚之。民之難治、以其智多。以智治國、國之賊。不以智治國、國之福。

【譯讀】 古の善く道を爲す者は、以て民を明かにするに非ず、將に以て之を愚にせんとす。民の治め難きは、其の智多きを以てなり。智を以て國を治むるは國の賊なり。智を以て國を治めざるは、國の福なり。

【字義】 ○愚 無智にして眞を守り、自然に順ふをいふ、かかる徳ある人は拙にして愚なるが如く見ゆるもの也。第六十七章の不肖と同じく、世人の所謂愚不肖にして、眞の愚にはあらず。 ○智 道の大全を知りて、物の終始を覽るは、眞智にして貴ぶべきも、ここの智は私智を指す、俗に所謂猿智慧なり。 ○賊 害なり。

○第三章、虛其心實其腹。

○第五十六章、知者不言、言者不知、塞其兌、閉其門云云。

【直解】第一節、智の害にして愚の福なる所以を説く。古の清淨無爲の道を爲し行ふ者は、民をして才智ありて聰明ならしめんとするにあらす、將に民をして愚ならしめんとする也。これ聰明なる者は、兔角才智に任せ、て察察を喜み、巧み詐ること多く、道の累となれども、愚かなる者は、無智無欲にして自然の性に順ひ、質朴にして無爲に安んずれば也。されば民の治め難きは、畢竟民の猿智慧多くして巧み詐ることを事とするを以て也。この故に上の人、智を以て國を治むれば、民も亦智を貴びて之に應じ、上下互に巧み詐りて私利を營み、得難きの貨を争ふやうになり、終に世の中が騒ぎ亂るるに至る也。故に智を以て國を治むるは國の害毒なり。之に反して上の人、智を以て國を治めざれば、民も亦猿智慧を貴ばず、恬靜淳朴にして、各、其の分に安んじ、上下共に無事にして安泰なることを得るは、實に國の福利といふべき也。劉仲平曰ふ、智ヲ以テ國ヲ治メザル者ハ、天ヲ開クモノ也、智ヲ以テ國ヲ治ムル者ハ、人ヲ開クモノ也、天ヲ開ケバ則チ順ナリ、順ナレバ則チ其ノ事トスルコト無キ所ニ行ハル、其ノ政嚴ナラズシテ治マル所以ナリ、人ヲ開ケバ弊ナリ、弊ナレバ則チ太

察ニ失ス、其ノ民淳ナラズシテ缺クル所以ナリ、故ニ曰フ、以智治國、國之賊、不以智治國、國之福ト」と、此説之を得たり。

知此兩者、亦楷式能知楷式、是謂玄德。玄德深矣、遠矣。與物反矣、乃至於大順。

【譯讀】此の兩者を知るも亦楷式なり、能く楷式を知る、是を玄徳と謂ふ。玄徳は深し遠し、物と反せり、乃ち大順に至る。

【字義】○楷式 楷は模なり、式は法なり、國を治むるの法式をいふ。第二十章に聖人抱一、爲天下式とあるは是れ也。○玄徳 玄妙にして測るべからざる徳をいふ。○深矣遠矣 下に徹するを深といひ、旁に周きを遠といふ。○大順 至順に同じ、理の至順至當を謂ふ。

【直解】第二節、前を承けて玄徳大順を言ふ。上述の如く智を以て國を治むるは國の害にして、智を以て國を治めざるは國の福たる兩端の理を明かにし、其の孰れか得にして孰れか失なる所以を能く辨へ知るも、亦治國の法式たるを知る也。故に此法式を知りて之に違はず、徳を以てして

○奕本、知此兩者上、有常字。兩楷、竝作楷。上式下有也字。能、彌作常。

○彌本、乃上、有然後二字。至下、無於字。

○第七十八章、  
正言若反。

智を以てせざる者は、其の徳深遠にして測り難し、故にこれを玄妙の徳と謂ふ。それ玄徳は深くして測られず、遠くして周からざるはなし。さて衆人の情は智を貴ばざるなきに、玄徳ある人は、獨り之を賤む、故に國を治むるに民を明かにせずして之を愚にし、智を以てせずして無智を以てす。これ物の情と相反する也。此の如くにして人人樸の道を守り、各、其の性分を盡し、萬物各、其の生を遂げ、其の所を得、無爲にして化し、大順即ち大いに自然の道に順ふに至るを得る也。帝堯の世、天下大いに治まり、民は今頃如何なる天子の上に在すかも知らず、壤を撃ちて日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉世紀王と歌ひしが如きは、實に大順の極致にして、老子の最も仰慕する所たるなり。此章の義は第三章の不尙賢、使民不爭、常使民無知無欲、また第五十八章の其政悶悶、其民醇醇、其政察察、其民缺缺などの語と并せて考ふべき也。

○河上公、以此爲後己章。

江海爲百谷王章第六十六

七十八言

【章旨】 此章、人君無我にして謙下なれば、天下の民、之に歸服すること、猶ほ水の下に就くが如くなるを言ふ。

江海所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王。是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之。

【譯讀】 江海の能く百谷の王たる所以の者は、其の能く之に下るを以て、故に能く百谷の王たり。是を以て聖人は、民に上たらんと欲せば、必ず言を以て之に下る。民に先だたんと欲せば、必ず身を以て之に後る。

【字義】 ○江海 君に喩ふ。 ○百谷 臣に喩ふ。 ○王 王は往なり、天下の歸往する所なり、呂覽賢下に帝也者天下之適也、王也者天下之往也とあり。

【直解】 第一節、比喻を引きて聖人能く人に下るが故に、推されて人の上たることを言ふ。揚子江や大海は天下の百の谷川の水の流れ込む所にし

○奕本、下之下、有也字。以言上、有其字。身上、有其字。

○第三十二章、  
譬道之在天下、

猶川谷之於江海也。第六十一章。大國者下流。○第三十九章。貴以賤爲本。高以下爲基。是以王侯自稱孤寡不穀。此其以賤爲本耶。非乎。

○奕本處上作處之上。處前作處之前。害下有也字。以其不爭上。有不字。

て、百の谷川の王者たる所以は、自ら高き處に居らずして、善く下りて卑汚の地に居るが故に、能く其の江海の大を成して、百の谷川の王者たるを得る也。以て謙徳の尊き所以を知るべき也。是を以て聖人は推されて民に上たらん欲せば、必ず言葉を卑くし以て之に下り、自ら稱するにも孤寡といひ不穀といひて謙遜したまひ、憂勤憫勞の意、詔勅の間に溢るれば、天下の民はすでに其の言を聞きて其の心を信じ、共に推して上に在らしむる也。又民に先だたと欲せば、必ず己の身を以て退きて人の後に著くやうにする也。此の如く自ら謙遜して少しも高ぶること無きが故に、民は自然に其の徳に感じ、悦服して四方より集り來り、共に之を推し戴く。故に身は常に民の先に在ること、猶ほ百谷の水が悉く江海に歸し赴くが如くなる也。第七章に聖人後其身而身先、外其身而身存とあると并せて考ふべき也。

是以聖人處上而民不重、處前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不爭、故天下莫能與之爭。

【譯讀】是を以て聖人は上に處りて而して民重しとせず。前に處りて而して民害とせず。是を以て天下推すことを樂みて而して厭はず。其の争はざるを以て、故に天下能く之と争ふこと莫し。

【字義】○重 輕重の重なれども又累の意を帶ぶ、重き物は己を壓する嫌あるに由る。○害 己を害すと爲して之を忌むを謂ふ。左傳 成公十三年 晉、三郤害伯宗、譖而殺之の害に同じ。

【直解】第二節前節を承けて其の效驗を言ふ。すべて驕り高ぶる者は、之を惡みて排斥するは人情の常なり。然るに聖人は上述の如く、言を卑くして之に下り、身を以て之に後れ、常に謙徳を以て民に臨みたまふ。是を以て民の上に居ると雖も、民はそれを重苦しとして煩ひ厭ふことなし。又民の前に居ると雖も、民は之を邪魔と爲して忌み嫌ふことなき也。すでに重く煩はしとせず、又邪魔とせず。是を以て天下の民喜び樂み、推し戴きて己の上に在らしめ、前に在らしめて厭ひあくことなし。抑も聖人の上に居たまふは、人と争ひて其の地位に升りたまひたるに非ず、其の善く謙下にして争ふことなきを以て、自然に推し戴かれて上に居たまふ。



也。故に天下誰一人として能く之と對抗して争ふ者とはなく、民は悦びて長く其の下となりて服従する也。第八章に上善若水、水善利萬物而不争、處衆人所惡、故幾於道矣とあるも亦其の卑下の地に在るを謂ふ也。此章首に説く所と其の義相同じ、其の善く下るを以ての故に、天下亦與に争ふ者なき也。

○河上公、以此爲三寶章。

○我、奕作吾、彌我下、有道字。

天下皆謂章第六十七 九十八言

【章旨】此章、不肖を貴び三寶を重んずべき所以を言ふ、先儒以て老子一部の第一切要の章なりと爲す。

天下皆謂我大似不肖。夫惟大故似不肖。若肖、久矣其細也夫。

【譯讀】天下皆我を大なれども不肖に似たりと謂ふ。夫れ惟大なり、故に不肖に似たり。若し肖たらば久きかな其の細なること。

【字義】○我 老子自ら謂ふ。○不肖 猶ほ無似といふが如し、善に肖すして愚かなる義、才徳技能なきを謂ふ。○肖 善に肖て賢き義。○久矣其細 其細久矣の倒語法、細は瑣細の義。

【直解】第一節、先づ道の大を言ひ三寶の綱と爲す。天下の人舉りて我を評して老子は廣大なる人なれども、これといふ才徳技能もなく、漠然として不肖即ち愚かなるに似たりと、そこで老子自ら申譯をして曰ふ、夫れ

唯廣大なればこそ素人眼には不肖に見ゆるなれ、若し素人眼に賢く見ゆる程ならば、久しき昔よりすでに瑣細なる小人にて貴ぶに足らざる也と。老子嘗て曰ふ、吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚史記老とす。べて眞の大人物は素人眼には何處となく間が抜けて愚物の如く見ゆるもの也。大石良雄の如きも、性寛裕沈毅にして、齷齪として自ら用ふることを爲さず、時人能く識る者罕なり、長矩も亦之を疎んじ、要職に在りと雖も、事に於て與ること鮮し、良雄以て意に介せず、常に韜晦して露さず、人皆斥して癡と爲す赤穂四十とあるが如く、少年の頃は世人より馬鹿物扱せられたる也。そこが良雄の人物の偉大なる所以なる也。彼の銀行員、會社員などの如く、邊幅を修飾して、目先の氣轉が利きて一寸小利口に見ゆる者の中には、大人物は一人もなき筈なり。

我有三寶、寶而持之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲天下先。慈故能勇、儉故能廣、不敢爲天下先故能成器長。今

○我、突作吾。  
○寶而持之、突作持而寶之、弱作持而保之、韓非同突慈故上。

舍慈且勇、舍儉且廣、舍後且先死矣。

突有夫字。三舍下、突並有其字、舍作捨、同。死矣、突作是、謂入死門。

【譯讀】 我に三寶あり。寶として而して之を持す。一に曰く慈。二に曰く儉。三に曰く敢て天下の先と爲らず。慈なり故に能く勇なり。儉なり故に能く廣し。敢て天下の先と爲らず。故に能く成器の長たり。今慈を捨てて且に勇ならんとし、儉を捨てて且に廣からんとし、後たることを捨てて且に先だたんとす。死せん。

【字義】 ○三寶 玄妙なる老子の道をこの三寶の中に約せしなり、姑く三に分ちて名づくとも雖も、其の實は一の無爲のみ。 ○持之 持は保ち守る也。 ○慈 慈仁をいふ、佛經にては慈悲といふ、慈悲は拔苦與樂の義にて、無價寶、即ち價が付けられぬ程、極めて貴き寶なりとす。 ○儉 儉約なり。 ○廣 施與すること博き也、韓詩外傳六卷に君子者、身儉而施博とある博に同じ。 ○不敢爲天下先 謙をいふ、下文の舍後の後に同じ。 ○成器長 成器は萬物をいふ、ここは萬民を斥していふ、其の君長たる也。 ○且 將なり。 ○後 先の反對、不敢爲天下先を一字に約したる也。

也。○死矣 必ず敗亡するをいふ。

【直解】第二節前を承けて大道の目たる三寶を言ふ。さてはこれより我が道を語らん、抑も我に三つの寶あり、我は之を寶として大切に保ち守れり。此三寶は我が大道の細目にして、第一に慈といひ、第二に儉といひ、第三に不敢爲天下先といふ。第一第二は共に一字にて表はしたれども、第三のみは六字にて表はせり、これも一字に約すれば謙の字の義となる。さて此慈、儉、謙の三寶こそ即ち我が道とする所なれ。慈は物をあはれみ愛む心にて、儒家にていふ仁なり、而るに第五章に聖人、不仁また第十九章に絶仁棄義とありて、老子は仁が嫌なるに、ここにては仁即ち慈を貴びて三寶の首に置きたるは、或は相矛盾するに似たる疑あれども、決して然らず、老子は其の名を賤みて其の實を貴ぶ。不仁、絶仁の仁は相對的偽仁を斥し、ここの慈即ち仁は絶對的眞仁を斥す、第八章の善仁、第三十八章の上仁と其の義相近し。老子を讀む者は、辭を以て意を害すること勿れ、儉は財用時間精神等を儉約して浪費せざる事なり、第三の不敢爲、天下先は謙虛の徳を守りて争ふことなく、人に先だちて進むことを爲

?

さざる也。次に三寶の效驗を言はん、夫れ人は心に慈愛あるが故に、能く物に恐れざる勇氣が出づる也。慈愛は原因にして勇氣は其の結果たる也。論語問に仁者、必有勇とあるも其の義は同じ。例へば雞の雛を育つる時には、雌と雖も怒りて人に突きかかるは、其の證なり、又乳虎とて子持の牝虎は最も勇猛なる者なるが故に、漢書帝威に寧見乳虎、無カレト値帝威之怒、其暴如此とありて、最も猛烈なる者の譬に引きたる也。曩に日清日露の戰役に皇軍の全勝を得たりしも、畢竟兵士の忠君愛國の至情が凝結して一團となり、勇銳の氣、平日に百倍せし結果に外ならざるべし。次に財用のみに限らず、時間にも精神にても、儉約して浪費せざるを貴ぶ。例へば人君儉にして身に奉すること薄く、無益の土木などを興すと無ければ、國用常に乏しからず、故に其の惠を施すこと廣く大いなる也。漢の文帝嘗て露臺を作らんと欲し、大工を召して之を計るに直百金なり、帝曰く、百金は中人即ち中等の生活を爲す人の十家の財産なり、何ぞ臺を作ること爲さん漢書文帝紀とて工を興すことを罷められたれども、天下の民には屢、租税を免除したまひしが如きは、其の證なり。また音

○第二十八章、  
 模散則爲器、聖  
 人用之則爲官  
 長。

聲にても長時間の演説などを爲さんとする前には、無駄口を利かず、つとめて音量を儉約して浪費せざるやうにすれば、一旦演壇に立てば音吐朗朗として廣く滿場の聴衆に徹底することを得る也。其の他の百事も類推して知るべき也。次には不敢爲天下、先即ち謙虚にして人と争はず、萬事扣目にして出過ぎたる事を爲さざれば、萬民其の謙德に歸服し來る。故に能く成器即ち萬民の君長として其の上に立つことを得る也。例へば漢の高祖が夫レ籌策ヲ帷帳ノ中ニ運ラシ、勝ヲ千里ノ外ニ決スルハ、吾子房(張良)ニ如カズ。國家ヲ鎮メ百姓ヲ撫シ、餽饗ヲ給シ糧道ヲ絶タザルハ、吾蕭何ニ如カズ。百萬ノ兵ヲ連ネ、戰ヘバ必ず勝チ攻ムレバ必ず取ルハ、吾韓信ニ如カズ。此三人ノ者ハ人傑ナリ、吾能ク之ヲ用フ、此レ吾ガ天下ヲ取リシ所以ナリ。史記高祖紀といひて謀略治國攻戰の事をば、此三人に分任し、所謂適材を適所に用ひて、己は到底此三人に如かずと謙遜して、妄りに容喙することを爲さず、故に能く其の力を籍りて天下を一統し、帝位に升ることを得たる如きは、其の證なり。成器の長とは、もと天子を斥したる語なれども、之を小にしては一國の總理大臣、一軍の總

大將の如きも、亦それに當る也。例へば三十七八年戰役に聯合艦隊司令長官たりし東郷大將の如きも、此場合に於ける成器の長なり。大將が空前の偉勳を奏しながら、是は平八郎の力にあらず、一に天皇陛下の御稜威に由ると曰ひしが如きは、即ち敢て天下の先と爲らず、故に成器の長たる所以なり、亦其の陛下は、親ら伊勢大廟に詣り、此度の大捷は一に皇祖皇宗の威靈に頼ることを感謝したまひしが如き、敢て天下の先と爲らず、故に能く成器の長となりたまふ所以なり。今舍慈且勇ニナラントより死矣までの四句は三寶を用ひざる者の害を言ふ、前述の如く勇は慈より出づる者なるを、其の本たる慈悲を捨てて始より勇ならんことを求め、財用などを廣く用ふることを得るは、儉約より出づるものなるを、其の本の儉約を捨てて始より其の用の廣大ならんことを求め、人に先だつことを得るは、不敢爲天下、先即ち謙遜して人の後につくより出づるものなるを、其の本の人の後たる謙德を捨てて、始より人に先だたんとするが如き思慮の淺き者は、品こそ變れ、孰れも其の身命を亡失するに至るべき也。